

至也。舊冬十二月廿六日正使ニハ外國奉行池田筑後守副使ニハ河津伊豆守御目附ニハ河田鑑之助列々長州返歸之儀ハ序ニ任三夷へも説得可仕旨厚申含置候へ共いつき手後レ跡事と相成申たる哉何様此儘ニ差置候而ハ面前之大忠前條之通ニ候へハ免哉せん角哉と之御評議區々之處いかさま一應扱を入強而押留候方上策也とて近來無双之秀手勝麟太郎此人大ニ才能之譽レ有之義蒸氣船上乗役外ニ御目附某様被差添崎陽港ニ御急發御和解之申立ニハ長州ハ各方御新聞書之通多端難差通曲事有之就而ハ急ニ糺明之上相當之所置ニ及候筈ニ而侯伯都城ニ會合談判最中折柄ニ貴國ハ攻伐ニ被及候而ハ國法之妨無此上治國之情を以得斗御恕察可有之私憤を晴さん爲拙國之法斷ニ御用捨無之と申存意ニ候ハ、是迄之條約ハ統而反古ふらすや左候へハ近國之侯伯防授可致ハ必定自然左様之筋ニ變態致候へハ日と夷と之向合と直に相成永く交易之道も絶可申ハ斷然之勢ふらす哉先此趣々大綱之申立其外臨機應變之由夷蠻へハ亦復大金を釣出し内々踊躍神酒を上ケ可申と之風説ニ御座候

二月十四日開取

二月五日轟木武兵衛自殺を企てしも成らず

〔小笠原備前日録〕

二月五日雨

井上氏、告轟者軍中而將自死之事、且問拔齒哉否之決、々不拔矣、

二月七日我藩日田警備兵の一部を撤退すべき旨を屋代増之助に通報す

〔他國狀扣〕

一屋代増之助様

二月七日

一筆致啓上候彌御堅達可被成御座珍重奉存然之日田表御警衛として人數三十人被差出置追而援助人數之内五十人被差出置候處當時浮浪士躰之者亂妨之儀茂無御座一統穩ニ相聞申候間右援助五十人之儀之此節一先引取せ申管御座候尤向後異變之儀茂御座候ハ、何時ニ而茂急速ニ差出候様嚴重之手當被申付置管御座候間左様御聞置可被下候此段爲可得貴意如是御座候恐惶謹言

尚々本文之趣被差出置候郡奉行ともは茂此節申越候事ニ御座候間引取申候段之右之者共より御答可仕々奉存候以上

二月八日參豫閣老等二條關白の邸に會し長州處置につき議決する所あり

〔叢書類至密稜書〕

一同月(二) 八日二條様に參豫閣老方御會議ニ而長州御取扱御談判關東方使者被差立御糺明之上承伏於不致者此方様御初九列候に討手被仰付ニ御評決之由

二月十日長岡護美松平春嶽を訪ひ因循の幕習を打破するの要を説く

〔子爵長岡家文書〕

快晴不堪穉情候扱明日朝五ツ比罷出今般ハ拙が實心吐露幕臭論等萬端初而發語仕候間決心爲天下御斷被下間敷盡過ハ藝に參り候間其前早々不盡

長

良

春嶽 大著 眼 公

二仲無事且宇伊州にハ今朝異論

〔續再夢紀事〕

元 治 元 年

五四七



十日朝四ツ時過長岡良之助殿來邸せらる公(春)對面せられしに長岡殿物語られしハ昨日登營總裁閣老に面會して時事を論せしに何の答辯もなく實に因循の甚しきものと認めし故程よく退營して一橋邸に到り更に時事を談せしか一橋ハさすがに因循とハあらされとも其意見ハ行ハれざるよし察するに總裁閣老等ハ矢張京地の事情通せず參豫の方々を疑ひ居るふるへし斯くては天下の事一も爲すへからされハ今日ハ何事よりも因循の幕習を打碎するか肝要ふるへし云々  
ふりき 福密備忘

二月十日岡藩老臣中川藏人を熊本に遣して去年來我藩の周旋せしことを謝し且つ今度藩主上京留守中のことを依頼す

〔尊攘錄御建白御國議〕

子二月十日竹田御使へ應對一件(岡藩使者仲島瀧右衛門御)  
井新次郎二月七日夕來齋

九郎右衛門殿竹田御使者に御應對只今御出席ニ相成申候此節ハ急成儀ニ而口上書等持參も無之由御使者之趣意ハ竹田侯去年京地ニ而御都合惡敷御家之興廢ニも係り可申候處 此方様御周旋ニ而御首尾も立直り 龍顏御拜 天盃御頂戴も有之一旦御歸國猶御上京之旨之趣御病氣ニ而御延引尤去冬々ハ漸々御廿ニ而追々と御上京と申ニ相成居候處此節京都表ニ而御上京御願濟ト申ニ相成候由依之來ル廿七日頃ニ竹田表御出立ト相究候由然ルニ去年來之何事も 御家に御相談ニ相成萬端御依頼之處此節之一條御相談もなく御所望ニ相成候之御内輪無據御急ぎ之譯合有之右之通候得共甚以御不本意ニ被思召との事且又御上京御留守中萬一非常之儀も有之節之御家老衆之内御一人竹田へ御出被下諸事御差圖被下度御頼被遊との事ニ御座候山扱又前文内輪御急と申子細ハ竹田世子清丸様 御目見御願之旨之由當年を過し候得之來年之無據御差支明後年ならでハ六ヶ敷餘り延引ニ付只今之内ト御意之由是ハ表向之御口上ニ而無之御家老衆迄内々話ト申事之由御座候申上之出役之御奉行衆々申上ニ相成等との事ニ御座候間卒度入御聞置申候以上

二月十日  
小山池松也  
御 兩 人 様

相良也  
亭

八

二月十七日竹田御使者に御返答

越中守様時候御安否御尋問被仰達候趣申上候處忝思召候

一修理太夫様今度御上京之儀御願濟ニ相成珍重思召候右之御儀ニ付而御相談可被爲在等之趣御取急不被及其儀御不本意ニ思召候旨且又御内輪無據御譯柄被爲在候次第共委曲被 仰進候趣具ニ申上候處段々被入御念候御儀思召候若御心被附候儀茂御座候ハ、不聞被 仰進ニ而可有御座不日之御上京御旅中氣候茂不順之折柄別而御自重專一ニ思召候此段御答旁被仰達候

此一通ハ鎗田軍之助方口上ニ而申述

御上京御留守中萬一非常之儀茂有之節之御頼被成候段委細御噂之趣重役中も承知仕御間柄之事ニ付自然之節ハ御助勢勿論之儀ニ御座候得共御藩法も可有御座候間重役杯被差出候而も御指圖ケ間敷儀之差扣罷在候儀申迄も無之乍然心付之儀之聊無服藏御相談可仕候間此段下拙方得御意候様申聞候尤右之趣一ト通ハ越中守様に茂申上ニ相成候事ニ御座候

〔小笠原備前日録〕

二月十日 陰

朝、依例一同出 君前、平野氏接對於中川侯之使、老臣故及遲期、使節之意、蓋侯依朝京師、留守之事、欲從本藩之議、厚依頼之旨也、○米田氏與書於予曰、今夜至會於平埜氏、欲議方今上下一和之形勢、其本立、而平埜氏以有病辭故止、二月十一日幕府は征長軍の部署を定め内命を我藩外十數藩に傳へて豫め出師の準備を調へしむ

〔自筆御用狀扣〕

文久二年慶應元年迄  
元 治 元 年



以別紙申達候去ル十一日之夕御留守居御呼出ニ而閣老より太守様に御封書御渡ニ相成至密を以急ニ届上候様との旨ニ付究而不容易御用筋ニ可有之御二方様に茂一方御懸念ニ而内々御開封被爲在候處別紙寫之通ニ付同十三日志水又七早打ニ而被差下御差上ニ相成候事ニ御座候間爲御心組入御披見申候御奉書機密間ハ格別其外ハ之重々至密ニ被成置候様存候右付而ハ重疊御不安意之筋被爲在御存付之次第御建白之筈御座候且又近來朝廷幕府之御模様並參豫衆御役人方之御都合寸斗喰合兼候氣味有之專御心配ニ相成居申候右様之事躰ハ申ニ不及前文御封書之趣付而御存意之次第も委敷被仰上候たえ沼田勘解由儀早打ニ而昨日此許被差立候事ニ御座候此段爲可申達如此御座候已上

二月十七日

右 吉市左衛門  
右 吉將監

郡 夷 則 殿

猶々會津侯春嶽様被仰蒙之趣別紙入御披見申候右付而も甚以御懸念被爲在候以上

〔文久四年日記〕

水野和泉守様より今日二條御城に御呼出ニ付罷出申候處大廣間二ノ間に罷出候様御目付中山藤七郎様御差圖ニ付罷出申候處松平大和守様水野和泉守様有馬遠江守様御列座ニ而別紙御封書一通和泉守様より被成御渡右者御内用向被仰向候間外々には不洩様密々御國許に差上候様との趣右御同人様被仰渡候

二月十一日

中山左次右衛門

別紙

細川越中守

此度松平大膳大夫父子に御糺問之筋有之萬一承服不致節者御征伐可被遊思召ニ付其節者打手被仰付候間用意可致旨御内意被仰出候事

右一通

○付札、人數計可差出事 松平修理太夫○付札合印

御名代 紀伊中納言殿  
副將 松平肥後守  
差添 有馬遠江守

松平安藝守  
松平備前守

右之通被 仰付候間諸事受差圖盡力可被致候事

小笠原大膳大夫

右一通

阿部主計頭  
脇坂淡路守

右之者共に茂相達候間諸事可被談候事

右一通

松平阿波守  
松平相模守  
松平出羽守

〔公武に御建白〕

文久四年二月十一日二條御城に御留守居御呼出閣老方御列座ニ而太守様に之御封書被成御渡密々ニ御國許に差上候様被仰間候此日阿州侯藤州之御世子福山侯ハ御登城薩被仰間候州此方様備前小倉籠野者御留守御呼出也

二月十一日久留米藩主使者を熊本に遣し勅命によりて上京すべきを報じ且つ我藩主の共に上洛して戮力王事に盡さんことを誘ふ

〔越前外九藩へ御使者被進候一件〕

〔文久三年八月以來〕

春寒退兼候得共彌御安全被成御座珍重思召候然之中務大輔様追々被蒙 勅命今般御上京被成候然處 越中守様ニ之此

元 治 元 年



節 御上洛一條深ク被成御盡力候趣ニ付昨年來被仰合候御趣意茂御座候間御一同御上京被成候而當時柄御盡力被成御周旋度思召候右之段被仰談度御使者を以被仰進候

彌御安全被成御座珍重思召候然之今般御上京ニ付當月中旬御發途之管御座候就而ハ昨秋御頼談之通此節茂御領内御通行佐賀關々被成御乘船候付諸事差支無之様御頼被仰進候勿論當時勢御馳走々間敷議堅御斷ニ相成度依之御使者を以右之段被仰進候

御使者

公事奉行	久	住	與	十
三百石高				郎
中小姓、御側目附	田	中	紋	次
藏米八拾俵				郎
				上下五人
				上下四人

(右久留米藩の使者二月十日參着)

〔小笠原備前日録〕

二月十二日陰

藤本常記來告、昨日應久留米使節之意、

二月十一日山田十郎獄中より書を其妻に送りて心事を陳べ幼兒の教育等を委囑す  
〔探禱録〕

或人從圍中送妻手簡之事

我等このたび 皇國の御爲御國の御ためと存し込日夜寢食を忘れ親に離れ奉り妻子を捨候て身力をつくし候處官府の御不審をかふふりかくのこく囚繋と相成申候誠に恐縮之事共に候君上は第一先祖父母に對し奉りいと恐く候去な

から天地に向ひ神明に對し候而は聊も恥候事ハ無之候併我ら智見のたらざる所より或は過生も候ハんか其過ちに依て我身如何成行候とも是天命の然らしむる所なれば決而なけき悲み候へからすむかしより精義の土程薄命なる者は無之候我ら賤き身にたとふへきにハ候らはねともかしこくも和氣の清丸と申御かたは弓削の道鏡 帝位を窺し時にあたりて 御寶祚に大功有御方にて候へとも當時は穢丸と呼て島に流され給ひしか後世の今に相成候而は天津日とともに其忠誠を照し玉ふ遠くしては元弘建武の昔公卿の御方には北畠親房顯家顯信藤原の俊基資朝の卿を始め奉り武士にては新田義貞楠正成行菊池の武重武光侯など皆々朝家之御爲に其身は更なり其國も其子孫も南朝とともに亡ひ給へり今日にいたりては其忠誠日月と光を競ふなり足利氏の天下の武將になり玉ひしといへとも今日にいたりては賊名をうけ後の世のあざけりとなり玉ふされは人は一代名は末代と申ものにて候さて又近くしては戊午の禍にかりし吉田寅二郎安島帶刀鶴飼吉左衛門父子梅田源次郎など又長岡宿にて死去いたし候人々庚申上巳の節井伊を討取し十七人の大關森山杯と申人々壬戌の春伏見にて討死いたし候有馬新七田中謙助列を初國の爲天下の爲に身命を盡し候人々かしこくも 朝廷より下し文給りて子孫をして祭を厚くし長く鬼神をして血食せしめ候様 勅旨賜り誠に冥加にあまるといともかしこく候我ら賤き身を以古の名將賢君子碩德之人々にたとふべきには候はねとも其國に盡し 朝家に盡し候志は誰にもおとり申べき我らも壬戌の春よりこのかた我身のあるをはしらすして只道のある所嫌疑をさけず不憚忌諱或は不測の淵にのそみ或は虎狼の窟を踏候て微志を盡し候故歎かしこくも 朝廷より學習所御用懸被仰付賤き名をも雲井に聞えあけ或は石清水 御幸の供奉被仰付其時着せし布衣其儘給り或は 勅使の供奉被命候て身にあまるたまものとも下し給り我ら身に取りては其ありかたき御恵み誰人にもまさりぬべし我ら子孫たらむものは我志を彌繼々に繼て千萬年の御德澤と我此御大恩を奉報へき也そもノ我邦君は足利氏の御血脈にて渡らせ給ふまゝ我ら幼少よりの志は微賤の身たりといへとも若天下事あらむときは 朝廷の御爲に第一の御忠誠被爲盡す恐御家祖足利氏の穢名を償せられ御忠誠の御芳名を千萬世に揚させ給ふ様身命あらんかきりは盡力致候心底に候處一昨年以來 朝廷の御變動に付是



そ我等平生志し候時節と存し同志申談し權門を不遜勢家を不憚君臣の大義を以建言等仕候處固り君上にも賢明にましませは早く其御志し被爲在既に今日のことく爲皇國盡力被遊候間我ら素願も已に達せり我此度國へ歸り候て京師正邪之辨等申上候志しに候處かくのとき繫囚となり志相違し不申遺恨不少候へとも是も運命に候へは可致様も無之候何卒我子孫たらむものは我志を相繼て我邦君をして中臣の饒足公の如くならしめ新田楠菊池氏の上にたち給ふ様忠誠盡力可致候是 朝廷へ對し候ても忠誠の第一にて候也汝女たりといへとも我妻なれば能々我遺訓を相わきまへ人にゆびさゝれぬ様に子供精々我遺教を相守り國の御爲天下の御爲屹度相立候様養育之程吳々御頼入候也汝の身に國への忠義我へ之貞操はこれにます事候ハし昔楠正成討死し玉ひし時御子正行十三歳になり玉ひしか其母いとも賢く渡らせ給ふ人にて父君之遺教を能々守り玉ひ厳しく教育し給ひければ廿五歳にて打死ましまして父君に劣らぬ忠義之名を今の世までも傳し玉ふ賤しき我等か身にたとへ候もをこましく候へとも楠母之迹を學ひ玉はん事のみ頼入候也何事もノ、加屋益坂などへ御相談有之度候若加十郎御教育届兼も候ハ、越鳥坂へ御頼被成候か又は住江小坂方へ御預け可被成候この兩家は能く士道を守る家の習しに候へは宿に置候よりも却て身の爲と存候御母様御事いか計御悲可被成これのみ心にかゝり候兄弟共に御孝養奉盡候事もなにかたくかゝる身と相成候ては不孝之罪いと恐く候併ながら古より忠ならんとすれば孝ならず如何とすへき事あたはず何とこそもし初子供我らにかはり御心を慰可被申吳々頼存候我らも武運強く再び歸り候ハ、芽出度孝養可仕候けがも漸々快く相成五月比にも相成候ハ、歩行も出来可申御氣遣無之様存候立花越鳥坂へも御變り無之哉宜敷頼入候何事も何事も筆にまかせ心にまかせ不申候かしく

二月十一日

おと き殿

信

道 花押

二月十二日長岡護美書を島津久光に贈り明日陽明家に候せんことを約し且つ筑藩世子姫路に滞り同藩士内訌を生したることを告ぐ

〔子爵長岡家文書〕

護美公より

島津大隅守様に被進御書寫

寸楮謹呈愈御清安奉賀候陳ハ昨日如御約束明日晚景より陽明家へ御出被遊候様奉願候且筑世子者愈只今も姫路滞留之由家臣之中中村某牧丙杯殺害之次第明日拜語之上委細可申上候呵々早々頓首

清和 十一日

島 大 隅 守 様

玉机下

長 良 之 助

極之早筆海函可被下候不盡

二月十四日我藩久留米藩の使者に答ふるに目下長岡護美上京斡旋中なるを以て藩主は其

勧誘に應じ難き旨を以てす

〔越前外九藩へ御使者被進候一件〕

文久三年八月以來  
(二月十四日有馬中務大輔様方之御使者に御答奉行業被申達)

中務大輔様追々被爲蒙 勅命今般御上京被成候處越中守様ニ茂御一同御上京被成候而御戮力被成御周旋度思召候旨委細御口上之趣越中守様に申上被成御承知候然處 公武御一和等之儀ニ付而之一年來種々被成御周旋候既ニ昨春之御上京度被成猶又御上京之思召ニ候得共不易時勢何時夷賊襲來茂難量藩屏之任ニ被爲在候得之御領内海岸之御手當炮器之製造等專御差急被成加之日田天草御警衛被蒙 仰候ニ付而之兩所に御人數茂被差出置殊ニ一統人心動搖未居合不申候折柄御在國ニ而御鎮靜不被成候而之不慮之變事茂御心遣被成候付且又御持病茂御差發御難儀被成旁御名代として長

元 治 元 年

五五五



岡澄之助殿御上京諸事御委任被成長岡良之助殿ニ茂京都カ 御内諭之旨被爲在一同御上京當時專御盡力被成候事ニ而御周旋筋之儀之越中守様御上京茂御同様之儀ニ御座候尤今度 將軍様御上洛ニ付而者是非越中守様ニ茂御上京不被成候而難叶可有御座哉之儀内々 公邊之御模様茂御伺被成候處澄之助殿御上京御周旋有之候事ニ付強而御上京ニ及申間敷との御様子茂御伺取被成候右段々之通ニ而京地之御模様次第ニ早速御上京茂可被成候得共只今御上京ニ申儀之何分御出来難被成候條態々之御示諭ニ難被應儀之甚御心痛ニ思召候との旨御座候

彌御安全被成御座珍重思召候然之今般爲御上京追々御發途當御領内御通行佐賀關カ被成御乗船候付諸事御差支無之様との趣且御馳走ケ間敷儀堅御斷尤當時柄ニ候得共外御道筋共違御領内之儀ニ付御同勢も格別御減少ニ而何角と御心添被成進度段委細以御使者被仰進御口上之趣被成御承知候然處右御通行筋之儀之猶更邊鄙之所柄ニ而諸事御不都合之儀可有御坐候此段御答被仰進候

二月十四日日本藩偵吏は閣老井上正直英國公使と横濱に會して談判せし要領筆記寫を提出す

〔尊攘録新聞紙并夷情探索等〕

井上河内守 英國使に 對話書

- 一 應挨拶畢而
- 一 拙者は井上河内守ニ而候始而面會致し候
- 一 難有奉存候今日は天氣相之處態々御出張被下別而難有奉存候
- 一 此度ハ遠洋無恙再渡被致大悦いたし候以來懇親之儀頼入候
- 一 私儀歸國以來二ヶ年相立又々再渡仕候尤再渡之存念ハ無之候得共國王之特命を奉し再渡いたし候儀ニ有之私儀先年在留中廉々御引合之趣歸國之上建白いたし兩港兩都延期御頼之趣も逐一申立候

- 一 延期之儀ニ付而は格別厚意之周旋も有之大君殿下ニ茂御満足被遊拙者共に於而も大悦いたし候
- 一 其節御引合之趣ニ而者兩港兩都延期承諾仕候上ハ外國御交際萬端都合よろしき旨ニ候處當節ニ至り御打合方充分不仕私に於ても心痛仕候
- 一 尤ニ候得共先年其許在留中と比較いたし候ハ當節一層之配慮も有之其邊之處逐一申入候積リニ有之候
- 一 右事情ニ付夫是御談判申上度御出張相願候儀に付御役々御退座御手前様方限り御相談相願度候
- 一 列席之者何れも掛念之ものニも無之候間此の儘ニ而引合申度候
- 一 餘事ニ候得は御列席ニ而も宜敷候へ共御役々御手前も有之中上兼候儀も有之候間御手前様參政而已に而御談判仕度候

- 一 此程參政を以申入候趣も有之候處外國奉行出席之儀ハ承諾被致候旨承知いたし候間外役々も列席ニ而引合度候
- 一 私方ニ而差支筋は無之候得共御手前様は申上候方御都合可然と存申上候儀に有之候
- 一 今日列席之者ハいづれも外國事務取扱候者ニ付假令此方に被申立候とも銘々職掌を以其筋取扱候儀ニ付退座にも及申間敷候
- 一 其御方御都合宜敷候得ハいづれにも宜敷候得共私儀も今日は士官も多人敷召連れ不申通辯人兩人ニ有之候
- 一 私儀此以前御國出立前御引合申上置候儀有之尤其節御手前様ニは當御役不被爲蒙仰以前之儀ニ付御承知有之間敷奉存候間委細陳述可仕右之上ニ而外國奉行其外に被仰聞候儀は格別先一應御差向ひニ而御内話申上度候尤交際上ニ關係いたし候重大之事件ニ有之先年在留中右様之儀は御手前様方參政方に而已申上候事ニ付此度も同様相願度候
- 一 右様被申間候得共役々列席之方間落も無之都合も宜敷候間無服職被申立候様致し度此方於ても格別懇談致し度候
- 一 私方於て御都合も相計り御内話相願候得共御列席に無之而ハ御都合ニも被爲在候儀ハいづれニ而も御隨意に而よろしく候



- 一此方都合故左様致し度候
- 一私歸國後二ヶ年中御國之御模様相伺度候
- 一先年在留中も人心不折合之儀ハ承知ニ可有之候得共當節ニ至り國人共外國人に對し氣之毒之仕方も有之別而下ノ關發炮之次第等大君於ても憂慮不淺其外兇徒共處々蜂起いたし一人を取押へ候得者十人を煽動致し候様之形勢ニ而精々鎮靜ニ力を盡し候得共何分行届かね赤面至極之次第ニ有之候
- 一兇徒と被仰候は浪人を御指斥被成候儀哉
- 一浪人を指候事ニ候
- 一右等之事情より先般各國に使表も差遣し候事ニ而候へ共實ニ不得止之方略ニ出候儀ニ而畢竟懇親永續いたし度より不本意之次第ニ及び候儀ニ有之候
- 一右ニ付一事相伺度候横濱鎖港之儀を各國に被仰遣候趣ニ相伺候相違無之候哉
- 一ト通り鎖港而已ニ而は被怪候哉も難計候得とも人心不折合に付鎖港談判として使節被差遣候儀ニ而候
- 一一體兩港兩都開市之儀とくより御條約濟ニ候處延期之御談判ニ相涉り又々當港御鎖閉被成度との儀ハ全く貿易御停廢被成度思召ニ候哉
- 一貿易停廢致度と申儀ニは無之箱館長崎兩港之儀は舊慣ニ依り候事ニ而當港之儀も此姿ニ存在致し置度候得共前條之次第ニ而無據閉鎖之儀申談候
- 一右御談判ニ付各國政府返答之大概ハ粗御承知之儀奉存候
- 一右は極而難事ニ候得共可成丈此方望み通り行届候様いたし度尤此度使節等被差遣度儀ハ毛頭無之候得共人心鎮靜之ため無據取計條事故其段篤と諒解あられ度候
- 一政府ニ而鎖港之儀ニ付御使節被差遣候儀ハ御好み不被成筋ニ候得共無據被差遣候儀ニ候哉

- 一左様ニ而候
- 一私儀此度御國に渡來ニ付本國出立之御女王に謁見仕候處女王より被申付越候儀も有之右も可申上且各國御返答之模様も相心得罷在候間尙可申上候
- 一人心不折合之儀ニ付大君殿下度再度上洛有之右を鎮靜方より御施行有之候事ニ付其邊被察度候
- 一御上洛有之御國事情當節如何之御模様相成候哉
- 一御上京後日數相立不申且は夫々評議之手續有之未だ相分不申候得者大君歸城無之候而は駈と之模様難申入候
- 一最早御歸城相成候哉ニ度傳聞仕候
- 一此方ニ而も右様之取沙汰いたし候得共全虛説ニ有之候
- 一國內之儀は前條之次第ゆへ其許ニは年來之懇意に茂有之事情了解せられ候儀ニ付諸事懇親之取扱頼入候
- 一被仰入候儀ハ先夫耳ニ候哉
- 一一と通り夫迄之事ニ候
- 一私儀御國都下ニ三ヶ年在留罷在候事故御國事情ハ了解致居申候
- 一私儀以前在留中御手前様御在職ニ無之候間御承知ニ者有之間敷候得共御國に對し懇親を表し候儀ハト方ならず既ニミニストル館襲撃之節も彼是苦情等強而申立候儀は無之大君並に諸侯之御間柄御六ヶ敷儀も有之候趣ニ付其上外國より種々申上候而ハ御迷惑之程奉察候間其邊差含成丈御面倒之儀は不申上候
- 一其儀ハ承知いたし居其許懇親之段は所謝候
- 一私儀以前在職中御國御事情久世大和守様は御内話仕候趣も有之其節兩都兩港延期之御談し有之候ニ付御事情係察仕歸國之上委細政府へ申立尤右延期周旋仕候上は條約面逸々御遵守有之候筈右御談判承知仕候上ハ御國御折合筋諸事御整頓可相成旨被仰聞兩都兩港延期之儀は不容易儀之處格別之譯を以自國政府に於ても承諾仕候儀ニ而畢竟自國に



於て御望ニ應し候故各國ニ而も無餘儀同意仕候儀に御座候

一右御事情諒察仕候ニ付難事ニは候得共政府に申立候處政府於て御不折合之段御察申上先ツ一ヶ年延期可致旨評議有之候間私儀御國之爲精々骨折懸に申立漸々五箇年延期と申事治定仕尤和蘭杯ハ別而不承知之旨ニ候處自國政府於て承知仕候ニ付是又枉而承知仕候事ニ候既ニ此程亞國公使ニ面會仕候處同國ニ而ハ未だ承知有無確と決定不仕趣ニ御座候且ツ延期承知仕候上ハ外國人御保護ハ勿論御交際筋故障無之筈御約束ニ有之五ヶ年延期之儀英佛於て承知之上調印仕一部之約書出來仕候上ハ大君政府於て外國人御保護並御條約面御遵守之筈確ト御約束いたし置申候右様御堅約申上置兩國懇親之廉へ對し周旋仕候處其後何等之御處置無之御違約之事ニ候加旃私歸國中先任シャルセタツヘール罷在候江戸表使臣館襲撃之儀有之同人も漸く脱身いたし候趣ニ有之候處三ヶ月程相立薩區共東海道生麥村おゐて自國商人三人を殺害いたし剩公使館燒失仕又々亞國公使館善福寺同様燒失之旨ニ有之其節同國公使へ都下在留いたし候而は御懸念ニ付當港に退居致し候様御談有之候由之處爾後長州於て御條約濟各國船に對し打炮之儀も有之候

一右之件々各國於て甘心致し候程之御取扱無之候間無據各國より手を下し候場合ニ至り可申左も無之内早く御所置有之候様いたし度奉存候前文不備之件々ハ延期承知仕候懇篤之厚意ニ被爲對候御報酬ニ候哉將又當今各國公使とも江戸在留も御許容無之當港退居御勸め被成候儀は條約御違背之一大事ニ有之一體格別之譯を以延期仕候處右様之御仕向ケニ而ハ右承諾之儀を今更後悔仕候尤御國政府於て諸事御心力を被爲候て御條約御遵守保被成候儀ニ候ハ、各國於て異議申上候筋ハ無之候得共延期以來別而不折合増長いたし候姿ニ相成申候右御違約之儀ハ御先役様方私を御欺き被成候儀ニ候哉又ハ自ら御欺被成候義ニ候哉兎角延期ニ付御約束之儀心之儘相成兼候儀遺憾無此上事ニ御座候

一右様御違約相成候上ハ延期承知以前ニ廻り直に開市之儀御談可申上候私厚意之周旋寸功を奏し不申總而畫餅ニ相成候間御違約之節を限り開市之儀御催促申上候は當然之儀ニ御座候

一此度女王殿下之命を奉し候儀第一御條約面通り確守可仕并御國人自國人に對し暴行等有之候節ハ自國之兵力を以如

何様ニ茂討割可致旨委任之全權を被命候

一條約面歴々明文有之候通り各國公使儀ハ都下在留之道理有之候處右を御擯斥被成候は則條約御違背ニ而私儀も無程出府可仕亞佛兩公使ニも定而同意ニ可有之候

一今日當御役所に罷出候儀は御手前様態々御出張之義ニも有之且初而御目ニ懸り候儀ニ付旁枉而參上仕候得共以來は御宅に罷出候敷又ハ私方に御入來相成當然之儀と奉存候

一前件御談判申上候儀も全懇親を以申上候儀ニ有之然ル處矢張御捨置被成候ハ、數隻之軍艦差越兵權を以相迫り候より外無之尤萬一之節差懸り彼是之御談等有之候共承知不仕候間前以申上置候儀是亦懇篤之存念ニ出候儀ニ有之候

一長州一條何とも御措置無之旨ニ承知仕候右ハ各國之軍艦に對し國旗を相汚し候儀ニ而大罪之儀ニ有之候間いづレニも其儘被差置候筋ニ有之間敷候

一段々被申立候趣承知いたし延期之儀茂其許出格之取扱を以相整候儀ニ有之候處品々差支筋有之條約面通りニ被行兼氣之毒ニ候得共人心鎮靜方可相成と存無據申入候儀ニ而其節見据無之儀を申談候儀ニは無之候

一延期承知仕候上ハ御國內御平穩ニ相成候御見据ニ茂有之候處當節ニ至り追々御國景況交際上於て益凶事而已ニ而最初の御談判之御主意とは大に相違致し申候

一御國內御不折合ニ而彼是葛藤を生し候儀は相分居申候右は京師并大君其外諸侯共夫々存寄相違いたし候より御混亂差起り候儀と相見へ候得共延期承諾仕候以來追々兎徒跋扈いたし候様に而は私周旋仕候儀却而越度之様ニ茂亞公使はしめ申唱居候

一生麥殺傷長州一條其外共政府於て深く痛心致し居候得共於今處置行届きかね候儀は甚氣之毒ニ候

一御心配と而已ニ而夫々御割し方茂無之薩摩長州茂其儘ニ相成居右御仕置御出來かね候ハ、私方ニ而右割し方として軍艦差向砲臺取崩し候敷何と敷所置いたし申候



- 一 素より打捨置候譯ニは無之候得共大君御歸城之上ならては何分所置難致候
- 一 大君御留守中ニ而は御評議茂相成兼可申候得共前文之儀は疾く御承知之儀ニ有之今更御相談ニ茂及び中間敷私儀今日罷出申上候儀各國之模様々様ニ有之候と申儀を前以申上候ニ而御國へ對し私共異心相狹み候儀ニは無之候御捨置被成候得は自然無博次第ニ陥り可申候
- 一 懇親之段忝存候 大君歸城之上は夫々所置之いたし方茂可有之候
- 一 御歸城は何頃ニ候哉
- 一 京師之左右は何分相分兼申候得共可成丈早く歸城相成候積りニ有之候
- 一 蒸汽船ニ而御往復之趣ニ付いつれ早く御歸城ニも可相成と奉存候私儀茂速に御歸城相成候様祈居候儀ニ御座候
- 一 一事申上度儀有之候右御手前様に申上候程之儀ニは無之候得共運上所近傍地所之儀ニ付申上度儀有之尤神奈川奉行ニ而も宜敷候
- 一 右奉行に被引合候様いたし度候  
(本朱書)  
此時繪圖面差示
- 一 尙一事申上候當港ニ而は一ヶ年毎輸出輸入之稅高茂取調岡上ニ差示候得共長崎表ニ而は其儀無之候間當所之振合に準し候様いたし度候
- 一 同所奉行へ可申達候
- 一 只今申上候儀御國全體之深瀾に拘り候儀ニ而餘事を新に申上候儀ニは無之且御挨拶早々相伺候譯ニは無御座候
- 一 以來共御引合之御御手前様方逸々當港に御出張ニは及び不申私儀御宅へ罷出候様可仕候
- 一 右ニ付少々申入置候出府之儀大君御留守中ニ茂有之不都合ニ候間暫時被見合候様いたし度候尤各國公使共出府之儀申立候節は其許より事情被差含厚意之周旋頼度候

- 一 各國公使共出府御差留之御理柄は有之間敷出府仕候節は何時ニ而茂出府可仕候去ながら私儀は他ニ差向可申立事件無之假令此後差起り候共可成文書簡ニ而申立候様可仕候
- 一 尙一事申上度候東禪寺襲撃之節護衛之人ニ拔群之働有之候ものへ國王より恩賞としてリットル差贈申候右者女王之像も寫し有之右受領候ものハ各國於ては格別恩榮と存候事有之候得共御國諸藩之ものとハ右様之品を相好ミ不申者茂可有之候左すれば厚意も届兼差贈候共無益ニ相成申候
- 一 いづれ取調猶可申入候
- 一 今日金銀リットル一兩個持參入御覽可申候處失念仕候
- 一 今日は段々懇談被致忝存候我國事情ニ付而は氣之毒之次第に候得共素々未だ相聞ケ不申故之儀ニ付可然諒解被在度候
- 一 過刻申上候通り諸事御懇篤ニ御談し無之而は彼此之不都合可有之尤御手前様ニは初而御目ニ懸り候得共御列席之竹本甲斐守様は舊來之御知己ニ而何事茂打明御談判いたし居申候
- 一 同人より茂毎々承知致し候
- 一 何事茂實事を盡し御談判不申上候而は徹底いたし兼候儀ニ御座候
- 一 尤之次第ニ候間今日出張之序佛公使に茂面會いたし度候得共繰合せ出張いたし候事故何分面會出來兼候間其許より可然傳言頼入候
- 一 一面會之上可申通候得共別段御手前様より被仰遣候方御都合可然奉存候
- 一 態と相頼候儀ニは無之序茂有之候ハ、傳言相頼候事ニ有之候
- 一 承知仕候同人儀も追々歸國之手續ニ而交代之者渡來仕候を日々相待居申候
- 一 右畢而退席

二月十四日宮部鼎藏防州三田尻より書を中尾平馬に致して自己の動止及び時勢の概況を告げ家



族の扶養を依頼す

〔宮部文書〕

三百七歳君へ別紙差出不申候間宜敷御致聲可被下候草刈氏同様此節何分呈書出来兼候宜々御傳聲是亦奉願候已上  
 一幹呈上仕候暖追日相催申候處御講堂様被爲捕増御安寧被爲渡至悦仕候次に小生無異儀罷在中候間乍慮外御休襟可  
 被下候然者去冬長沼英之助に相托一書呈進仕候後儘成便宜も無御座絶書信背本懐候迂生も去十月より竊ニ登京先月中  
 旬當國罷下り申候不相變三條様御懇命罷蒙日夜伺公彼是奔走仕居申候全體天下之形勢賊窟翳以盛ニ相成正氣消滅ニも  
 至可申志上吞憤遂一死盡臣子之節候外有之間敷覺悟致し候處近頃ニ至島津三郎奸計漸々露顯ニおよひ幕府其外一橋水  
 戸因州備前杯別而相惡み正邪之辨何をニ顯然可仕せざし相生し爲天下大ニ相樂居申事ニ御座候何様再と青天白日を見  
 候時勢ニ相成可申此時こそ志上奮勵之秋と相心得申事ニ御座候御母堂様彌御機嫌能被爲入萬端御厚配可被遊附而ゑみ  
 どの子供兩人實に貴君御母子様奉依頼候儀實以奉恐入候次第此上宜敷々々奉願候御母堂様に者別啓不奉願候間可然  
 被仰上可被下候妻子之儀者奉依頼候間懸念中少々者安心も仕候得共姉姪共事如何相暮申候哉愚弟も居不申日夜難忘痛  
 心無極何分御推察可被成下候御存通外縁家共小生等之事ニ付而者彌以疎情相成候と相考無念千萬御座候何卒御難題之  
 上恐縮仕候へ共是亦宜鋪くをく被添御心可被下候愚弟大輔儀ハ小生手元ニ引付ケ盡涯分周旋仕せ申候事ニ御座候  
 木山田一條誠盡武運候事不堪歎息候山田手負候由別而懸念仕候拜言仕度儀者山海難量御座候得共心緒難盡毫頭萬端御  
 推察可被下候先々右迄帥略如斯御座候恐惶謹言  
 二月十四日 防州三田尻於旅館認之

宮部 鼎 藏 増實花押

中尾平馬様

二百時下御混家様御保養專要萬壽仕候平助君嚙々御成長と奉遙賀候光も成長仕候と思ひ申候樂ニ者もはや人心つ  
 き申候間嚙小生事氣ニ懸り居可申遠思仕候手習針仕事杯出精いたし母方へ孝行仕候様御教誨偏ニ奉願候臨紙茫然不  
 知所言候已上

二月十四日宮部春藏長州より書の中尾平馬同七藏に贈り昨年來の行動を報す

〔宮部文書〕

此節三池藩清水源五左衛門宿許より音信御座候間任幸便一翰奉啓上候先以奉拜別爾來愈増御清健可被遊御座奉恐悅候  
 御袋様奉初御姉様殿方様ニ茂被爲揃益々御清一可被遊御座偏ニ奉恐賀候於此許兄并私儀ニも不相替承々削光仕居申候  
 乍憚左様御承知被爲下候様奉希候返々茂從來御恩澤之次第一二難盡筆頭奉存候得共誠ニ々々如此時勢如此身上ニ相成  
 再度御面調茂難計奉存上候嚙々不信ニ茂被御思召候半と奉存候得共畢竟昨年御承知被成下候通久留米より長州岩國并  
 津和野に罷越候間實情者永々彼是と罷過候ハ、愈以俗論之々々幽囚ニ附可申且者右奉申上候久留米杯之決末茂届兼  
 候ニ付猶亦赤間關迄と相志罷越候砌於久留米姉小路様御大變右ニ付而者京師表御變亂加之六門御守衛之儀茂御國を初  
 メ諸藩に被仰付最早白刃之地と相成候模様ニ傳承仕候間無左右馳せ登申候處格別之次第者無御座候得共小等原圖書頭  
 逆意を挾ミ淀城に相迫り大樹下坂彼是甚以不容易形勢ニ御座候間直様引返可申處同志之者も相留メ且右之次第ニ付  
 見合せ居候内寛々と罷成背本意候得共今日之義信を欠キ後日之面目を以可奉謝心算ニ御座候處昨年八月十八日之一件  
 ニ罷成空敷其後暫く者滯京仕居候得共奸賊斬伐之目途も無御座候間乍遺憾亦又長州に罷下り直様内密之義御座候間  
 九州に罷歸候得共殊之外嚴密ニ付不能拜顔乍殘念猶亦當地に引返申候其以來茂種々心膽を苦しめ候得共更ニ無手段只  
 々慨歎仕候事ニ御座候誠ニ々々不孝不忠不悌不信ニ罷過候段重疊汗面之至恐多奉存候乍併非常之穢家名非常之請辱恥

元治元年

五六五



候身上ニ茂御座候間愈以非常之義を以不奉報國恩候而者難相叶奉存候間益々覺悟之旨茂御座候ニ付何卒々々不信ニ茂被御思召候得共一死奉捧國恩度宿志之故を以宜敷御情恕被成下候様吳々奉懇願候只々朝暮難忘奉存候義ハ御姉様并樂殿密殿姉共事ニ御座候嘸々御懸念御苦心可被遊と奉恐察候如何被爲送光陰候哉誠日々夜々瞻望之情御推察被爲下返々茂不惡被仰上被下候様重々奉希候乍去上國之形勢茂次第ニ復善之模様ニ而水府備前因州其他段々正論之國柄茂御座候趣ニ付猶亦目出度拜顔可奉願義茂有之哉偏ニ御自愛御專一愈以不相替爲國家乍恐御盡力被爲下候様宜敷奉願上候尤上國之形勢者巨細可奉申上管之處兄々相認申候間態と欠書仕候何卒御一覽可被下候様奉願上候其他萬々奉申上度次第者山川難量奉存候得共至急之便宜ニ御座候間實ニ失敬至極奉恐入候得共先者御音信迄奉申上度如此御座候亂筆且失禮之文言相改兼申候間返々茂御海恕被成下候様奉希上候猶奉期後便之時候恐惶謹言

二月十四日於燈下相認候

田城吾郎

增正花押

再白重墨失敬之至恐多奉存候得共何卒姉に茂御序之御宜敷御申越被下候様乍憚奉希上候尤別帟壹封右同様奉願度奉存上候返々茂龜略之至伏而奉恐謝候又以上

先生

御兄弟几下伏捧

二月十五日幕府松平容保を軍事總裁に任して其京都守護職を罷め松平春嶽をして之に代らしむ

〔御同席觸寫并大目付様御廻狀寫〕

文久四年八月二年迄 牧野備前守殿御渡候書付寫一通相達候間被得其意無違滯順達菊池伊豫守に可被相返候以上

二月廿四日

大目付

藤堂和泉守殿  
細川越中守殿

(外七名)

右留守居

大目付に

去十五日於二條御城松平肥後守事軍事總裁被仰付京都守護職御免松平春嶽事京都守護職被仰付同人儀翌十六日御懸之以上意大藏大輔と改名被仰付候此段向々には可被達候

二月

〔家茂公二度目御上洛一途〕

二月十五日

京都守護職 御黒書院  
松平春嶽  
禁裡附 小栗下總守  
京都町奉行 永井圭水正跡

右於御前被仰付之

二月十五日鹿島根本寺内に屯集せる水戸浪士等鹿島神領の標柱の邊に佛像の首を梟し攘夷の血祭をなす

〔尊攘録探索書〕

元治元年

五六七



水戸藩中井諸國浮浪之士水戸領ニ而亂暴致候書取

一子二月十五日鹿島大船津三丁計宿場ニ鹿島神領標柱之際ニ佛像之首をさらし高札之覺

佛首七ツ中央ニ之釋迦之首歟

此者西戎醜類ニして入朝以來庶民を誑惑し夫而已ならず數多之姦僧をして暖衣飽食嬉逸ならしむ依之攘夷之手始まつ  
加天誅もの也

二月十五日

右同所より少々過て根本寺門前竹欄幕張八寸角長壹丈位之柱へ認メ文字左之通り

大神武館報國正義隊當分屯所

大宮司西ノ方へ館營ノ地長五十間余横四十間程平均地形出來候様相見ル

神宮司地中前ニ小堂有之候所十二月廿七八日比之由夜中火を掛燒失候よし其側唐銅タレ佛一休破却之よし

三月十九日

森 井 惣 四 郎

二月中旬長岡護久同護美時局に對する我在京老臣の意見を徴す

〔尊攘録御建白御國議〕

方今之時節ニ付見込之趣書付御役々より差上候様

御二方様被仰付候付御家老中左之通取調差上候事

元治元子

去秋以來長々之御滯京付而者 御二方様御心配筋者申上ニ不及大勢之御家中一統及迷惑候而已ならず莫大之御入費ニ  
而日を逐 御國力疲弊いたし候間逆茂御成功之御見込不被爲在候ハ、何その御手筈を以一刻茂御引拂之方御便利無中

計候得共昨年以來之猶更危急存亡之御時節ニ相成何分御傍觀難被成處より列候方被仰合遠境態々御出京ニ相成中々一  
朝一夕之事ニ無之容易ニ御引拂茂被爲在候程之御事ニ候ハ、土臺右様之御打立無之方可然左候而之於御義理合乾度  
難相濟たとへ 公邊之御運ハ極々不宜列候方之内御立服ニ而御歸支度之御向有之候とも於 御二方様之今一増御盡力  
被爲在度差寄右御盡力之稜々左之通

一御參豫之御方ト 公義御役人衆方御一和ニ而御談判ト申持ニ至り兼候由根元參豫之衆方之此御砌 皇國之御基本 御

一和御委任之大綱領を御取堅之御所存ニ候得也 幕府之舊格舊習等者斷然ト御一新有之萬事公平正大之場ニ落合候様

との御趣意ト被考候處右之通ニ而之自然ト 公義之御威光相減候譯ニ成行候間御役人衆方之成丈取合ふし乃積とも

ては無之候哉如是御都合ニ相成候上之致方無之乍恐御威光等之儀之暫度外ニ被差置事々物々至當之筋ニ御處置有之候

得之一統奉感戴御威光茂頓而本ニ復候之當前ニ有之然を是迄之御格合等強而御持通之御覺悟ニ茂候ハ、却而御威光を

害候迄ニ無之 徳川家之御浮沈ニ茂關係いたし候儀勿論ニ候處御役人衆方如何様之御了簡ニ候哉何様參豫之衆方之御

自國之衰弊ニ茂無御頓着實ニ 神州之爲長々御滯京ニ茂相成居候間老方々之朝幕御論説を被請受可然筋之夫を以

々相決左茂無之事柄之幾重ニ茂御辨白有之聊無御伏藏御相談ニ相成於參豫衆茂其邊之儀之重疊御心持ニ相成候様一橋

公者申迄茂無之困老方其餘之御向々ニ茂 御二方様より精々御周旋被爲在度此儀尤之御急務歟ト奉存候

一御一和御委任之儀 宸翰之趣且御請之通ニ候得者 主上并 大樹公之御間者聊御申分不被爲在左候得之右之趣一刻茂

公然ト天下ニ御布告ニ相成度夫ニ而先一統安心仕候譯ニ御座候尤 宸翰之趣茂御請之趣茂是非とも御仕謀せ之御覺悟

ニ無之候而之乍恐一時之反故ト相成可申夫等之儀之其御筋ハ屹ト被仰立度奉存候

一横濱領港之儀本國に使節茂被差越由候得共同所商館御買上等數百方金不被差出候而之難相成其分者逆茂 公義之御手

ニ難被及諸侯方に割賦出金被仰付積り之由何分通行候儀ニ之相見不申而已ならず是社天下之人氣ニ差障如何成行候茂

難計乍然根元 勅諭を被奉關東より無ニ之御盡力ニ而御取懸ニ相成居候間先ツ其儘被差置追而使節歸國談判之都合等

元 治 元 年

五六九



申出之上其模様ニ應猶御沙汰之趣茂可有御座哉左候ハ、春嶽様三郎様方只今強而開港御申立之儀之何卒御見合ニ相成候様 御二方様ヲ被仰談度奉存候

一長州之儀之初發 朝廷より種々御沙汰被爲在末混亂ニ及候事ニ付此節改而被 仰出候 御一和之御主意 公義ヲ御示ニ而之遵奉之御都合茂何程ニ可有之哉此儀は大坂にたり迄宰相御父子之内敷又之御家老ニ而茂御呼寄 勅使下向ニ而一刻茂被仰渡其上ニ而追々過劇之處行等御取締也 公義より御取まらへニ相成可申哉  
右三四條之御處置大概御取堅リニ相成候ハ、其處ニ而御當地御引拂之期限ニ奉存候若又右之稜々如何躰ニ茂被行不申公義之彌以 公義流ニ而御立テ通之御趣意ニ候半々進茂御力之及處ニ無之被成方無御座候間御存分文屹度御建白被差上其處ニ而御引拂相當可仕哉夫茂今廿二三十日之間ニ之荒方黑白相片付可申哉ニ奉存候事  
右ニ付札  
本文之通候處猶得斗相親候得之參豫衆方之追々ニ御暇被下其御跡ニ而 御二方様并下野守様御釣留萬端御相談可被爲在哉之趣ニ而一方御配慮被成候由萬一右様之埒ニ茂成行候ハ、勿論御居殘可被遊様茂無之夫之暫差置第一

皇國之御氣運今日限ニ申ニ相成斯迄御仕寄之末殘念とも慨歎とも申様無御座候間 札合印△ 一刻茂萬習御一新ニ而參豫衆方一概ニ御談判有之大策御取堅ニ相成候様只今之内屹度御盡力被爲在品ニより其趣 御二方様より御建白ニ相成候而茂可然哉此御土臺堅リ不申御盡力之御方々散々ニ相成候ハ、再ひ御挽回之期之有御座間敷何より以御急務之筋ニ奉親候擬右之御盡力如何躰ニ茂貫通至り兼積り 御二方様御釣留ニ申埒ニ相成候ハ、此御砌御尊長様御看病本との御譯ニ而之御宜敷有御座間敷根元危急存亡之御時節御傍觀難被成段々被仰合御出京ニ相成候事ニ付素より御周旋之御趣意茂御同様ニ候處歴々方被成御座候而さへ難被行折柄中々 御二方様之御力ニ可及様茂無之との趣被仰立如何成 御沙汰有之候而茂斷然ト御引拂被爲在度根元 神州之たま大義を以御出京之末ニ付御引拂之節茂一統物を入得不申様公然たる筋を以御處置被爲在度奉存候  
右ニ付札合印  
△本行一概之御談判ト申候而茂其御手續相分不申候而之切實之御論ニ至兼可申近來ハ 朝廷ニ而種々御評定之稜成有

之候山右之通ニ而之折角 御委任之御基本相立候而茂其詮無之ト申譯ニ茂成行可申哉夫者地場平生之事ニ而今日者皇國治安之土臺を御取堅之折柄ニ付願ク者 將軍様日々程ニ御參 内有之 朝廷幕府之無御差別公家方御役人方及參豫之列侯方等御打寄何方茂御私心を被捨公平至當之筋ニ御參談有之相決候分ハ此御機會且々天下ニ御施行有御座度若又 公方様容易ニ御參 内出來兼候ハ、參豫衆者申ニ不及盡力之たま態々出京之御方々等茂毎日程ニ登 城有之候様被 仰付 公方様御坐前ニ而右同様御評定被 仰付其末宮様議奏衆方ニ茂御相談有之度何様御舊格等ニ無係非常之御取扱無之候而者進茂 御成功無覺束而已ふらす差寄一統之氣受ニ茂差障前日より其敷混雜を生可申右様之境其御向々屹度被仰入いゝも御採用無之候ハ、委敷御建白ニ茂相成度何様被是御慮慮之御場合ニ之有御座間敷奉存候

二月十六日松平淡路守河州世子書を長岡護美に贈り其鷹司家往訪の模様及び橋越土諸候參内に關する消息を聞かしめんことを乞ふ

〔子爵長岡家文書〕

一翰拜呈仕候和暖之候益御清康奉賀候借者今朝鷹司殿下へ御參殿之趣傳承仕候何之御存寄ニ御座候哉早々爲御知可被下候將又一橋公春嶽容堂今日參 内之趣も傳承仕候右ニ付而之御事敷と奉存候間早々御返答御申越可被下候此段迄勿々頓首

仲春十六日  
良 之 助 君  
尚々時候御自愛專一奉存候已上

淡 路 守

二月十六日大和一揆の徒十九名京都の獄に於て處刑せらる



〔尊攘錄探索書〕

元治元年 (三月廿九日田中彦右衛門承り書)

一昨年大和五條一揆之内被召捕候者京師町奉行手千木木ノ嶽屋ニ繋き有之候處當二月十六日十九人トカ死刑ニ相成候由一説ニ三十 右姓名等認候書附跡ヲ寫取差出可申候其内ニ土州人奈須新吾安岡加助大石彈藏と申ハ一昨々年右藩用人吉田元吉殺害ニ關係せしもの兼而密々承り及し處此節土人ニ承候ヘハ無相違ト申聞候乍去是ハ枝葉ニ而本根は長ニ有之ト相見ヘ候由未但州生野之方之徒ハ御刑法ニ不相成有之候由

〔尊攘錄諸家建白並届書等〕

二月十六日西御役所ニて申渡

其方儀徒黨ヲ結ひ於大和國及亂暴公武を不恐仕方不届ニ付死罪申附ル

澁谷伊與作

酒井傳次郎

尾崎 大郎

岡見留次郎

藤次カマ、田所拳次郎

中垣鑄太郎

荒見半三郎

伴 林六郎

尾崎淺次郎

鶴田 陶司

江頭 種人

安岡斧太郎

土井佐之介

鳥村 省吾

澤村 幸吉

長野 一郎

森下儀之助

安岡 嘉助

外ニ 壹人

右十九人率屋敷ニて追立御仕置有之候事

大目附

永井主水正様

右立合西町奉行

瀧川播磨守殿

東 同

小栗下總守殿

但所司代組與力同心東西組與力同心附添警衛致候事

〔風聞書〕

元治元年正月

二月十六日

於京都獄前斬刑ニ相成候者共

澁谷伊與作

酒井傳次郎

尾崎 太郎

辭世

恐なる身にも弓矢の道を得て都の花と散るぞうれしき

安積 五郎

岡見富次郎

田所 鶴次郎

中垣 鑄次郎

荒卷 半三郎

辭世

君か世は岩ほと共に動かねは碎けてかへす沖津白浪

伴 林六郎

辭世

魁けて散るや老木の歸り花 森下義之助

安岡 嘉助

右者昨年大和國に籠居いたし候浪士之者被召捕此度前

書之通御所置ニ相成候事

二月廿日認

〔宮部文書〕

二月十七日宮部鼎藏書を家庭に送りて自己の進退心事を告げ祖先追遠子女教育等を依託し家事繼續苦心慘憺の情狀あるべきを慰む



一筆申上まゐらば候まつノ御機嫌能おはしまし候と御目出度御嬉しく存上まゐらせ候私事去秋三條中納言様其外堂上方御六方長まゆふへ御下り遊し候御供仕り長州三田尻と申所ニとまゆふ仕り三條様けしからす御こんめをいたゞ居申候三條様ニ者御國御前様の御兄様ニ被爲渡御忠義御第一の御方様ニ入らせられ候ところふりの御さるなんまかゝらせらば候へ共つゝハ御うん御開け遊し候と御頼母敷存上候事ニ御座候私事は迄御つき申上候事くさノ申上つくしかたきまけ山々て武士のつゞとは申なからまばし御國うしろ向け奉り候よふ相成りじつにおそれ入方候その上あなた様へ御別を申上候だんはなはだ心痛かたまなくおそれ入まゐらせ候まかし私共兄弟ハ御國のたえ京都の御たえに一命をさゞげ申候だんハかまてしらしめし下され候通の事にて今更とかくハ申上す候たとへ討死仕候とも人ハ笑まれ不申候間此だんハ御安心遊し下さるゝ候大輔も相かまらまざかんて私手元ひきつけ置申候ま御安心遊し下さるゝ候誠ノいかゞ御幕し遊され候やさそノ御なんき遊され候とそれのみノ御あし申上候本宅はいかゞかたつき候やばんたん大野てつ兵衛ニ頼置申候間此人ノ御あしよく御頼なさるへく奉存候上野かつ平もよろしく御申下さるべく候田鶴はさそノせらゝんいたし候とそんしやりまゐらせ候私共居不申さぞノ心細くそんじ申る候まかし宮部の家ニ生れ候ゆへ御先祖様がたの思召を女なからもよくつぎ申候而孝行にあつくぜひノ家をつぎ候よふくれノ御さとし遊され下され候様願上候子供兩人の事ニハた氣にかゞ申候さたまてなさせなき親とらめしくぞんし申るく日夜あんしなり申候武士の道たて候ては上は上々の御ため下はとんみんなのため家にも身にもかへられぬ深きまけは申上におよそすさてノ無是非ものニ御座候申上度事ハ山々まおましまし候へとも筆にはくしかたくあらノ申上殘しまゐらせ候心中御もさつ下さるゝ候目出度賢

二月十七日

御 姉 上 様

まゐる人々御中

宮 部 鼎 藏

尙々あなた様御機嫌いかゞおましまし候やいろノ御あし御苦勞遊し御病とも遊されぬよふそののみノ祈上まゐらせ候何もノうきよのつねとおぼしめし御あし遊し路ふそノ御機嫌よく御先祖様御家御はかのあれぬよふに御たんせの遊し下さる候よふそをのみノ御願申上候大輔事はかへまノも御あし遊されぬようそんじ上候何も私ユそうだんのうへはたらき申候まゝ大うちから相成よろこび入りまゐらせ候又々かしく

〔全書〕

三條中納言様其外御五方様ノ御まき申候てやはりみ田じりに居申候尤去年十月より京都へまゐり正月十一日ゝかゝり申候三條様けしらそ御こんめをたかふむり有かたくぞんじ居申候まは無事ニくらし申候ま御安心下さるゝ候平馬様ハ御いんきよなされ候よしさそノ御しんそなされ候とそれのみノ存し方御母上様いかゞおましまし候や文もさし上不申候まゝよろしくノ御申上玉ゐるべく候御姉様いかゞ御くらし遊し候やと御あし申上候榮光さかに候やまもし居不申まゝらくは人心もつき候によりさそノあんじ申へく日夜あんじやり申候さぞノなさせなき親とらめしく思ひくらし申へくまはにははたまきれノにおもひまひらせ候しかしか頼てまもじか心ハまよふちのと残り 上々の御あめには家をも身をもかゝり不申かくこのだんは申におよばす去年京都の御一大事につきてはそのせつともかくもなり申へきところ今日までいのちながら居申候事まことに不思議ともおもひ居申候いゝも去年しに申たると思ひあきらめ玉ゐるゝ候武士たるものハ不忠不孝にしてハ生てかひなきもの故忠義の道ニぬる事ハ本もふのいたり候まかし御國のひようばんは不忠ものときぞやいろノ申立候とさつし申候よつてさぞノむねん口おしくおもひ申さるゝ候へとも人の口には少しもかまひ有まじくおまゝけりもまじがま心ハまを申るくたとへしれすとも神々のまようらんましまそてあんしんいたし申さるゝ候そももも遍照院様の子開藏様はまも申事朝夕もそればして人ユまらまをうしろゆひさゝをさるよふありたく存候人のせいすひは世のならひまをノまでの事にこれなくたゞノいかにうきめにあふとても本まんをうしなぬよふつとむるゝ人間の道なりといちばにおま



ひこみ申さるる候そもじハ氣ほそき生れつきのうへ病氣もあり右のりけたとゞけとくとのみこみ出来候やと大にあんじ申候くれノもよくノとくまんよて此上ハ御母様へ孝行またまもじニかまり子供兩人のおひ立をくまノ頼入候らくは手ならひそりしごとかんよふニぞんじ候みつはさそノふとり候と目さきにちらノいたし候また姉様の御事よるひるもそをかゝく候さそノ御なんきなさるるくそのみ御あんじ申上候大助もまじゆふ一まよあちこちいたし大よちからよなり申候ま御安心遊し候よ御申上玉るへ候何事も心にまか勢られぬ事は草刈十郎どのへ御頼なさるへ候御はるでよよろしく御申下さるべく候おためさまへもよろしく御頼申候そのほか申入度事ハ山々候へともあらノ申残しまる勢候日出度かしく

二月十七日

宮部鼎藏

おゑ美殿

返モノ御いたみなきよふくまノいのまゐらせ候たびノ文も進じ申度候へともちゆふのよふまんもこれあり候ま心にまか勢不申候心のうちまよふ玉るる候かしく

二月十八日幕府は滞坂を命し置たる毛利元周押て上京せんとする虞あるを以て我藩に命し警備地を嚴守せしむ

〔家茂公二度目御上落一途、京都諸扣〕

二月十八日

一御用番水野和泉守様方只今御呼出ニ付御留守居安岡辰之助參上仕候處左之通御書付一通御用人を以被御渡候事

細川越中守家來に

細川越中守

長州一家之儀ニ付而は兼而御所より御沙汰之趣も有之候處毛利左京亮儀近々上京之趣相聞候間上京之儀之見合大阪表ニ罷在候様相違候得共押而上京候儀も有之候而之不都合之儀ニ付萬一其方御岡場桂川久世村邊京極佐渡守申合通行候儀も有之候節は上下人數共通行差留候積相心得候様可仕候

〔京都諸扣〕

右御達ニ付差寄物見として歩使番等山崎邊迄差遣様ニ應御岡場増人數可被仰付管尤桂川御岡之面々は者爲心得御奉行及達答也

二月十八日長岡護久同護美は長州の事は總て朝廷の措置を仰ぎて適當の處分をなすべきことを幕府に建白す尋て朝廷にも同建白書を上る

〔尊攘録自筆狀〕

二月廿日京都通

三月二日着

以別紙申達候長州御札問ニ付而諸侯方へ御沙汰之條ハ追々之書狀且沼田勘解由方委細御承知有之たと存候右之於公邊も餘程御腰前居屹ト御目算被爲在候而之被仰出ニ可有之と甚以太慶仕候處御二方様御聞取を始御奉行已下御役筋に罷越相親候處格別御見渡も立居不申長州御取扱之儀何も歎も幕府に被仰付幕府ハ兼而一統ヲ因循之責不少旁此節之御趣意御示方暴行之稜々御察討も一切御引受ニ而御所置之答ニ相成殊ニ列侯方之内よ御せ付之向も有之無餘儀紀州侯御初に之御覺悟之儀被仰付候由右之通ニテハ却而長州之人心を被激必多物混雜も難計候へ共今更御取戻も六ヶ敷其上強而被仰立も有之候而之段々當障も有之候間實而此後之御運平素御研究ニ相成居候趣を以別紙書付寫之通御建白出来去十八日水野和泉守様は御參達有之委細御演達も御座候處至極御同意被成夫方尹宮様に御出寫被入御披見候處是

元治元年

五七七



又御同心ニ而迎も如是御都合ニ相成不申候而ハ相成間敷被仰聞候由ニ御座候何様今度之御沙汰ハ御失策ニ相違ハ無之然ニ御二方様右之譯を以俄ニ御引拂御國ニテハ仰山之御覺悟等有之候而ハ他日長州に被對屹ト宜候間敷何様當時ハ何方もまつといたし居候様子ニ相聞候間追而之模様も可有之此方様も先ツ右之釣合ニ被准候方可然左候而土臺之御處置筋ニ御盡力有之候ハ、根元之御趣意ニ相悞候のミならも前文之御都合ニも差障申間敷相考申候御許ニ而御咄合之趣も急使を以被仰越様存候以上

二月廿日

有吉市左衛門  
有吉將監

御家老 宛殿  
御中 老

〔公武の御建白〕

文久四年  
二月十三日水野和泉守様御老 依御達御二方様被成御登城候處右御封書(二月十一日の長州征伐に關する内密の封書)之趣聞老方より御傳達有之被成御承知候御様子ニ候依之左之通御建白出來御直筆ニ而御直達之方可然いづれ之御向可然賦との事ニ付惣裁職之河越侯御手寄ニ而御用番之水野侯に御差出被成候方と申出置候處同十八日水野侯に御達被仰入御達ニ相成候也(附)今度越中守に(朱)幕府より被相渡被爲頂戴候御封書之趣内々(朱)老より申私共兩人に被仰聞實々武門之冥加越中守者勿論於兩人茂而目之次第奉存候然處然ら、長州之事體を觀察仕候ニ近年洋夷來航太平之久とは乍申求要津を被開要地を被借與候等之儀御座候處より貪夷追日無所忌憚勢ニ成行候を諸邦之敵愾憤怒ニ堪兼遂ニ櫻田西丸下之變事相生浮浪之徒虛ニ乘し妄説を唱其事堂上之諸卿ニおよび 公武之御間殆御間隔之姿ニ相成天下之人心次第ニ紛亂仕候儀を大膳大夫深致慨歎最初ニ爲皇國 公武之御一和を周旋仕候趣意と相見候處不圖茂今日之形勢ニ相成候儀者乍恐 公武御双方之御所置を不被爲得處より人心を被激諸卿者過激之徒ニ擁られ大膳大夫者激烈之臣ニ擁られ激烈之臣者浮浪過激ニ擁られ浮浪過激者相互

ニ被助勢不得止展轉相激し件々亂暴之仕方ニ及候儀と奉存候既ニ 天朝より大膳大夫非常之昇進も被 仰出其後暴發之嗣者御譴責こそ可被爲在賦と奉恐察居候處却而被賞剩監軍使をも被差立一旦者九州之末迄動搖仕候程ニ御座候處其末去八月十八日前後を以 叡慮之眞偽を相辨候様被 仰出候得共御書達等迄ニ而者長州一國疑惑解兼舊冬ニ至井原主計を以奉伺候通ニ御座候間此節 公武御合體御委任被爲在候とて將軍家より直々被爲及御沙汰候儀者如何程ニ可有御座哉彼よりハ矢張 天朝之重命を固守仕居十八日後却而 叡慮を矯候儀ニも可有之哉と論說仕居候事體ニ候得者台命を奉し悔悟仕候運ニ者却而至り兼可申奉存候間今般御取固りに相成候御趣意者 朝命を以宰相父子之内職又大臣之内ニ而も大坂あたり迄被召寄先般之監軍使ニ對候程之重キ 勅使ニ而茂被差立候而明白ニ御諭被爲在此以後屹と台命を奉し候様被 仰出御受申上候迄之儀者是非 天朝之御處置を御願上被爲在度御儀ニ奉存候右之御筋ニ相成候而も違背仕候ハ、所謂天人之所誅ニ而縱令御代討被仰出候とも有誰而否と奉存候儀者有御座間敷左無御座候而者大膳大夫初二三之大臣十八日後之 叡慮を奉し候心願ニ御座候とも一國中を示諭仕候儀何分力ニおよび不申不本意戰爭之埒ニ茂至可申其響より如何成内亂を生候茂難計洋夷觀觀之折柄實々 皇國之安危ニ係り奉懸念候尤 朝廷より右大體之御取扱相濟候上將軍様より一切御引受ニ相成七卿之面々勝手ニ國許に連越候儀者申迄茂無之御役人暗殺(公義)並薩州之軍艦ニ暴發等之事件一々御察討ニ相成候ハ、究而暴臣浮浪等之仕業ニ而於大膳大夫茂奉恐入候稜目を以御斷申出ニ而可有御座其程ニ應相當之御懲戒御座候儀順路之御運ひニ而事柄茂速ニ及落着可申賦と奉存候右様之考重疊御廟算被爲在たる儀とハ奉存候得共右之御所置次第不容易筋ニも成行可申甚以家勞仕候此御非常之奉蒙御懇命候私共折角存付候儀其儘黙止罷在候而者却而奉恐入候間不願内々言上仕候以上

二月

長岡澄之助  
長岡良之助

右寫被仰付二月十八日尹宮様は御二方様御出之節御持參ニ而被爲懸御目候由之處宮様殊之外被成御感心朝廷に被成御

元治元年



持參内々者 假覽茂被爲在たる哉之由然とも表向之御達ニ無之候間早々傳奏様に被成御指出候様翌々廿日被仰越候御様子ニ而廿一日朝俄ニ朝廷御建白之振ニ手入有之候を如左(前文) 清書ニ而差上候處即日御供揃次第ニ而傳奏飛鳥井

中納言様に澄之助様被成御參達候(節略)  
元治元年甲子年  
〔尊攘録探索書〕

四月四日着之江戸下廻ニ來ル

一 關老並大小監共此節會津侯春嶽公轉職長州討伐之事件令出候迄承知無之杉浦本どハ令出候跡ニ而承知之由

一 關老並監杯之最初より見込於京都御二方様御建白之御主意同様ニ候處關老も右之令出候際ニ至り承知有之大不服ニ而大論有之候由元し令出候跡ニ而及ニ不及於京地關老さへ承知無之程之事故江戸關老猶更ニ而右之事情透敷通達之た

矣杉浦下之由此節之御建白關老並監杯も別而感心之由

一 小笠原故關老を猶又取出之參談江戸ハ相濟此節杉浦持行との事此儀尤機密之由

一 中川宮様薩々少し疎ニ成依而勸修寺宮様を取出し是と親ミ有之春嶽公專周旋有之との事天下ニ開國論を擴充せんとの事春公三郎杯之術敷との事

一 春嶽公三郎平岡四郎御用人之三人を除ケ不申而ハ逆も和合ハ整間敷との事各爲メニモるの事アリテ周旋と相見春公恰も共和政治の論と云事平岡素より好處のよし依而一橋公を勸メ會津侯を惣裁ニ轉シ春公を守護職と成し罰長之論を起せしふらん天下をして共和政治のことくなん底意より起るるべし春公ハ天下良香程之惡ハ有之間敷唯好ム處を天下ニ行んとの事のみふるべし三郎の意中之尤不審し

一 杉浦の時ニ私を去りて天下の爲ニ盡力するは御國のみふり國論實ニ感心せり御國の如き正議の周旋を助る藩無之を歎息せりとの事共ニ謀るハ御國のみふりとの由

一 土州ハ參豫の事ニ不平近日歸國との事近來大ニ正議ニ成たる由依而此節室堂公歸國別而殘念との事實病ニてハ有之よし全不平より之事との由

一 筑前ハ少しハ公平の形との事

一 薩ハ跋扈之評盛ニ有之候由

一 右者杉浦兵庫頭二月廿二日京都立廿八日着府三月十日京地へ發足同人より田中彦右衛門極密聞取之趣内意申出候次第心覺之書取

一 二月十八日宮部春藏書を長州より家郷の姉妹に贈り兄弟の心事を報す

〔宮部文書〕

一 能きたより御座候間一筆奉申上候いよノ御きげんよく目出度ノ奉存上候きよねん此ごろたかせより申上候ふみよいいよ御らん被下候と奉存候その乃ちもますノぶじにて相くらし申候あよさまへもますノ御さかんよて御一所ニてなす事もノ御申合せ仕りかれこれとあいつとま申候ぶじにて相くらし申候だんはかへモノ御あんしん被下候様奉願上候

一 きよねんしわすよりさんじよふさま御そぞなへくみかしらやくならびニもの見やくを被仰付難有仕合ニ御座候御よろこび被下候様奉願上候

一 京とのよふすもよほごよろしく相なりいづれ目出度御目ニかゝり可申上奉存候御たのしみ被下御きげんよく御くらし被下候様奉願上候

一 さぞノ御わびしき御くらしさぞノ御あんとい可被遊日々わかれかねひ申候しかながらよの中のうきしづみはいたしかたなくたゞ義理たいせつに御座候いよノたづどのにも御そだて御大事ニて御座候

一 たづどのへもかねノおしへおき候とおりによノ孝行第一ニ御座候間よくノ無事ニてせむちよふたし候様御申



付被下候様奉願候さぞノふとりしごとまかれこれでき可申あハ申度奉存候いろノ申上たき事はまことにノつくしがたく御座候間たゞぶじに相くらし候まで目出度奉申上候ままとに今日もいろノ御くげ様方より御用ひき御座候てとりまされハ申候間又々とふから申上候様奉存上候目出度かしく

二月十八日

大 輔

御 姉 様  
御 た づ と の に

なおノ、あめんさしあけ候事ハけつして人に御知らせ御座なき様ニかへそノ奉願上候あらく目出度又々かしく  
二月十九日幕府は京地警衛の爲め陣營胸壁砲臺等の建設地點視察として吏員を出張せしむべき旨を本藩に達す

〔家茂公二度目御上洛一途〕

二月十九日

一御用番水野和泉守様ヲ只今御呼出ニ付安岡辰之助參上仕候處左之通御書付一通御用人を以被御渡候事

細川 越 中 守 家 來 江

細川 越 中 守

當地口々御警衛地理ニ應猶可被仰付箇所可有之候間各要地之形勢ニ寄陣屋胸壁砲臺とも御取建ニ相成可然場所等爲見分御目付方並町奉行組之者差遣候間御警衛場所おゐて家來差出篤と申談見込可申聞事

二月廿日元治と改元あり

〔家茂公二度目御上洛一途〕

二月廿一日

一紀伊殿始惣出仕有之元治と改元被仰出候段於席々老中列座遠江守演達之

文久三年四月

〔崎崎長 返達御用狀控〕

三月十九日

句坂より

去月廿日年號改元有之爲元治之旨御書所々被仰出候依之翌廿一日御弘有之候旨京都表々被仰出候間爲心得相違候事 子 三月

二月廿一日我藩政廳に於て山田十郎の訊問を開く

〔機密間日記〕

晴 二月廿一日

平野 九 郎 右 衛 門

一今日山田十郎儀御間問被仰付候付同席中不淺御奉行所に出席いたし候事

但前日御用人を以御用之有無奉窺候處御用不被爲在旨被仰出候付例之御機嫌伺不奉申上直ニ同所ニ出席いたし候事

〔小笠原備前日録〕

二月廿一日 晴

朝、城内政廳、以屏風圍口之宇、爲座所、穿壁諸官、坐政堂之北廊諸般之事整、而山田者、出政堂北方椽上敷疊之上、鎖手、又以繩縛、以脚之指未癒、不能正坐也、奉行鑄田先問、繼之穿頭、又穿局根官受之間、山田伏罪、而后鑄田、

元 治 元 年



又此后以穿局而可問旨令退、事終、而后移坐於政堂、○與書米家、三條公之授、公之書、山田所携、閉封乎否之事、  
錄田告所述答書至、

二月廿一日長崎奉行等立山役所に於て英國艦長キングストン等と會し聯合艦隊の長州砲撃延期  
並に英人傷害事件に關する談判を開く

〔探襍錄〕

中外問對ニ付、本ノマ、之優柔醜夷之傲慢可觀事二篇

甲子二月立山御役所ニ於て英軍艦船將キンクストン外士官三人并英國士代スミットへ奉行始め支配向御勘定御目付方  
役々立會應接之大意  
奉行高クシタルハ奉行ガ言也已下傲之  
一先般英アルコック當港へ着船之由定而於双方尋問被致候事被存候右者何用ニ而到來致候哉  
而會は仕候得共川事之儀ハ何共承知不仕候

一當節長脇ニ向各國軍艦進發し候趣於貴國も同様と被存候且船數幾多期限幾時たる哉  
左様ニ御座候私儀も各國一同進發仕候得共其後れ候程も難計既英國よりハ七丁門備及ミリーテ船出帆仕來月ニは進  
發可仕承候

右長州一件ニ就而ハ貴國政府より我政府へ被中立候事も有之哉

既ニ四ヶ月前申立置候得共今以何なる御處置も無之候間無余儀右之仕合ニ相成候

右事件ニ就而は我政府ニ於ても甚心配被致既ニ今般大君上洛ニ相成候へは一度は如何と敷處置可有之勿論頭台ニ於て  
差留候權は無之候得共各國軍艦到着之上暫時被見合候議ハ出來間敷哉尤表立申談候譯ニは無之候  
御尤之事ニ御座候各國軍艦相捕候ハ、暫時差留め候手段可有之と勘考仕候

甲子二月廿一日立山御役所ニ於て英軍艦船將キングストン外士官三人并英國士代スミットへ奉行始め支配向御勘定方  
御目付方役々立會應接之大意一應當話畢而

今日申上候議別事ニは無之先夜及傷ニ逢候國民右ハ未タ其罪人御穿鑿ニ不相成哉其儘ニ而ハ難差置候ニ付其趣及備  
細ニ提督へ相達申置候

承知いたし候此方ニ於ても不意穿鑿致居候得共何分手掛無之大ニ心痛之次第ニ候右者手腕を切放候得之治療相叶候趣  
被申居候處彌被切放候哉

左様ニ御座候既ニ切放申候乍併生死之議未タ見極難申勿論其旨も提督へ申入候

手腕及切放候得共生活可致様先日之噂ニ候處左様ニも難至候哉

切放見候得者寸度危く御座候其故は右刀痕彌以全癒仕候哉難保甚掛念仕候

幾時切放され候哉且右手負人年齢ハ許多ニして妻子ニても有之候哉

四日前ニ切放申候年齢は凡廿八歳より三十歳迄と勘考仕候唯ハ所頼ハ同人議至而健康之性質ニ候故斯く手荒き治療

も施し候議出來今ニ殘喘及保居中候不然時は遠く死亡致し居可申候生士ハ英國ニして妻子は無之唯從兄弟有之而已

ニ而候兎も角も御穿鑿之議乍此上早々罪人法網ニ入候様御取計之議相願候

土地之者ニ候得者且夕ニ罪人相分り可申候得共候領之者と勘考いニし候承知之通封建は我國ニ而諸侯各其人民及司牧  
いたし居候得之寸度手数は掛り心痛いたし居候乍併罪人法網被急候ハ國辱之事なれハ如何ニも心力を盡し不違其罪  
人及刑罰致候様取計可申候

諸侯にて銘々土地人民は擁護致居候得共上とる所ハ唯一人ニ候得ハ敢而探索之出來モヤ申事ハ有之間敷存候

勿論候領之者よりも有罪之時は罰するは天下之大法ニ而姑息致し候譯ニハ無之唯方々候領多人數ニ而且夕ニ取調行

届不申と申事ニ候



此事件之御處置ハ鎮台ニ屬し候哉大君ニ屬し候哉

裁奪處置するは鎮台之職也是を命するは大君也今大君之レを命し鎮台之ヲ奉る其元ハ一也區別するらる

此事件備細ニ提督へ申立候就而は於貴下御差支之筋無之哉  
毛頭差支無之候

貴國ニ於てハ數度及傷之議有之候得者其儘ニも難捨置其故申遣候

先夜兇人取殘候草履右者崎地之人々着用とハ大ニ違ひ居候得者是を以手掛りとして穿鑿可相届被存候  
右之事ニ候去ふるら右草履は崎地にてハ不相用と申而已ニ而他所之士官ハいつまもこれを用ひ殊ニ目印も無之上ハ一  
草履を以て手掛りニハ難致候

然れとも其場へ殘し置候草履あれハ夫を以如何とか目當之吟味も可相成と被存候

吾國も罪人ヲ隠し候ハ法禁ニ而殊ニ事件他國ニ係ル上ハ尙嚴重ニ取扱候乍併何分封建之故職人別改め調へ候事等郡縣  
之如く速ニは難届候

英國は日本ニ比し候得者戸口萬倍致居候得共罪人ヲ捕候は至而速ニ候

先年無人島ニ於て一の亞人ありて英人の妻ヲ竊み金銀も共遁去サントイス島ニ潛居候處漸く七年ヲ經て是ヲ捉へ候由  
然る時は速速は同様ニも無之穴勝英國計り速也と申譯も有之間敷候

近々英國より海陸之兵卒到着之由實ニ候哉

左様ニ御座候是ハ何處ニ對し戰爭致候議駁と承知不仕唯提督之命ニ隨ひ來り候得者同人之在所へ屯泊可仕候右一件  
英人英人捕候付 アドミラルル承候ハ、當地へ相越可申哉も難計可相來は其前右之件ニ本人相知れ可申様致度ものニ御座候

委細承知いたし成丈手ヲ盡し速ニ吟味ヲ遂候様夫々可申速候二月廿一日右長崎住人玉名純之助より差出候

二月廿二日一橋慶喜長州處分に關する幕閣の密議を長岡護美に内示す

〔叢書類至密稜書〕

二月廿二日

一二公子御建白公武御採用ニ而一橋公ヲ御拔書左之通

長ノ末家末藩家老吉川監物等大坂迄御呼登 勅使傳議兩役之内野宮正三下坂七卿早々差返候様且叢慮之眞偽十八日前後之  
次第條理明白御諭已後台命を奉候様長脇悔悟迄之處ハ 勅使より御諭過暴激烈ハ閣老ヲ御糺問ケ條書等早々國許へ差  
遣候様御運ニ相決候事

但長州ハ御登坂之御使被差立候由

〔尊攘錄御建白御國議〕

一橋公より良之助様に御渡之書付

一朝廷より御沙汰之品度有之候付末藩家老吉川監物今登人

一傳議兩役正三野宮之類下阪相願候事

一最初傳議より七卿早々差返候様且 叢慮之眞偽十八日前後之次第條理委敷相願候事

但此節奉 勅始末御差返し此以後屹度奉 台命候様御沙汰有之候様致度候事

一糺問之ケ條閣老より相渡早々國許に差遣候様申聞

說得家は勝手ニ周旋候事

二月廿二日長岡護美書を松平春嶽に贈り山科宮家に藩兵派遣のことにつき交渉する所あり

〔子爵長岡家文書〕



護美公より

春嶽公に被進之御書寫

拙毫拜呈仕候陳ハ山科宮に人數差出候義頃日私に御沙汰有之候處其後高崎伊勢ヲ以私藩に被仰越候由之御書中ニ付山々都合モ有之私方ハ未藩中ハ不申候處昨日カ伊勢方書狀ニ而春嶽公方私に被仰候末念ニ人數之義申出候間甚都合不  
宜仰冀ハ今一應私藩中に御手許方被仰候様奉願度草々頓首何レ近日奉期拜語候謹言  
仲春廿二日 良之助

大藏 太輔 様

玉机下

二仲御自愛奉祈候

二月廿二日在京の我藩人參豫の任令外國聯合艦隊襲來の風聞京都守護職の交代及び征長準備の幕令等中原の形勢を報する者あり

〔探禊録〕

中原景況之事

さて京師模様段々打替當時大樹公上洛中ニ而浪上等嚴重入込被禁處々當所等被差置候得共矢張入込居候哉既ニ早春來三條制札場新制札掛り近來諸浪人并水戸殿浪人等新微組杯と唱富商へ押入金銀らめ取候間右等之もの見掛次第打取可申との文間ニ候處兩度計何方へ持行候哉不相分又々新ニ掛替都合三十日之内三度取捨候由右は水府藩より致候杯風説有之候得共全ハ左様ニ而無之由ニ御座候○參豫と唱一橋宇和島春嶽三人日々參 内之趣ニ候處此節又々模様替り鳥津三郎一橋外一人尾州公と申候 三人日々參 内國事御用掛と申山ニ御坐候尾張公は今ニ出京無之○八幡山崎臺場築立ニ相

成候由ニ御座候○二月六日五ヶ國軍艦大坂長州等へ差向候趣專風評候へ共今八日迄何之沙汰も無之候乍去二月二日比より幕吏數百人大坂へ差向候趣隨ニ承候○二條關白殿中川宮徳大寺右府殿近衛殿御父子御日參先般退役之議奏阿野久世三條西殿等再役專御政務之由攘夷之儀ハ此節何方へも行風説無之候○長州家老于今伏見返御返答相待居候長州打拂又候被免出京有之杯風説不取留事ニ候○五ヶ國彌渡來候ハ、何歟模様も相替候哉ニ存居候○去御局之御咄之由ニ而三條始此儘ニ而可差置所存ニハ無之候得共時勢難及力之 勅諭御坐候由實ニ恐入候事ニ候○二月十一日會津守護職御免永代五万石加増陸軍惣裁被仰付參議御推任之由參議之所ハ此頃辭退中之趣○脱走七卿より上書有之攘夷一邊之由猶跡より可差出候○困州備前宮堂公ハ長州同説之由 禁中風評有之候○長州征伐大將紀州船軍惣裁鳥津大隅守陸軍惣裁會津共外安藝井伊阿波姫路小笠原肥後等十六大名御内意被仰付今度幕府より使者差向返答次第出張候由專會藩人之説ニ候二月廿一日 無名氏

二月廿三日朝廷重ねて松平容保に參豫拜命すべき旨を達せらる

〔風聞書〕

二月廿三日

御沙汰

松平肥後守

今度參豫推任之事 御沙汰被爲在候處頗ニ謙退固辭之儀且庶幾可報祖先遺靈之旨趣神妙之儀被 聞食候得共方今之形勢實以不容易之儀御守護職掌其任重大既ニ去八月十八日一舉盡力周旋鎮靜之所値偏ニ 叡慮被爲在候間御請可有之候様再 御沙汰ニ候

二月廿三日勝麟太郎能勢金之助等長崎に着す

元治元年



〔探禱錄〕

幕吏勝某等長崎へ下向之事

御軍艦奉行勝鱗太郎様御目付能勢金之助様支配調役並小杉右藤次御徒目付大木六郎村上與七郎御小人目付中山七太郎  
小澤鍋太郎 從者太田黒岩太郎 去廿三日長崎御着ニ相成候段申越候此段被及御達可被下候以上  
子二月

(此月十五日佐賀關着廿日熊本に泊し廿一日高橋川より島原に渡る)

二月廿三日長人木梨某米澤を遊説し次て山形秋田を歴訪す

〔尊攘錄探案書〕

(三月廿九日附田中彦右衛門承り書)

一長之木梨長左衛門と歟 一説ニ彦右衛門とも云 申者奥羽邊を動さんと使者等參候儀認差出置候通之處二月廿三日同廿六日迄米澤  
ニ滞留君公ニ調し候由米澤ハ恐怖との事 此恐怖と申備得と不相分な 其七日米澤立廿八日上ノ山泊廿九日大雨ニ付同所  
滞留三月朔日山形泊秋田ノ方に趣き候山右ハ最初仙臺侯御出府御道中御旅宿ニ而右長人拜謁其節仙侯何之御返答も不  
被爲成一寸ノ御逢ニ而右之タルヲ右米澤等に參りテハ徹夜得と御談合申上候杯と申述たる歟之山 (三月十九日ノ條ニア  
案書ヲ參  
照セヨ)

二月廿三日筑藩世子黒田慶賛長州處分に關し幕府に建白す

〔探禱錄、木庭文書〕

筑前侍從慶賛朝臣幕府へ建議之事

御國是之儀并長州御處置振等鄙意無覆臆早々建白仕候様被相違奉謹承候重大之事件輕易ニ難申上候へ共長州御處置之  
儀別而御急之御事柄と奉恐察候間愚意之趣不避斧鉞吐露仕候根同州は勤 王攘夷之原意より無發仕候儀ニ候得共頻ニ  
詭激之論及相立幕府を輕蔑致し別而昨年来之舉動御威光ニも相抱り候付嚴敷御査問之上致峻拒候ニ於而者六師征討可  
爲御相當との論も追々承候へ共篤と勘考仕候處方今海寓之人心未及一定漸近日ニ至 公武御和合水魚之御親被遊候御  
手始且は外夷之騷擾も難計御座候折柄御減却と申ニ相成候而は同州は不及申諸藩も人心沸騰仕或ハ不逞之徒庶民を致  
煽動皇國爭亂之端ニ相成可申歟と深焦思仕候儀ニ御座候其上頃日諸藩へ幕府より封書被渡候ニ付而は長州御征討之儀  
一統へ流布仕忽同州へも相響き可申然時は一往之御糺も無之直ニ御征討と相心得詭激之情態增長致し終ニは正義之  
臣も不堪殘懷過激之徒へ黨與仕國之存亡をも不顧必死之覺悟ニ而籠城可仕勢ニ至り可申歟と勘考仕候就右先一應末  
家并老臣之内早々被差登 勅使幕使を以是迄之心得御訊問之上理非分明ニ方今之御趣意をも御懇説ニ相成大膽大夫父  
子申合速ニ御請申上候様被仰付追々悔悟之徵顯し過激之罪を奉謝ニ於テは出格之憐愍を以社稷無別條様寬典ニ相成之  
儀御上策歟と奉存候一躰ハ 勅命を被請幕府之處置當然之儀ニ候へ共一途ニ 微慮遵奉し昨年異船掃攘之魁仕忝も  
微感被 仰出も右之監察使をも被差下且去五月十日攘夷期限之被 仰出木懷之餘り今以去八月十八日以前之處内實之  
微慮とのミ存込罷在幕府より何程懇説御座候而も過激輩等承服仕間敷哉ニ奉存候ニ付此節之御處置者 勅命を以被  
仰出候方可然愚考仕候右之通御詰問被遊候而も悔悟不致奉對 公武不逞之暴論等於申上候者違勅之罪難遁候ニ付其節  
御征討被仰出候而も可然哉ニ候へ共相成丈ハ悔悟之御風諭被仰出候御事歟と奉存候御下問とハ乍申熟考も不仕粗漏ニ  
申上候段宜御取捨被爲下候様奉懇希候御國是之儀ハ尙又再三熟考之上可申上誠惶誠恐頓首々々  
二月廿三日 松平下野守慶賛

二月廿四日幕府は先月廿七日將軍參内の節賜はりし宸翰の寫及び本月十四日將軍の捧呈せし請書の寫を各藩に廻達す



〔文久三年元治元年迄 江戸返達御用狀扣、文久四年日記、尊攘錄皇武令〕

猶々御嫡子方に茂御通達相成度候以上

私儀今日登營致候處 宸翰寫并御請書寫別紙兩通牧野備前守殿御達書一通被相渡且又大目付神保伯耆守の別紙被相渡各様に致通達候様被相達候間寫差廻申候以上

二月廿四日

松平陸奥守

松平加賀守様 松平三河守様

藤堂和泉守様 松平越前守様

細川越中守様 立花飛彈守様

佐竹右京大夫様 宗對馬守様

松平備前守様 松平飛彈守様

牧野備前守殿達之覺

大目付に

今日相達候趣病氣ニ而出仕無之者并在國在邑之面々共不洩様可有通達旨出仕之面々に可被達候事

二月廿四日

(神保伯耆守渡)

去月廿七日御參内在京万石以上之面々々供奉參内 被仰出其節 勅書御拜見万石以上之面々々に拜見被仰付依之去ル十四日御參内之節御請被仰上候ニ付右宸翰寫并御請書共爲心得相達候事

二月

朕不肖ノ身ヲ以風ニ天位ヲ踐ミ忝モ萬世無缺ノ金甌ヲ受ケ恒に寡徳の 先皇と百姓とに背カントヲ恐ル就中嘉永六年以來洋夷頻に猖獗來港し國體殆と云へからず諸價沸騰し生民塗炭に困む天地鬼神夫 朕を何とか云ん嗚呼是誰の過そや夙夜是を思て止コト能はず嘗て列卿武將と是を議せしむ如何せん昇平二百有餘年威武の以て外寇を制壓するに足らざることを若妄に膺懲の典を擧んとせば却テ國家不測の禍に陥んことを恐る幕府斷然 朕カ意を擴充し十餘世の舊典を改め外には諸大名の參勤を弛め妻子を國に歸し各藩に武備充實の令を傳へ内には諸役の冗員を省き入費を減し大に砲艦の備を設く實ニ是 朕カ幸のみに非ず 宗廟生民の幸也且去春上洛の慶典を再興せしこと尤嘉賞すへし豈料ラんや藤原實美等鄙野の匹夫の暴説を信用し字内の形勢を察せず國家の危殆を思はず 朕カ命を矯て輕卒に攘夷の令を布告し妄に討幕の師を興さんとし長門宰相の暴臣の如き其主を愚弄し故なきに夷船を砲撃し幕使を暗殺し私に實美等を本國に誘引す此の如き狂暴の輩必罰せずんはある可らず然りと雖皆是 朕カ不徳の致す處にして實に悔慙に堪へず朕又おもへらく我の所謂砲艦は彼か所謂砲艦に比すれば未だ慢夷の膽を吞に足らず國威を海外に顯すに足らず却て洋夷の輕侮を受ん歟故に頻に願ふ入ては天下の全力を以て攝海の要津に備へ上は 山陵を安し奉り下は生民を保ち又列藩の力を以各其要港に備へ出ては數艘の軍艦を整へ無飽の醜夷を征討し 先皇膺懲の典を大にせよ夫去年は將軍久しく在京し今春も亦上洛せり諸大名も亦東西に奔走し或は妻子を其國に歸らしむ宜なり費用の武備に及はざること今よりは決して然る可らず勉て太平因循の雜費を減省し力を同ふし心を專にし征討の備を精銳にし武臣の職掌を盡し永く家名を辱ること勿れ嗚呼汝將軍各國の大小名皆 朕カ赤子也今の天下の事 朕と共に一新せんことを欲す民の財を耗すことなく姑息の奢を爲すこと無く膺懲の備を嚴にし祖先の家業を盡せよ若怠惰せば特ニ 朕カ意に背くのみに非ず皇神の靈に叛く也祖先の心に違ふ也天地鬼神も亦汝等を何とか云んや

文久四年甲子春正月

御請

元治元年



去月二十七日拜見被 仰付候 宸翰之 御旨者 御即位以來皇國之災禍ヲ悉ク 聖躬之御上ニ御反求被爲在候 勅諭ニテ誠以恐惶感泣之至奉存候情幕府從前之過失ヲ自反仕候得者多罪之至奉存候臣家茂不肖之身を以て徒に重任を辱め紀綱不振内外之禍亂相踵頻年奉惱 宸襟候而已ならず去春上洛之節攘夷之 勅を奉すと雖モ其事實遂に難被行横濱鎖港之談判すら未だ成功之期限も難量折柄再命に依て上洛仕候上者極メテ逆鱗に觸れ嚴譴を可相蒙者素より覺悟仕候處意外之 宸賞を奉蒙候而已ならず至仁之恩諭を以臣家茂并大小名を赤子の如く御親愛將來を御勸誠被爲在候條臣家茂一身之上に取り海岳之鴻恩實以可奉報答様も無之候自今以後萬事の舊弊を改め諸侯と兄弟之思を成し心力を合せ臣子之道を盡し勉て太平因循之冗費を省き武備を嚴にし内政を整へ生民ヲ蘇息致し攝海防禦者勿論諸國兵備を充實仕洋夷之輕侮を絶ち砲艦を嚴整して遂に膺懲之大典を興起いたし御國威を海外に輝耀すへきの條件等彌以勉勵仕乍恐 宸衷を奉休願度奉存候事に御座候乍併膺懲妄舉仕間敷との 御慮之趣は堅く遵奉仕必勝之大策相立候様可仕奉存候尤横濱鎖港之儀者既に外國にモ使節差出候儀に御座候得者何分にも成功仕度奉存候得共夷情も難測候得者沿海の武備に於ては益以奮發勉勵仕武臣之職掌固守仕大計大議者悉く國是を定め 宸斷を奉仰皇國之衰運を挽回して外は懋夷之膽を吞内は生靈を保ち奉安 御慮上は

皇神之靈に報奉り下は祖先之遺志を繼述仕度奉存候是則臣家茂之至誠懇請に御座候依之此段御請奉申上候臣家茂誠恐 誠懼頓首謹言

臣 家 茂

御請

二月廿四日我藩日田及び天草警備兵の一部を撤する旨を西國郡代に通牒す

〔他國狀扣〕

一屋代増之助様

二月廿四日

貴札致拜見候然之昨年以來浪士暴行島民安堵ハムし兼候付非常備之内相應之人數肥後國天草御陣屋許に差出置候様依御達其節より物頭并鉄炮方三拾人余出勢爲致置候處未全騒擾鎮靜ト申儀ニ之無御座候得共當節九州筋先平隠之趣ニ茂相聞候付出勢人數之内鉄炮方十五人に指揮を司候者一人と是迄之通出勢其餘之練引之姿を以此節より追々人數引取候様尤何時ニ而茂出勢無差支様爰許に備置候様被仰下趣承知仕越中守に茂相達可申候恐惶謹言

一右同人様

二月廿四日

貴札致拜見候然之西國筋浪賊暴行之取沙汰茂追々薄らた候哉之由右之出勢等いたし御警衛嚴重成故を以御地に不致襲來哉之程茂難計候付戒嚴解方之儀一時ニ候而之其趣四境に流布又之浪士虚ニ乘間敷とも難申且之和州十津川邊に浪士共竊ニ寄集候由風聞も有之旁油斷之難相成乍去貴境邊之模様を被成御考後度御達ニよつて差出置候増人數五十人之分常月十日比より日數三十日程ニ練引之姿を以追々ニ不廉立様引取方之儀出張總督飯田熊之助に御達ニ相成候段被仰下承知仕越中守に茂相達可申候恐惶謹言

追啓増人數引取方之儀付而之得貴意候儀も御座候處右引拂等之儀之御差圖を受取計可申筋御座候處差付ニ引拂之儀得貴意候段全私共不調法之至心外奉存候熊之助カ茂引拂之儀申出候間一時ニ引拂候儀之難相成旨御達御座候由被仰下趣承知仕彼是宜敷御許容可被成下候最前得貴意候儀之何卒御取捨可被下奉頼候以上

二月廿四日沼田勘解由京都より歸藩す

元 治 元 年



〔機密間日記〕

元治元年  
〔二月廿四日の條〕

一筆致啓上候太守様益御機嫌能被成御座奉恐悅候其外上々様益御安泰可被成御座恐悅奉存候將又各様彌御堅勝可被成御座珍重之御儀奉存候然者私儀御二方様より太守様に被仰上候御用筋有之早打ニ而去ル十六日京都被差立翌十七日之朝着坂仕直ニ乗船今廿二日無異儀鶴崎に着仕候此表相變儀無御座候今日直ニ爰許出立仕明後廿四日大津より御花畑に罷出御用筋等申上管御座候且又京都出立之節御二方様より太守様に御機嫌御伺之稜付并御役々より伺御機嫌稜付進覽仕候間可然様奉願候此段爲可得貴意如是御座候恐惶謹言

二月廿二日

沼田勘解由

長岡帶刀様

長岡監物様

小笠原備前様

松野亘様

平野九郎右衛門様

稜付扣略ス

〔小笠原備前日録〕

二月廿四日晴

沼田氏十六日發京、今晚到、携兩有吉之帖來、告京師之事情、

二月廿五日山内容答書を長岡護美に贈り來廿八日を以て歸國すべく明後日來訪あらば面晤を

得べきに口を告ぐ

〔子爵長岡家文書〕

貴書拜閱仕候益御安全奉雀躍候差出置候拙詩稿御返却落手仕候如論先日之願る違約遺憾此事ニ御座候小子來念八日發足明日ハ登城明後日ハ終日閑暇ニ付御來駕被下候得ハ得面晤可申貴答旁勿々此段頓首

仲春念五書干棋聲閣

五斗先生

長岡公子

拜復

〔尊攘錄探索書〕

元治元年  
〔子四月四日着之江戸下廻ニ來ル杉浦兵庫頭より田中彦右衛門極密聞取書抄略〕

土州ハ參豫の事大ニ不平近日歸國との事近來大ニ正議ニ成たる由依而此節空堂公歸國ハ別而殘念との事實病ニテハ有之まし全不平より之事かとの由

筑前ハ少しハ公平の形との事

薩ハ跋扈之評盛ニ有之候由

二月廿六日幕府諸侯を二條城に會し公武一和に關する意見を徴す

〔尊攘錄自筆狀〕

元治元年  
三月五日京發之御飛脚同十九日着長之御取扱筋ニ付御二方様被仰上之事

別紙を以申達候沼田勘解由當表出立迄之光景之參豫衆方頻々御參内何事も朝議ニ而相決公義は御押懸之形ニ有之扱聞

元治元年

五九七



老方之模様ハ幕威興張之氣味合有之甚以奉懸念候間夫等之境既ニ御建言ニも相成候筈之處近來ニ至候而ハ御役人方も漸々と一躰之御都合相分朝廷ニ而も宮様方專御心配ニ相成段々御居り合之御様子ニ相聞此上順路之御運奉祈候事ニ御座候就而ハ先月廿六日列侯方二條御城に被召寄存意之次第聊無遠慮申上候様との趣御沙汰有之候付御二方様ハ明日明後日あたり被仰立之筈ニ而御草稿も出來仕居申候

一長州御取扱之儀付而御建白之寫ハ先便差進委細申達置候通ニ候處其後朝廷幕府共愈以御採用之方ニ被決候由右ニ付而御二方様に追々御相談之趣有之其節被仰上之二通是又差進入御披見申候近日ニといつを御施行ニ相成可申迎も悔悟ニ至候外有御座間敷其方ニ之筑前より白水白ふと兩三輩被差越内輪專御周旋も有之様子ニ承申候右之趣爲可申達如是御座候以上

三月五日

右 吉市左衛門  
右 吉將監

御家老 宛殿  
御中老

二月廿六日日本藩森井惣四郎は幕府の對外交渉水戸の事情其他江府の形勢を報告す

〔採録〕

森井某江府下時勢報知手簡之事

一英國アルコック來着ニ付井上閣老横濱出張應接有之候處渠より國王之命を蒙り候一條之大樹公御上洛御留守ニ言上仕候而も迎も御返答難出來と一切閣老へ之不申出アルコック一分之存意を申候ニ最早攝州大坂兵庫越後新潟之三港御免しニ相成候よりは何年ニ相成候哉それをも御開無之殊ニ上官ミニストルトハ各國共ニ江府内住居御許ニ相成候へ共是以人心不鈞合とて御斷之末遂ニ御殿山之商館も御燒拂被成其上横濱鎖港と申儀ハ餘り御勝手之御振舞にてハ無哉と

恨事を申候由全躰王命を蒙り罷出候趣意ハ前文之三港是非當年より開と申所存之由ニ候へ共其事ハ不申出山

一舊冬廿九日外國へ被差出候使節船アルコック清國定海港ニ而出達使節之人々を遮り留め而申候ニは迎も本國へ御出被成候とも國王聞入不申是非御引返し被成候と頻ニ勸候へ共聞入無之由然處横濱來着後各國ミニストルを大ニアルコック罵り辱め候由其譯は日本より使節被差出候を拒止め不申故と申事右ニ付彼等之中議論兩端相成已前より參居候者ハ當時 日本之形勢熱察致し候ニ迎も此三港を開候儀を申向候とも行を不申必事之破れと相成との説ニ而アルコックも近來大ニ議論屈けゑると承申候併實情は未だ聞取不申候

一使節船定海より書狀到來致候ニは此度アルコック罷出候儀ハ程ニ寄候而は御心配ニも相成可申と認有之たる由承申候一水府ハ先便ニも言上仕候通長州説之者國權取最早當君幕府ニ搦不申只々 天朝之命を奉して攘夷致の論近來愈盛ニ相成諸方之浪士多勢集り近國へ金子を募りニ出候者不少且神武館と申學校共潮來之方ニ築立候由惣躰浪士之まかなひは豪農商ニ強而申付置候由水藩人嘆息致し話仕候彼等之趣意は潮來を本城とし玉造水一を本丸と致も覺悟之由當君は御在府少しも御手ハ出不申候

一仙臺侯當月廿日御出府ニ相成申候去秋比より京師關東二方より御召ニ相成居候處此度は公邊より御留守御警衛被仰付又 勅命も同所江府へ罷出候様被仰出候ニ付御出府御座候由

一昨廿四日御在府列侯田安御屋形ニ惣御召出し今度大樹公御參 内之節 宸翰御下し御座候御寫拜見被仰付且長州使問之上承服不致節は征伐之御覺悟と申事も内々 御沙汰有之候由最早長州征伐之御様子と申事江府内風評致居申候一安井忠平ハ公邊御代官被仰付候へ共何方へ參候歟相分不申風評ニは猶轉職致し要用之職被仰付杯も沙汰致候へ共是以實情相分不申候其他京師之事情ハ承居候へ共彼方より申上たると奉察候間態と相省申候

子二月廿六日

森井惣四郎

猶々長州よりハ東北列侯へハ無殘廻文差出され候檄文ハ一寸一見致候處聊長州ニは罪ハ無之との申譯ニ而御座候何

元 治 元 年

五九九



次便ニは書付差上可申奉存候已上

〔海舟日記〕

二月廿七日（此時海舟長崎に滞在す）

肥後藩庄村助右衛門來る 横井先生の口上あり且聞く當廿三日熊城に京師より早使來れりと これ長州御所置に付彼若異存を挾まば軍勢を出すべきとの事なるべしと

其他阿州筑前福島等十家同令を承れりと云説あり

二月廿八日關白二條齊敬は長州末家并家老召喚の件に關し一橋慶喜を経て長岡護久同護美の意見を徴す

〔公武の御建白〕

二月廿八日殿下より一橋様に御達有之御二方様に者一橋様より可被成御達旨に而御見込者有無とも翌早朝二條家に直ニ被仰込候様一橋様御用人より寫添手紙ニ而御用人迄被差越候云々（節略）

去ル廿四日於御所御懸ケニ相成候御書付之内長州末家並家老浪華迄御呼登せニ付傳議兩御役御下坂之儀篤と勘考仕候處先浪華迄御呼登共之方御相當ニ而茂可有御座哉ニ候得共最早御處置振御決議之御事故御當地迄被召登候而茂強而御懸念之筋も有御座間敷先方ニ請候處も浪華迄御呼登せと申ニ相成候而之此節之御處置御手初メニ忽憤激之氣を發し悔悟無覺束奉存候最前家老并原主計儀之入京不被差免候得共此節之召之事故入京被仰付候而も屹度御譯相立可申何卒被叶儀ニ候ハ、御當地迄被召登候方ニ相成度儀と奉存候右之別而御急之御事と奉存候間書面を以申上候御書付之内一體愚存者後刻參内之上申上ニ而可有御座候以上

二月

二月廿八日長岡護久同護美幕府に上書して速に歸藩を許され藩主を助けて幕命の貫徹に努力せんことを請ふ

〔機密間日記、京都返達御用狀扣、文久四年日記〕

文久四年 御用番水野和泉守様に二月廿八日良之助様御參達

私共去秋出京仕候子細者越中守より御届仕候通ニ而其以來官武御一和之儀付而茂乍不及今日迄微力を盡候事ニ御座候處先般公方様猶又御上洛右之御基本被爲立一體之御事柄茂御内輪ニ而は段々御取堅ニ相成候御模様ニ奉親誠以奉恐悅候乍然未御居り合と申譯ニ茂至兼候間今暫相滯何歟之御用相動候管候處過ル十一日越中守に御渡之御封書之趣御密示之通候得者不容易御事柄ニ而孰茂滯京之儀何分落着兼申候當節追々出京之諸藩茂有之當地之御手當筋は御不足之儀茂有御座間敷候間一刻茂罷下越中守に力を添申度候條右之趣 朝廷に被仰立兩人一同此節御暇被下置候様奉願候如是御時節ニ相成候而者彌以富國強兵之心懸專要ニ而藩屏之任ニ力を入不申候而は難協候處越中守領海場廣之防禦筋有之候上數年來相州御備場受持被仰付置候上京地御警衛向數箇所之御用被仰付大勢之人數差出相州之方は昨夏御免相成候得共天草並日田表御警衛茂被仰付多人數差出置一昨冬より昨春迄越中守良之助致出京一旦引取候後間も無兄弟上京仕同勢大概二千餘人三箇年ニ懸ケ寺院町家等ニ差置候付而は月々莫大之入費ニ而如何體に茂國力取續兼候趣追々國許より申越候間其邊之儀茂御合願之通不日ニ御暇被下置候様幾重ニ茂奉願候以上（本文申請に對し三月二日猶滞在すへきあり兩されたり）

二月廿八日

長岡澄之助  
長岡良之助



〔叢書類至密稜書〕

二月廿八日

一二公子御暇願書水野閣老に御差出ニ相成御願振公武御建白御採用ニ相成候上ハ先度御渡之御封書之趣有之候得者二公子御滯京ニ相成候而ハ御不安意且一昨年追々之御滯京三ヶ年打續御代ル々々御出京且相州御請持後も天草表御請込何分國力永續出來兼候ニ付二公子共ニ御暇被仰出候様御願ニ相成候事

二月廿九日長岡護美久同護美は長州末家并家老召喚の件に關する二條關白の諮問に答へ尙其謄本を一橋慶喜に贈る

〔尊攘録御建白御國議、公武に御建白〕

清書(御答)并寫とも谷氏(内藏)に差出候處廿九日早朝二條家に青地源右衛門持參差上御落手夫より一橋様にも同人持參寫(御封書也)御用人黒川嘉兵衛殿に差出直ニ可被差上由挨拶有之候山(節略)

御本書中奉書半紙上封美濃紙一橋様之寫ハ中杉原卷也

長州末家等浪華迄御呼登之儀付而ハ去廿四日於御所御參談之通候處最早御處置振御決議ニ茂相成候事故御當地迄被召寄度由一橋殿迄被仰進候趣通達有之乍恐至極之御都合と奉存候尤併廻等者仰山ニ無之相當之行装ニ而罷出候様被仰付候方可然歟と勘考仕候以上

二月廿九日

長岡澄之助  
長岡良之助

二月廿九日長岡護美賜暇歸國の事につき松平春嶽に照會する所あり

〔子爵長岡家文書〕

護美公より

春嶽公に被進之御書寫

元治元年 甲子二月廿九日

塗鴉奉汚電眼候春暖御安起盟筆愈御清安奉大賀候切御暇之義ニ付而長谷川仁右衛門迄被仰候趣甚々々此上ハ公武之御裁判ニ奉從候次第ニ付如何程之御模様ニ可有御座敷小子カギリニ内々可被仰越奉願候小子心中ハ全思召次第ニ隨候儘爲覺悟奉願度且明日カ明後日之中御都合ニ罷出可申其外御話海山々々離間之巷説ヲ信ズル勢可嘆々々草々不具

仲春盡

長良

越老公

机下

二仲御白玉專祈候

二月某日本藩大野鐵兵衛を千葉城の獄に投す

〔木庭文書〕(加屋壽堅編、無名ふれは今假に私關能弘道漫記後篇と名づく)

或人就縛之事附家ニ送る歌及び元日乃咏之事

伏富濃安國過し歳より宿願乃子細ありて内田村 大神宮へ參籠之處ぬヤ捕手之役々さしむけられ即日千葉城圍圍ニ繫りしはいるなる邪神の禍事をやヤ人々嘆らざるはふかりし其時ありたふよりよつけて家人ニ遣れる哥ニ起て祈り伏ても思ふ一筋は神そしるらむ我國乃爲  
浮雲乃よしかる身々ふりぬとを靈幸ふ神乃まろしめしてむ

元治元年



曇りなき御代と逢ふ身と浮雲はかゝるなけきハ唯暫しれ  
兄弟やうがらやらは天乃戸はあり立日乎待てまへや

元日比哥とて

久方比天比戸明て出る日比ひりもそひて春は来しけん

新玉乃年緒なる九神垣よかけてそ祈る御代乃榮乎

二月某日薩藩は方今の急務は攝海の防備を嚴にするに在りとし之に對する藩士の意見を徴する  
と共に藩の持論は萬古不易の攘夷を行ふに在りとの旨を示達す

〔元治元年  
尊攘録探索書〕

薩州家中に示候山之書附寫

一夷賊征服之儀從來之 徵慮ニ被爲在候得之今般官武御一途之根軸被爲立 宸翰ヲ以被仰渡候趣ニ被爲在候上之幕府之  
勿論列藩一同盡死力不奉安 宸襟候ハ而之臣子之分難相濟儀と存候就而之於征夷之策略ニ方今之急務たるハ接海之要  
港守備嚴重相調候儀ニ可有之存候間時世之急務致言上候様との趣先達而申渡置候得共猶又右攝海守禦之術ニおるハ  
成敗之所分人命之所係ニ而實以至大至重之事ニ候間方略之次第存寄有之候者ハ不差置可申出候當時於諸藩開鎖之說致  
紛擾候哉ニ相聞得甚敷ニ至り候而之我藩を開港説と唱候由ニ候得共決而可答ニ非モ又一時愉快之説を聞可動ニ非モ我  
等趣意ニおるハ一昨年来致持論候通我ニ十分武備を設萬古不易之征夷ヲ行ヒ度との着眼ニ而神州之安危ニ致關係候  
御大事之時ニ至り數年之 徵慮ニ奉基大策見居候上之天下後世迄も致貫徹度志ニ候條幾重ニモ主意取違無之様爲心得  
申聞候事

二月

右書付之咄ハ當月初頃承及居候處二三日目前右書附薩藩海江田カ爲見候ニ付寫し差出中候以上

子ノ四月十八日

田 中 彦 右 衛 門

三月朔日幕府は本年八九月頃迄に人別改帳を提出すべき旨を各藩に令達す

〔文久三年  
京都諸扣〕

御同席觸寫

當子年諸國人別改被差出候答ニ付諸事改方認方等者前々之通候間人別改帳而當八九月頃迄之内自分方に可被差出候此  
段御同列中不殘様可有通達候答之儀之先々銘々より不及挨拶各より可被申聞候以上

三月朔日

溝 口 讀 岐 守

松 平 陸 奥 守 殿

津 輕 越 中 守 殿

右 留 守 居

三月朔日本藩老臣平野九郎右衛門に上京を命す

〔小笠原備前日録〕

三月朔日陰

平禁氏、受準備終則可出京之命、蓋陽春開而公自命、無傍坐之人、議方今之事、至時後而歸家、

三月二日長岡護久同護美參内寸傳奏より勅諭を傳へて猶滯京すべきを命ぜらる

〔京都返達御用狀扣、機密間日記、文久四年日記〕



右申立之趣無據相聞候得共昨年上京以來彼是盡力之處不遂其功事央ニして賜御暇候段御殘念ニ付兩人共今暫在京之儀被仰下候事

長岡澄之助  
長岡良之助

三月二日藩主慶順先月十一日發征長に關する幕令に對し請書を提出す

〔元治元年 尊攘錄自筆狀〕

水野和泉守様に

此度松平大膳大夫父子に御糾問之筋有之萬一承服不致節者御征伐可被遊思召ニ付其節者討手被仰付候間用意可仕旨御内意被仰出候段御封書之趣奉得其意候

細川越中守

三月三日

〔上包ニ左ノ通朱書アリ〕  
御請案取調候様二月廿八日大木氏被申付翌廿九日朝取調差出被存寄無之御家老衆御參談相濟被奉伺候處思召不被爲在旨即日御達清書之儀被申聞

右御請書御用人清田新兵衛三月三日爰許被差立御指上ニ相成候事

三月三日長岡護久同護美長州處分寛典を可とするの意見書を一橋慶喜に提出す  
〔元治元年甲子 尊攘錄御建白御國議、尊攘錄自筆狀〕

〔三月三日一橋慶喜へ提出〕

長州御取扱之儀付而昨日御評議之末見込之趣書付を以可申上旨奉得其意候御察討之上悔悟之模様相分不申候而は御慈

戒之輕重茂難量譯ニ御座候得共先日茂言上仕候通乍恐初發官武之御處置宜を被爲失候處より釀成候罪ニ而止を不得事  
情茂有之候間過激浮浪等相應ニ取締を附奉恐入候稜目を以御斷申出候ハ、可成丈御寛典ニ被仰付度奉存候以上

長岡澄之助  
長岡良之助

三月三日

三月四日在京本藩老臣は中川宮及び山階宮に衛士派出所に決定せし旨を藩政府に通報す

〔元治元年 尊攘錄自筆狀〕

三月五日京都立御飛脚同十九日着 尹宮様觀修寺宮様へ御人數被差出候一件探索方交代之事

以別紙を申達候尹宮様御人少ニ付而薩州之勿論會津其外よりも御人被差出置候付此方様よりも御差出之儀右之兩藩より周旋之末宮様方も良之助様は御直ニ御沙汰も有之候得共何分右之兩藩同様ニハ難差出先ツ宗村左七郎列追々罷出候様被仰付置候處段々御機密筋も窺取何歟ニ一方御便利ニ相成申候然ニ觀修寺宮様今度御還俗ニ而朝議御加ニ相成此御方ニも御人少ニ而前條同様御頼談有之候得共御相對ニテハ何分難被差出旨御斷ニ相成候處公邊之方も夫々御窺取相濟又々御相談ニ付無致方は又赤尾加兵衛列被差出之儀他筆御用狀之通ニ御坐候御二方様御引拂ニ相成候ハ、當表之事情一切相分申聞敷左候而ハ何歟之御處置筋ニ茂甚以差障可申處御番所は始末致伺公候得之屹度御爲ニ相成可申且又沼田勘解由出立之節探索家七八人急ニ出京之儀申含置候間究而不日ニ之着可仕已後猶更要用ニ有之其上是迄詰込之而々之願日交代被仰付候様有之度内輪ニ之種々之譯合も有之候間吳ノ御急持之程希申候以上

有吉市左衛門  
有吉將監

三月四日

御家老宛殿  
御中老

元治元年



三月四日幕府汽船順動丸を本藩に譲受けの議あり

〔機密間日記〕

元治元年  
公義御船蒸氣船順道丸之儀當時兵庫湊に被繫置候由右御船之儀此方様御頭ニ相成候得之年賦上納を以御拜領出來可申御模様之由太田黒權作より内意相達奥ニ而被申談此御要用之御船ニ付御頭ニ可相成方ニ相決申候尤乗方等功熟之人弊無之候而之差寄運用出來兼候付先右御船乘人共御拜借御願ニ而御國に乘廻乘方積古等いたし候ハ、速ニ習熟之者茂出來且御船之善惡其外一弊之模様其筋之御役々見分を改いし候上ニ而御治定之方可然と話合ニ相成委曲之儀ハ備前殿より直ニ權作に含ニ相成居候間御聞取可被下候尤内輪之儀ニ權作より直ニ御役方に懸合取扱申等ニ候得共表分之處御家老衆以下其筋御役々之手を經不申而ハ難叶事ニ付右之攝將監殿市左衛門殿に被仰達可然御周旋可被下候以上

三月四日

京兆詰御奉行也

御奉行中

片山 多門殿

右田 才助殿

付札 道家角左衛門殿

御書而三通致承知此節良之助様御歸國之節順動其外黒龍丸觀光丸都合三艘御拜借し而御乗船之管ニ御座候尤佐賀關御着岸之上順動之公義御船方乗組之儘高橋川口沖手迄乘廻之管ニ御座候間左様御承知候様尤右付而御買備ニ可相成品々等別紙を以得御意候事ニ御座候以上

四月六日

右付札上ニ願付札

本文之通候處御模様相替順動丸朝陽丸貳艘御拜借相濟候事

三月四日我藩人長野濱平津留次郎左衛門久留米福岡佐賀柳川四藩の國情軍備等の視察として出發し次て其見聞記を提出す

〔尊攘録探索書〕

元治元年  
申上覺

當今不穩世上ニ付而御隣國並長州之國情其外軍備等之儀外聞被仰付奉得其意候當月四日カ出立仕久留米筑前佐賀柳川之四藩打廻見分仕候處いつまの藩中茂當時旅人入込嚴敷御取締ニ相成居家中應對殊之外六ヶ敷右之思ハ敷見聞出來兼候得共聞取候趣左ニ一書を以申上候

久留米藩

一當藩之儀之水戸學信仰之國ニ而勤王攘夷之説を唱候者多ク御座候得共執政御家老有馬監物方以前河内方事兼而公武御合弊を被相詰候ニ付一家中茂此人ニ依頼仕居候由之處昨年之砌眞木和泉列被召捕候節長州御家老國司信濃方を始多人數押懸及論破候ニ付而之其説ニ應候人多有之監物方ニ茂壹人之識見相立兼不得止長州荷擔ニ相成居候得共昨年八月長州人京都引拂後之前説ニ立戻ニ相成當時之公義之御主意ニ被從候様子ニ相見申候然處上ニ一定徹底之論相立居不申候間下之論説區々ニ御座候事

一軍備之儀之段々手當御座候様子ニ而城下カ一里外遺水村と申所ニ而去年來大炮鑄造取起ニ相成炮術之師役ニ而淡合次郎左衛門と申人專其事ニ任用仕居候由之處同人儀頃日相果候ニ付其後高弟之内三人ニ其跡役申付ニ相成居簡も追々ニ出來いたし居候由ニ御座候事

一大里に臺場御築立ニ相成暫之御番頭衆一手被差越置候由ニ候得共當時之在中之浪士輩大數三百人程右次郎左衛門高弟

元治元年

六〇九



之内方御番頭代ニ而引連出張ニ相成居候由尤此手之論ニ之異人若長州に仕懸候様之儀茂有之候ハ、看々其儘ニ之難關發炮可仕との論説有之候由ニ御座候事

一ゲペール千挺程茶交易を以西洋人方御取入ニ相成其外武器類段々御取締等ニ相成居候由承申候事

一蒸氣船壹艘薩州方代金四萬五千兩ニ而御買入ニ相成乗り方指南として同國方六七人御雇ニ相成近來之鶴崎之様乗廻シ

ニ相成居候由承申候事

一石炭並銅等茂堀方有之居候由承申候事

一眞木和泉徒黨之輩士分上り屋入池尾茂右衛門 門木村三郎外ニ輕輩十人計亡名仕居候者水野丹後番頭眞木和泉淵上幾太郎此者ハ水田邊之者ニ而

和泉門人之由頃日京師水野丹後吉田式衛門木村三郎馬淵實寺社方受持此人ハ先年村上守太郎右兩人之當職ニ有之候人ニ而和泉一列ニ之難

申候得共勤王攘夷之説を唱候人々之由承申候事

筑前藩

一當國之儀一統勤王攘夷之論ニ而去秋世子御上京之砌御家老黒田山城方ニ茂御供被仰付候ニ付而之勤王之輩山城方宅ニ

罷出此節上京之御供被致若相違之取計於有之者其元御首を拜領可仕段申向候由之處山城方返答ニ之拙者首一ツニ而相

濟候儀ニ候ハ、易キ事ニ候得共此節之儀之所分余程六ヶ敷深案勞仕居候事ニ而第一公武御合躰之根本相立不申候而之

攘夷も出来不申候儀ニ付此儀者上ニ茂御周旋被遊候御主意ニ有之候段重疊説論ニ相成候處何をも服從仕候而引取申候

由其後君侯方一統に尙其趣意御觸達ニ相成大躰折合之付候由ニ御座候得共于今攘夷論之一統人氣と相見申候事

一政事之權黒田山城濱兵太夫寺社町奉行其外 十數計兼帯之由牧市内始は小臣ニ而黒田山城手附役相勤當時は 三人之手ニ有之右三人之人物各

異ふる所も可有御座候得共要して申候得者才智有て事ニ然候躰之人ニして其眞意之調和之意思ニ可有御座依之外之隣

國之説ニ同意いたし内之國論ニ不相戻公武御合躰之儀ニ而一先折合を付被申候様子ニ見受申候事

一軍備之儀之福岡城内ニ二ヶ所臺場御築立ニ相成大略成就仕居候軍役人數茂御國高丈ニ滿不申候由ニ而足輕等御召抱ニ

可相成筈之處牧市内取計ニ而無縁之旅人爲渡世借宅等仕居候者共六百人計調出此者共ニ登人ニ付一年ニ米貳俵宛積古

料として遣置操打操練等積古致せ御入用之節之一白米三升宛被下候筈ニ相究假ニ足輕之代ニ當テ置被申候由山伏社家

之類も月ニ六度宛積古ニ罷出自然之節者御人數ニ被召加候筈ニ御座候由尤此方ニ之積古料茂無之候ニ付寺社方に御扶

助願出候由ニ御座候其外文武之御倡茂有之子弟之内七拾五人文武ニ才あるものを御撰出ニ相成積古料として年々白銀

貳枚宛被下置格別心懸出精仕候様ニ被仰付不出精之者と被下置候品御取上被仰付候との事ニ御座候由家中一統組々之

調練も追々有之候様子ニ而箱崎之松原ニ而二ヶ所訓練仕居候を見受申候右之通ニ而上ソ向一通之壯なる様ニ相見候得

共臺場等も手薄相見其外之諸事茂當前之手數ニ落一心決定之覺悟とハ相見不申畢竟執政調和之内心御座候處方一新興

起之勢ニ到兼候儀とも、而之有御座間敷哉と推察仕候事

一昨年長州方度々往來茂御座候由ニ承申候ニ付長州合躰之輩も可有之哉と探索仕見申候得共福岡丈之當時左様之者之無

之様子ニ承申候事

一若松詰として御中老吉田某ニ備一手被差添被差出候由之事

一同所組下鐵炮手之者太宰府近邊知音之家ニ參長州武備之壯ふる模様を賞美いたし此節之假令異人何万艘ニ而來候共容

易ニ長州を破候儀之出来不申候と話いたし候由若松と長州之向合ニ而里敷茂不遠且攘夷之論茂同説ニ御座候得之万一

之聲氣相通候儀茂難計奉存候事

一長州人方公義ニ對候話竊ニ聞取申候儀御座候處文意ニ難顯御座候間直ニ可奉言上候事

一博多ニ滞留之中ニ長州人と相見異躰之衣服ニ而旅宿之前を通行いたし候ニ付人を以様子を見繕せ候處宿を相斷候家多

有之漸中島之甘木屋と申宿屋に止宿仕候ニ付若之福岡人往來仕候儀も可有之歟と心付居候得共其儀ハ無之翌朝ハ早々

出立長州に歸申候由宿處之仕拂等之隨分宜敷いたし候様子ニ而存外能キ客人ニ而有之候段申候由右之人をふつけ候習

術歟と推考仕候事



一長州之儀當時迄ニ金錢を用候儀莫太ニ可有之第一近年京師之往來を始築城臺場大炮等之軍備其外人をふつけ候ニ之貢を寛メ農民ニ日々積古料を與へ浮浪人を養候ニ至迄金錢を費候事而已ニ而最早虚亡ニ至可申候處此節筑前ニ而之評判承候得之長州大富國ニ而金錢之幾万と云敷を知ス中々三年や五年ニ而盡候事ニ而之無之由相咄申候右之通風説致せ候之大坂町人等をふつけ金錢を取出候習術共ニ而之有御座間敷哉と奉存候事

佐賀

一此藩之儀之新ニ事立候儀茂相見不申節儉一條之先年以來不相變取締居武器類も多年之製造ニ而大方相調軍政之舉國西洋銃隊一定仕弓等之一切廢捨仕候由先之此節見聞中之第一等ニ可有御座候然共國論之歸着一國而已を治候氣習ニして爲天下ニ盡力仕候意思之相見不申候去とて内輪隠伏仕居候事柄有之様子共相見不申先年來不相易國勢と見受申候事

一開鎖之一條之偏ニ主張仕候儀之無御座候得共開鎖之意思ニ相見申候事

一昨年來老公御上京可有之管之處御病氣にて御延引ニ相成居最早大方御全快ニ相成候ニ付不遠御上京可被爲在山ニ御座候事

一蒸氣船製作所大造之仕懸ニ相見候得共手寄無之内之様子見聞不仕候事

柳川藩

一當藩之儀御政事御委任之家老立花壹岐方昨年辭職退隠いたし右一派之面々或之辭職又之御免ニ相成其後君公御上京ニ相成申候跡ハ漸々因循ニ成行居申候然處京都ニ而之家老十時攝津方列藩ニ申談候而君公を補助いたし公武之間御周旋有之御都合宜敷御氣先茂被爲進候由御座候得共御下即下未々相變候儀等相見不申候事

一武器類之儀聊宛之出來いたし居候得共以前より之御不如意ニ而思ハ敷ハ被行兼候様子ニ御座候事

右之通ニ付此段速名書付を以申上候以上

文久四年三月

長野 野 濬 平

中村 庄右衛門 殿

津留 次郎 左衛門

高 橋 二 助 殿

三月四日小倉藩使者を熊本に遣して征長準備の幕命ありしことを報し且つこれにつきて我藩の意向を問ふ

〔小笠原備前日録〕

三月五日陰

昨鳥小倉使來、依幕府内命也、

〔機密間日記、尊攘錄御建白御國議〕

文久四年

小笠原大膳大夫様  
御使者御用人 役

知行高五百石

秋 山 彦 左 衛 門

上下四人

御内用筋ニ而御使者被差立差急罷出候御秘密御政事御掛り御役中様は御面會仕度事

一御客屋出方之節麻上下着之由

一御者柄牽馬茂無之由

元 治 元 年

岸 本 半 七

六一三



越中守様

大膳大夫様

春暖相催候處愈御安泰被成御座珍重思召候此度御使者差立候付委細口上申含置候間御承知可被下候

小笠原大膳大夫

(朱書) 豊前小倉十五万石

小笠原大膳大夫

此度松平大膳大夫父子御糾問之筋有之萬一承腹不致節者御征伐可被遊 思召ニ付其節之討手被 仰付候間用意可致旨 御内意被 仰出候事

(朱書) 紀州和歌山五十五万五千石

御名代 紀 伊 中 納 言 殿

(朱書) 奥州會津二十八万石 内五百石 八新知

副將 松 平 肥 後 守

差添 有 馬 遠 江 守

右之通被 仰出候間諸事受差圖盡力可被致候事

(朱書)

阿州 二十五万七千九百石 余

三因 十二万五千石 取

雲州 八万六千石 江

十州 七万八千石 見

七州 七万八千石 鳥

松 平 阿 波 守

松 平 相 模 守

松 平 出 羽 守

松 平 修 理 大 夫 付 札

細 川 越 中 守

松平修理大夫様御名之下ニ付札也

△人數計差出候事

藝州	四十二万六千石 余	松 平 安 藝 守
備前	三十一万五千二百石	松 平 備 前 守
備後	十一万五千二百石	阿 部 備 前 守
十州	七万八千石 余	脇 坂 淡 路 守
播磨	五万八千九百石 余	

右之者共に相違候間諸事可被談候事

一御名代様御三方様御下向御頃合之事 付札

御比合之儀者未々何共相分不申候事

一御内沙汰之御方不殘上方御下向九州ハ九州路御固ニ而御座候哉御模様相伺度事 付札

上方筋之御方々ハ中國御押下リニ可相成九州之御方々ハ九州御固ニ而模様ニ應し御取懸り之御都合ニも可相成哉と

見込申候得共何程ニ可有之哉是等之儀者御伺之管ニ相成居申候

一自然上方一方御征伐之儀共ニ御座候ハ、上方下方ニ兩手ニ相成候様御建白被下度事 付札

前文之通ニ付迎も兩手トハ相成可申九州之御方々も一手ト相成候儀者迎も相成中間敷至極御同意ニ候得共前文同斷

一御三方様之内御陣代として九州御渡相成御見札ニ相成候様相成度事 付札

如御本文御一方様なりと九州路ニ御越被成候様有之度候得共御模様何程ニ可有之哉伺不申而ハ難分筋々より御願ニ

も相成可申哉見込候事

一蒸氣船三四艘程御用意ニ相廻り居候様被成下度御願立被下度事 付札

此許様よりも御申立ニ相成可申候間御許様も御申立ニ相成候様

一此度長崎に御下向之御目付能勢金之助様急御用之趣ニ而佐賀關方御上陸ニ相成候右御用方之次第御承知共ニ而ハ無之

元 治 元 年



哉之事

先日御返答申達候通ニ御座候

一筑前侯中津侯此度之御人數之内ニ御加り無之儀者何分候哉御趣意合御聞込ニ而者無之哉之事

付札 此御模様者一切相分不申候

一此度之御内意被爲蒙 仰候御請之御次第相何度并御差向ニ相成候御人數何程ニ御座候哉之事

付札 但蒸氣船御差廻被下候ハ、別而御辨利ニ相成可申候事

御請者不聞御使者被差立被仰達置候人數之儀其模様ニもより可申候得之あらかしえ何程ハ難申述候

但書之儀ハ前條之稜ニ有之通ニ候事

一此度之儀薩州ニ御乞合ニ相成候哉之事

付札 但薩州ニ御乞合濟御返答之趣御内々御知被下度事

薩州ニ問合候儀未タ無御座追而御使者被差立候節ニも至候ハ、御通路および可申候

一兵糧米者御兩家共ニ此方ニ而用意致し置候心得ニ候事

但鹽新とも本文同様之事

付札 其御許ニ御人數被差出場ニ至候ハ、諸事願御配意可申候尤御人數之儀前廣ニ御知せ仕置候様可仕候

長州之儀是迄 朝命を奉し候而之事ニ相聞候得之此節之御糺同 公義御引受ニ而ハ承伏之程何程ニ可有御座哉長州侯

御父子之内又ハ大臣ニ而も大坂邊迄 御召寄 勅使を以御一和 御委任之旨御示向後 台命を奉候様との趣を以御處

置筋被爲在度其上ニ而御違背ニ至候ハ、被成方も有之間敷との趣ニ候事

三月七日鐔田軍之助ハ小倉御使者ニ於御客屋應對右御使者ハ稜書を以至密問合ニ付軍之助ハ返答之振を以付札之儘

及返却御建白之御趣意も一ト通及演舌候而是非書取致所望候ハ、別紙相渡答ニ咄合候事

小倉御使者初發應對ハ三月四日也

小倉御使者ヨリ至密稜書を以問合候付別紙付紙用置候通申談候間被奉伺 尊慮不被爲在 思召候ハ、明日御奉行方返

答ニ及せ可申候條御様子之明朝迄可被相達以上

三月六日

平野九郎右衛門

御用人衆中

三月五日松平春嶽書を長岡護美に贈り其歸國願の件につき一橋邸に到り會談せむとの意を通す

〔子爵長岡家文書〕

昨日者於

宮中得而暗大慶奉存候爾來愈御清安珍重候陳者昨夕者御同事ニ疲勞を極メ申候且又今日も一橋公者御朝參無之趣ニ御座候從只今小生總裁老中橋ニ罷越相談之心得ニ御座候右故昨日御内話有之候兩公子御暇願之儀ハ今日橋へ罷越相談候事ハ老中始一列滿座故難申出候間何卒今夕も是下橋へ御光來マて御密談いたし度候尤仁右衛者明朝召呼候様申置候申聞候此段申上度如斯ニ御座候頓首

三月五日

大藏大輔

書於二條城政府

良之助様

三月五日岡藩の使者熊本に来る

〔御在國日記〕

文久四年

三月六日

元治元年



一御客屋方御奉行方左之通

中川修理大夫様方之御使者仲島瀧右衛門柳井新次郎と申仁昨夜參着申出之趣有之明夕於井上加左衛門宅致應對管候此段爲御承知申達候以上

三月六日

御用人 衆 中

猶々瀧右衛門儀御側物頭知行高三百石新次郎儀江戸御留守居格取扱役知行高貳百石上下都合十四人之由候以上右之趣御序之節御取次を以達 尊聽候事

三月六日仙臺藩は板倉閣老の交附したる横濱鎖港に關する勅書及び將軍の奉答書を廻達す

〔江戸返達御用狀扣、文久四年日記〕

(三月六日松平陸奥守より廻し來る)

別紙書付同席中在國在邑共通達可被致候事

右一通

横濱鎖港之儀ニ付 御所より被 仰出候御書付寫並御請被仰上候御書付寫爲心得拜見可致旨被仰出候依之相達候事

三月

右一通

勅書寫二通

横濱鎖港之儀精々可遂成功且亦諸國兵備充實致洋夷之輕侮絶候と之趣達 御聞候處此上者惣國之守禦緊要之事ニ候差當攝海之要港急務上は神速其功蹟相顯人心安堵不經數年征夷之實相行奉安 御慮候様御沙汰候事

二月

右一通

去十四日 勅答書之旨趣横濱鎖港之一條御請振不分明ニ付一橋中納言御訊問處、尤鎖港之成功者是非共可奏條更以書取言上之旨被 聞食候猶又以別紙被 仰出候通盡力勉勵可有之 御沙汰候事

右二通一包

御請書

去ル十四日差上候 勅答書之内横濱鎖港之一條御請振不分明被思食候由慶喜の内々 御沙汰之趣承知仕候然處愈鎖港仕候見込ニ而已ニ外國に使節差立候儀ニ御座候間是非共成功仕候心得ニ御座候尤再度蒙 聖諭候無謀之攘夷仕間敷等之趣奉長候就而は愈以沿海之武備充實致し候様可仕奉存候依之此段申上候以上

臣 家 茂

右一通一包

三月六日長岡護久同護美幕府の諮問に答へ自今一層朝廷を尊崇し天下の人心を一にし専ら武備を整へ防禦を嚴にし以て攘夷の實効を奏すべき事を建白す

〔叢書類至密稜書〕

三月六日

朝廷御尊崇之儀御存付之趣も有之候ハ、言上被成候様被仰出置候ニ付今日中山左次右衛門を以御建白御差上ニ相成候事

〔尊攘録御建白御國議、機密間日記、文久四年日記、公武江御建白〕

元 治 元 年

六一九



今度御上洛之上一ニ條者御評議相決候様御座候得共向後之御遊奉筋且諸御運等之儀付而存付候儀茂有之候ハ、聊無遠慮申上候様御沙汰之趣奉得其意候先日御頂戴ニ相成候。宸翰並御請書を茂至密拜見仕候得は既ニ御一和之御基本相立私共初發より盡力之筋茂相連誠以難有仕合ニ奉存候乍然。朝廷よりは關東御依頼關東は彌以。微慮を被奉候御持合之御眞情一日茂早事業之上ニ被施其御實跡相顯不申候而は折角相立候大綱領茂虚器ト相成候而已ならず又々前日之有様ニ立戻り可申其邊之儀は於廟堂重疊御評議を被擬候儀勿論ニ奉存候得共御内意之通ニ付愚考之次第茂左ニ言上仕候。

一此節眞之御一和被爲在攘夷之策略を初御政事向愈以被遊御委任旨被仰出候付而は向後將軍家之命令。則朝廷之御趣意と相心得屹度致遊奉候様との儀は今般御取堅之大根軸ニ付早々天下に御布告有之末々迄茂安心仕候様有御座度候處此儀者公邊より御觸達ニ可相成筋とも不奉窺候間。勅諭を以御沙汰之儀一刻茂御願上被爲在度左候得は後來之御抑揚ニ茂大ニ御都合可宜奉存候。

一朝廷御尊崇之儀者東照宮御以來無殘處御舊典茂可有御座候得共、御所致關係候儀は一言半句之端ニ茂御敬禮之御趣意一際相顯候様被爲在度奉存候。

但 朝廷より御沙汰之内若哉時所位ニ相當不仕儀茂御座候節は乍恐條理明白之筋を以御斷被仰上公平至當之筋ニ落合候様被爲在度是則御尊崇之御趣意と奉存候。

一官武之御間一旦御間隔之姿ニ相成候には種々之御評筋茂可有御座候得共攘夷之一條逆茂御根本ト奉存候間武技訓練軍備充實炮臺經營海軍取興等之儀於公邊は段々御手賦茂被爲在候御模様ニ候得共猶此上非常之御差入有之實地之御運を以列藩を御誘ニ相成貴賤上下之無差別攘夷之。微慮を神州の國是と相心得不年ニ外夷を致壓倒候程之勢ニ相成候様可致勉勵旨諸侯伯に屹度被仰渡奉存候。

一攝海防禦筋之儀付而者次第ニ臺場等御取建之御模様ニ承知仕尤可然御儀と奉存候第一大阪御城之儀只今迄之振合ニ而

は決而相成申間敷屹度御守衛を被増置度奉存候。

一三都を初諸要津等に洋夷襲來之儀茂御座候節遠國より東西に致奔走候とも間ニ合兼可申候間何方は何方々々より致應援候様御處置被成置其外を自國々々を守御靜仕。候様被仰付度奉存候。

一此御銘々之國力を養候儀は何方茂心懸候事ニ候得共如近年東西致奔走候而は何分心底ニ任せ不申間夫等之境は何卒公邊ニ而屹度御斟酌有之京都御警衛之儀茂是迄無際限被仰付置候向は以來無片落交番ニ而相勤候様被仰付度奉存候。

一近來處士横議之類茂不少候處萬一夫等之事ニ被激一事ニ而茂御急時を專務ニ被爲成候御氣味有之御失計茂御座候而は却而御成功之後れニ相成可申間何卒審詳ニ衆議を被盡度一事宜を得候へは一事丈々人心相治り候道理ニ而人心紛亂ニ及候譯茂右ニ反し候迄之儀と奉存候。

右之稜々は外藩より窺知候事ニ無之其上普通之見込ニ而御採用ニ可相成筋ニ茂有御座間敷候得共折角之御尋ニ付無伏藏申上試候以上。

三月

長岡澄之助  
長岡良之助

三月七日將軍家茂參内して叙任之恩遇を拜謝す

〔家茂公二度日御上洛一途〕

三月七日

一公方様御推任叙之爲御禮今朝五時之御供揃ニ而施藥院に被爲成己之刻御參内夕七半時過還御相濟申候事  
但二條御城より御式列被爲立候付御在京之御大名様方御衣冠御帶御乘馬より供奉有之候也

三月八日長岡護美中川宮に參候す一橋慶喜松平春嶽亦到る共に慶喜に對して幕政挽回に奮勵す

元治元年

六二二



べきを勤告す

〔續再夢紀事〕

八日四ツ時出邸登營の上一橋殿の許に到らせられ夫より御同道にて更に尹宮の御許に参候せらる歸邸ハ暮時ホリ此日長岡良之助殿ニも参候せられしか官一橋殿へ幕府の政體を一振する事に奮發勉勵有る様にと懇々御説諭あり公(春)及(巖)ひ良之助殿にも其御旨趣を賛し共に一橋殿に勤告せられしとそ 樞密備忘

三月八日日本藩脱走高木元右衛門小坂小次郎川上彦齋宮部春藏等土方楠左衛門等と事を論して合はず尋て三條實美等眞木水野土方等の諸士と其處置を議す

〔三條實美公年譜〕

明朝(三月八日)岸上弘高木元右衛門小坂小次郎川上彦齋宮部春藏ノ五人來り土方楠左衛門等ト事ヲ論ス合ハス公等之を諭解ス五人服セス請テ招賢閣ヲ去ラントス公等之ヲ山口政事堂ニ報ス十一日ニ至り公諸卿及ヒ眞木水野土方諸士ト其處置ヲ議ス

三月九日日本藩政府は砲器製造入費支辨の爲めに國中に寸志金を募る

〔元治元年 砲器寸志一件〕

御手當方あらへ

今度砲器製造付而大造之御出方筋一付寸志差上度願出候而々之願之通被召上御賞美之儀之民力強之規矩を以士席以上席引繼ニ被立下士席浪人格迄之進席寸志之御手傳之規矩を以被召上管候尤五月中願書差出候分まで被召上右月限を越候へハ一切不被召上上納之儀之當冬限被仰付旨候條御心得御支配町中不洩様可有御達候以上

三月九日

町方 御 奉行 中

岩崎物部殿

須佐美九郎兵衛殿

志方逸次殿

(右の意味を以て全藩各地に達せらる)

〔全書〕

民力強寸志規矩

一御奉行觸御知行取之席并御留守居御番方之席引繼

貳拾貫目以上

一組附御中小姓列御奉行觸御中小姓之席御留守居御中小姓之席

拾五貫目以上

一御留守居御知行取并御留守居御知行取之席御留守居御中小姓同列

拾三貫目以上

右者此節砲器寸志御倡ニ付右之規矩ニ而御賞美可被仰付哉

文久四年也

三月 右之通ニ而可然段機密間根取當分池松十内方返答有之事

三月十一日藩主慶順義に三條實美の山田十郎藏木武兵衛に託する所の書を開封す

〔元治三年元治元年 自筆狀控〕

元治元年



以別紙申達候山田十郎轟木武兵衛於久留米被召捕候節太守様内膳殿に三條様名元之書狀ニ通致所持居候處咄合之趣茂有之被遊御開封候儀及遲々候處此節相決御開封被遊内膳殿へも開封被致被差出候右兩人被召捕候節ハ久留米御人數大勢致出役右書狀所持いたし居候儀ハ致承知居候所より洩候而之事と相聞御元より問合候向も御座候由依之御含も可相成差進申候右之爲差御文意も無之御届等ニ之被及間敷と相考候得共若之公邊も右之儀相響居候而被差出方可宜候ハ、御届も相成可申哉御二方様へも御伺何レ共宜御取計候様存候右之奉窺御内聽申達候事ニ御座候以上

御國

連名

三月十一日

有吉將監宛  
有吉市左衛門

被仰越通致承知御本文御届之儀爲差御文意も無之候付御手数ニ之及中間敷と安許ニ而茂咄合御二方様ニ茂思召不被爲在候間左様御承知候様則別番之返進いたし候以上

四月七日

上ノ付札之通ニ候處久留米に之寫ニ而見せ置候方と咄合候付引殘置其後御留守居を以彼方類役迄寫見せ候處委細承知被爲入御念段六月中旬彼方より返答申來候處期過表向御用狀ニ而茂難申向候間佐二役より其段委ク申向下廻ニ而遣候事

六月廿一日之早打ニ遣候事

〔全書〕

拙贖呈上仕候寒冷之節御揃被爲成益御安康恐賀之至存候然之密々申述候小子去八月十八日之變倉卒之際京師脱却長州に下向仕候後追々京都御模様様拜承仕日夜苦慮罷在候小生愈暴之學動過激之事共奉對天朝 微慮之程茂如何可被爲有哉深恐縮痛心仕候先般官位をも被停止何共奉恐入候此上之謹奉待罪于長國候心底ニ有之候小生不束之事共より嫌疑ニ相觸申候儀全所自取ニ有之候得共甚以歎息悲泣罷在候區々赤心偏

天日之照覽不堪仰願候此節澄之助殿良之助殿御上京之由ニ承候追々御周旋茂可被爲在存候御序も御座候ハ、小生内情御含置被下以便宜御取成被下候ハ、忝次第ニ存候御懇意之義腹心相披申入候萬々御照察可被下候先之時候御見舞申上度旁捧寸最候猶期後信之時候也頓首謹言

十月廿七日

三條實美

細川越中守殿

玉机下

二仲時下折角御自愛專一存候乍末毫御總容様時候御見舞申上候宜御傳聲可給亂書海潮可被下候御一閱之後御投火希

上候以上

例上八書

細川越中守殿 三條實美

乞密展

〔全書〕

寒冷之節益勇健珍重存候先般上京中懇情之次第忝存候八月御大變之節嘸々配慮之義と相察申候小生長州に罷下追々京師御模様拜承仕日夜心痛罷在候其藩轟武兵衛山田十郎當地に被差下段々懇切之義喜悅之至謝申候先之一筆内密申遣度如此候也不帶

十月廿七日

實美

長岡内膳殿

二白時下折角自愛可有之存候亂筆推讀頼入存候也

〔鎌田文書〕

元治元年

六二五



(本文書ノ上書)

子三月十一日被遊御開封候事

三月十一日我藩財を大坂に借るの議あり

〔小笠原備前日録〕

三月十一日晴

沼川敬内來與一昨年所書已建言○朝○歸家之后、依招榎田惣右衛門來、則話借財於大阪商之事、與酒食、○今日議軍備之事、

三月十一日日本藩人竹崎律次郎長防探索書を郡代中村庄右衛門に送附す此頃藩人増見三八小糸運助等亦長防探索書を提出す

〔尊攘錄探索書〕

元治元年甲子年  
長防等之探索書 子三月増見三八小糸運助差出書付一通並同  
月中村庄右衛門へ竹崎律次郎へ送越候書付

覺

一長州動靜之儀當時長州侯周防山口御屋形に御住居ニ相成三條様四條様同所に御滯座錦小路様舟木に御滯座九條様八石州堺ニ而家老増田彈正領地に御滯座萩へ之穴戸備前居城いたし居候由

一山口ハ當時御普請最中ニ而宮市口小郡口兩所に關門を張臺場を築有之候由

一檜ノ浦前田其外島々臺場多人數詰方いたし何方茂日々程砲發いたし折々ニハ眞玉も打方仕候儀ニ御座候

一田ノ浦ハ去年長州方築立候臺場有之候得共當時人ハ居不申候

一門司之臺場等も無之何そ相變儀無御座候

一大里ハ久留米侯御陣屋多人數相詰臺場嚴重ニ構有之候

一英彦山之儀于今何ととも相形付不申當時山伏拾壹人平人共ニ都合拾六人入牢いたし居候へ共當時之僉儀茂取止ニ相成居候由同山之座主ハ小倉船頭町ニ而向助左衛門と申者預り居日々警衛拾人計相詰居候由ニ御座候

一薩州人小倉路通行差而相變儀無御座候得共先月ハ至而少ク稀ニ通行いたし候儀ニ御座候

右之通ニ而長州之動靜之至而不穩唱ニ而專ラ籠城之覺悟之様ニ一統取沙汰仕候儀ニ御座候

右之通見聞仕候次第御達仕候以上

三月

増見三八  
小糸運助

乍恐小倉方申上候私儀去ル八日此元へ着仕候柳米之二藩近境之光景之承知仕居不申而ハ向キ々々囁之特物無御座候付荒々聞合せ申候付途中も一日ハ隙取爲申事ニ御座候甚右衛門儀ハ此元へ一夜留置向方之模様等承り合せ翌九日渡海致せ同日清末迄罷越爲申由ニ而馬牽を差返し申候付未格別之異聞も無御座候得共聞取候丈左ニ申上候

一甚右衛門列内里方下關に渡海仕候處馬を牽居候付何そ吟味仕候儀も無之下關方長府へ之往來筋臺場を構其所ハ通し不申新ニ脇道を拵登里程も廻り候山旅人ハ惣而其方を通し申候由ニ御座候

一下關方清末迄三里半之間數ヶ所砲聲并劍槍之稽古いたし居新ニ取立候稽古場之様子ニ而定而農兵之稽古場と相見申候

一甚右衛門清末ニ而山口之者ニ出會いたし候處其者之嘶ニ山口ニハ旅人ハ一切入レ不申との事ニ御座候得共いゝ様とそ

いたし是非入込可申候間暫隙取候とも氣遣仕間敷段申越候清末入口ニ而も改等之手數爲仕事も無之由ニ御座候右稜々

ハ甚右衛門馬牽方申出候趣ニ而御座候事

一當所之儀其後愈以武備嚴重ニ相成全力を武備ニ打込候様ニ相見申候付能も鳩之續々候事と疑問仕候處市在獻寶いたし

元治元年

六二七



候儀ハ甚敷申上候通ニ而外ニ先年十萬兩程貨殖ニ御振出ニ相成當時莫太ニ相成居候を去年來盡皆御取立ニ相成候山右ニ付而ハ町家杯ハ甚及難澁爲申者も爲有之様子ニ御座候且又寺社之鐘盡皆差出し大砲御鑄造ニ相成御城之鐘も太鼓ニ替り爲申との事ニ御座候

一長州表之儀御城使御下向之筈と申儀ハ此元ニ而も專風説御座候得共未重立候御方御下向爲有之儀ハ無之様子ニ御座候去ル五日ニ毛利出雲と申御家老上下三百人程ニ而山口を出在仕候由ニ候へ共何方ニ罷越候と申儀ハ分り兼申候定而京攝之地へ御呼出し歎と被考申候

一長州より長崎へハ頻々往來仕間ニハ相應之身分之者も有之由定而外國へ手を附候爲ニ而可有之との此元之見込ニて御座候

一岩國ハ勿論三御末家も殊之外困窮ニ而浮浪之者も大勢入込居候中餘程脱走爲仕者も有之様子ニ御座候

一彦山之御不審今以晴不申座主も今ニ滞留之由ニ御座候四五人ハ牢舎いたし居候由長州方將軍様之木像を差越調伏を頼候との儀ハ白狀いたし居候との事ニ御座候其外英彦山へ十萬石を附候杯と申儀も申越候由ニ御座候座主へ係り候儀ハ無之様子ニ而惡僧共畢竟金ニ迷イ爲申事と申事ニ御座候木像を送り候杯之事ハ中津方取次候由ニ而中津ハ長州同腹と申風説も承り申候まゝし是ハ道路之風説ニ御座候

一隆州よりハ大探索去ル七日ニ入込爲申由ニ而矢張村上方ニ滞留仕居申候已前ハ三島奉行を相勤當時ハ御裁許懸園田彦左衛門と申人ニ而兼而通行いたし候節ハ十人下ニ付札本行園田當所之御拂米三萬依程有之候を買取申候由村上新藏方餘も召連候處此節ハ四五人召連其中登人ハ直 承り申候

ニ渡海致させ登人ハ昨日渡海仕候兩人共ニ防長之地案内之者ニ御座候右園田ニハ追々面會仕候處彼方手配筋目聞取候事杯不包咄仕候此時節之事ニ付五ノ聞取候事ハ咄合可申とて私部屋へも度々参り候勿論探索ニ罷越事落着ニ及候迄ハ滞留可仕段申聞候御國方ハ此前盜賊方之役人兩人探索ニ参り候とて私も暫時面會仕一昨九日引取申候外ニ御手之付

居候哉ハ不奉存候得共園田ハ前文中上候身分ニ而私式ニ而日々出會仕候ニ些不釣合ニ而御座候同國よりハ唐物締り方役人一年交代ニて下關は詰切近來ハ當所海岸之様ニ引移舟ニ而所々打廻り明日ハ右之役人も此元へ参り候筈ニ付海岸之事杯ハ委敷開合遺候様園田方噂仕候

一當所方ハ下關ニハ容易ニ渡海不仕適小商人杯罷越候而も惣而日歸り仕由ニ御座候  
右之段迄先荒々申上候以上  
三月十一日夜 竹崎律次郎  
庄右衛門様 御取次衆中

三月十三日僧介石伊達宗城に調して興正寺門跡をして長州説得使たらしめられたき旨を進言す  
〔鶴鳴餘韻〕

宗城公は曩に參與の辭表を出されしが三月十三日に至つて願意の如く威を免せられ御用ある節は參内する様との仰せを下されぬ此夕西本願寺の學頭介石と云へる僧來りて長州説得の使者には興正寺門跡を差使はさるゝ方尤も好方便ふらんとて續々其見込みを述べたるが公宗城は其密話に依りて其言ふ所を可とせられ次の日高崎猪太郎を以て尹宮の御意見を質し近衛公にも相談し久光公の同意を得て遂に長岡良之助殿より一橋公に申入れられたり公にも異議ふかりしを以て 勅命といふ事中でよく興正寺門跡一己の好意にて奔走周旋する事となり介石は種々國事に盡力したる功績を以て其隨行人とする事とあれり

公宗城が近衛家に於て尹宮久光公と列座の中に於て一橋公の陰謀自ら京師守備總督となり在京の諸侯を國に就かしめ京以てし進んで天下檢閲の池に乗輿を奉じを摘發せられたる時の事なりき久光公の話に今日山階宮にて興正寺門跡に會ひ天子を挟んで宇内に號令すべき大陰謀



しに長州説得の事に就ては實家應司家にも相談したるに應司にては遠々下向したりとも到底説得の功を奏せざるべければ思ひ止まる方可あらんと勸められ自分も深く懸念する所なれば先づ斷念すべし假令 勅命を以て仰出さるゝとも今は辭退の外ふしと語られたりとも

公は事の意外なるに驚かれて介石より親しく聞く所にては今迄門跡は勇み進んで行かれるもののみ思ひ居たるが如何にも奇怪なりとて翌朝介石を招きて其事を談せられしに介石いはく實は今朝興正寺より招かれて急き趨きたるに所詮自分の力には及ばぬと存すれば長州説得の事は汝よしなにお断り申しくれよと申され自分も今更にあつてと少しく不快に感したれども別に議論はせざりしが思ふに近日長州より手を廻したる結果にはあらぬかと疑ひを抱き歸りたり然し尙考ふる所あれば兩三日待つて貰ひたし門跡にして是非行かれざるとなれば自分一個でもやつて見る積りなり之が爲には一死をも辭せざる決心なれば飽迄も御周旋を願ふとて歸り行けり

其後介石來りて曰はく興正寺門跡の説得を斷念せられしも道理にて長州にては幕府の意志如何に關せず向ふより打つて出つべき形勢にて所詮悔悟所にあらずといへり然し長州と本願寺とは輝元顯如の時代よりの關係にて非常に親密の間柄にて現に昨年も長州の急迫を救はれたしと助力を乞ひたる事すらあり今自分が門跡の直書を携へ目代とありて乗込むとすれば説得の致し方一つにて悔悟せぬとも限るまじ設令悔悟せざるまでも大坂へ出るに大兵を召連れぬ事は成就すべく大阪來着の後本願寺が長州と朝幕との間に立つて出京の周旋をする事とせば或は其功を奏するかも知れずとありき

三月十四日長岡護久同護美は更に前意を再陳して歸藩を申請す

〔機密間日記、京都返達御用狀扣、文久四年日記〕

三月十四日水野和泉守様に被成御差出候事

私共一同御暇之儀奉願候處昨年上京以來彼是致盡力不遂其功事央にして賜御暇候段御殘念ニ付兩人共今暫滯京之儀被

仰下候旨傳奏業より被仰達誠以冥加之至難有仕合奉存候然上者 御沙汰之通相心得可申儀勿論ニ御座候處先日御封書御渡之向々は段々歸國被仰付私共而已相滯殊更子弟之身分如何ニ茂安シ兼且國力難取續段は最前茂申上候通に付可相成筋ニ御座候ハ、何卒兩人一同御暇之儀今一應奉願候重御沙汰之末再應申上候儀者甚以奉恐入候次第ニ御座候得共重疊御憐察茂被成下候重ニ茂可然様御評議之程奉伏願上候以上（本文指令は同月十七日交付せらる）

三月十四日

長岡澄之助  
長岡良之助

三月十六日日本藩警備地數ヶ處に散在して任務盡し難きを以て東山及び桂川等の警衛を解かれん事を幕府に申請す

〔機密間日記、文久四年日記、京都返達御用狀扣〕

三月十六日御用番有馬遠江守様に被差出候事

越中守儀去春より京地御警衛并火之番を茂被仰付置夫々之手當仕同五月よりは寺町御門御固被仰付番衛之人數等差出晝夜守衛仕せ且又同九月より者東山裾まで西加茂川南三條通北二條通同新地迄之固其上桂川表之固を茂被仰付置向々相應之人數等分配不一方心配仕候得共各別之御時節柄ニ付無異議御請申上出精いたし是迄者兎哉角勤續仕候得共右之通數ヶ所ニ相成永く請持候而者何分諸事行届兼深心痛罷在中候依之奉願候儀甚以奉恐入候得共前條東山三條邊并桂川表固者御免被成下候様奉願度奉存候唯今之通處々に分配仕候而者第一非常之節ニ至實備茂難相整御座候間彼是事情を茂御汲取被成下御繰合を以何卒御用捨被仰付被下候様奉願候此段申上候様越中守申付越候以上

細川越中守家來

三月十六日

中山左次右衛門

元治元年

六三一



(四月九日指令)

細川越中守家來に

先達而長岡内膳に被仰付置候久世桂川御固御免被成候

三月十七日朝廷長岡護久同護美の請假再申に對し今暫く滯京すべきを命ぜらる

〔叢書類至密稜書〕

同(三) 十七日

一御二方様御暇願之儀再願之趣尤之事ニ被思召候へとも御殘念之事ニ付兩人共今暫御在京之旨飛鳥井様方御留守居御呼出御書付御渡之事

〔機密間日記、京都返達御用狀扣、文久四年日記〕

右(十四日の願)御再達ニ相成候處左之通三月十七日御沙汰ニ相成候事

長岡澄之助  
同良之助

再應御暇願之趣尤候得共過日茂 御沙汰之通何分ニも御殘念ニ 思召候間加勘辨今暫滯京有之候様 御沙汰候事

三月

三月十八日松平春嶽書を長岡護美に贈り種痘をなさんことを勸告す

〔子爵長岡家文書〕

愈御多祥敬賀陳ハ方今都下市井を始一般痘瘡流行之趣ニ御座候足下未だ痘瘡不被成候由承候彌其通りニ御座候哉若又痘瘡不被成候へハ何卒牛痘御種被成候様仕度壯年ニ至候而天然痘相煩候而之必重く加之生命之程も難計候方今足下爲皇國御盡力不被爲在候而之難相叶至重之御身ニも候故萬一重痘御感し候而之千悔不及處ゆへ今之内御種痘可被成候薩

宇和島に被仰談候而も宜僕醫師差出候而も宜御座候徒新曲突之遠慮敢言威嚴無任皇懼之至候頓首

春晚十八日

春嶽逸人

成山大兄

三月十八日長岡護美答書を松平春嶽に贈り來月歸國すべきの意を告げ種痘の勸告を謝す

〔子爵長岡家文書〕

雪手拜讀爾來御清安珍賀々々春雨未晴愈御勝勉御勤仕御氣割奉察候頃御暇之義ハ愈來月小子發足仕候筈ニ付御降心可被下候陳ハ痘瘡之義被仰越此義御厚情誠難有乍去委細近日中拜話可申上候貴答迄草々不盡

晩春又八

良之助

春嶽賢兄

玉机下

二仲御自玉奉專祈候過日ハ櫻木亭ニ而宇和島賢兄ト和樂且謔無限殊更伊太郎モ參り幸甚々々御逢モ有之ハ、宜敷奉願候

三白雷管ハ近日中被贈下度候宇和島侯へ喬公方進上之十六發炮ハ誠ニ珍物小子モ長面公へ對シ別而喜悅之至不日喫茶高談奉願度候不盡

三月十八日我藩十萬金を借るに決す

〔小笠原備前日録〕

三月十八日 陰

○朝○決借十萬金、○退朝后、溝口藏人及澤村八之進、火器隊長五人來、告炮艦之準備、入夜歸、與酒食、○公入講

元治元年



堂、而后至兩大夫之邸、

三月十八日西國郡代窪田治部右衛門支配地巡視の途次熊本に來り實家江口彌左衛門の家に投す

〔機密間日記〕

〔三月十七日の條〕

日田御代官窪田治部右衛門殿西國御郡代被 仰付御支配所村々爲御見分御越明日熊本御止宿之筈候依之其方共内兩人御旅宿に被差越候條御客屋方御奉行承合相勤候様勤役之人に可有通達候以上

三月十七日 月番也

荒木 慎十郎 殿

奉行 所

〔全書〕

三月十八日

窪田治部右衛門殿唯今於澤屋御手数數向相濟直ニ實家江口彌左衛門方に御引越ニ相成申候依之御馳走役御使番者引拂ニ相成候様達仕候此段相達申候以上

三月十八日

御客屋方

長 監 物 様

御 奉 行 中

三月十九日長岡護久同護美は共に久しく外に在るを許さざる事情あるを以て護美を留めて護久

の歸藩を許されん事を申請す

〔機密間日記、京都返達御用狀扣、文久四年日記〕

三月十九日水野和泉守様に被成御差出飛鳥井様一橋様に寫一通宛被成御差出候事

私共一同御暇之儀乍恐再應奉願候處願之趣尤候得共過日茂御沙汰之通何分ニ茂御殘念ニ 思召候間加勘辨今暫滯京仕候様 御沙汰之旨傳奏衆より御達有之冥加至極難有奉畏候右ニ付猶又申上候者眞以奉恐入候得共兩人ながら永相滯候儀實々當感難澁之次第ニ而委細者追々申上候通御座候間格別之御評議を以て此節澄之助一人御暇被下置候儀は被爲叶間敷哉左候ハ、良之助者今暫滯在仕追而御暇被下置候様被成下度奉存候 御沙汰日間茂無之右様奉敷願候儀重疊恐多奉存候得共何分ニ茂御憐愍被成下右之趣乍此上 朝廷に被仰立被下候様偏ニ奉願上候以上

三月十九日

長岡澄之助  
長岡良之助

〔二月廿二日酒井閣老より指令〕

願之通澄之助者御暇被下良之助者今暫滯京可罷在旨被 仰出候間澄之助儀者傳奏衆に相達候上勝手次第發足仕候様可被致候事

三月十九日仙臺藩留守居は我藩主參府勤番及び京師警衛當番に關する調書を提出すべきの幕命を傳ふ

〔御同席觸寫并大目付様御廻狀寫〕

文久四年慶應二年迄 大御目附神保伯耆守様御用人中より左之通申越候間右寫差廻申候依而去戌年御在府御割合被仰出候節より來ル寅年何年春中と歟御在府と之譯并京都御警衛之儀者初發被 仰付候節より此以後迄之處御一順何月より何月迄御警衛之譯御

元 治 元 年

六三五



下札ニ而被仰聞度候尤被差越候案紙之振合ニ一冊ニ取束差出可申候間右案紙者相廻不申候此段各様迄得御意度廻狀數通相認持廻り申付候以上

三月十九日

松平陸奥守内

兒玉覺之進  
大童信太夫  
黒澤龜之進

御次第不同

松平三河守様

御留守居中様

松平相模守様

御留守居中様

細川越中守様

御留守居中様

松平備前守様

御留守居中様

寫

松平陸奥守様

御留守居中様

神保伯耆守内

篠澤多門  
大石庸介  
高城祥造

以手紙啓上仕候然者其御許様且御同列中様方御在府御割合并京都御警衛御割合共伯耆守承知被致度候間別冊之御振合ニ而御一帳ニ御認早々御取調御差出御座候様被致度此段各様迄自私共宜得御意旨被申付如斯御座候以上  
三月十九日

三月十九日日本藩田中彦右衛門は幕閣の内容及び薩會二藩の事情等に關する探索書を提出す

〔尊攘録探索書〕

承り書係密

是ニ認申候者去ル七日口上ニ而委細申出置候事口上と違ひ書取ニ仕候得者何となく稜立變遷たる事も屹度致候様相成殊ニ此節之談ハ都而氣合ヒ咄ニ而駢トハ難申然ルテ不文を以強而其意味を不洩様認んといたし候得者不知々々僻見も加り可申蛇足煩敷段者可然御取捨可被下候

三月五日友人上ノ山藩金子與三郎右國許より着府其日丁度會津藩友人林三郎参り合せ居私も参り候處林氏内話致候ニ者此度御目付杉浦兵庫頭様京都より早打ニ而着府同藩留守居石澤民衛早速杉浦殿に罷越京都之御模様伺取候由申聞候事 其伺取明者内々として林氏私に計り一寸申聞候則去ル六日差出候承書ニ御置候分ニ而討長之儀ニ付而者於京師得失議論有之内輪も候事 其居候杉浦老方監察も其議ニ預らざる内被仰出有之たる御云云相諒置候一段ニ而御座候事尤其内ニ御承合候上ニ而諒置出可申段候事 右杉浦殿者金子與三郎以前より懇意私も一昨年比より金子杯と追々咄に参り候御方ニ而心易く有之林も同斷ニ付一同参り見可申と此夜申談候事 林申候ニ者右藩留守居杉浦殿に罷出候事且略御模様伺候事等者内々の儀ニ付未タ御明不申儀候事 翌六日之朝金子以書面杉浦殿に御繁劇中ニも可被爲在候得共某々一同兼々御懇意ニ付不苦候ハ、一寸罷出度奉伺と申遣候處 尤金子より京師之模様伺取候主意ニ而者無之段々與羽邊者之動靜且長州より使者等之模様爲御心得申上置度との儀ニ三明日出立混雜中ニ候得共一寸懸御目可申夕方より待居候と申御返事参り候事依而夕方より右三人ニ而大川端杉浦殿御宅に参り候事

元 治 元 年

六三七



金子段々奥羽邊之動靜等相咄杉浦殿も種々御咄之内御役柄故心易とハ午申輕易ニ者御咄無之候得共口氣ヲ取候而認見候處左之通

二月廿二日京都出立同廿八日江戸へ着明七日三月出立矢張東海道七日計ニ而上京との事

一 京都近日之模様一向江戸表閣老方御初御役々ニ而如何成譯敷相分申間敷京都ニ而も兎ニ角御目付をも被仰付置候もの更ニ豫り知らず被仰出候而より知り候程之事故況ヤ百里外江戸表ニ而者内輪曲節難通と外ニ御用も有之傍一寸罷下來り候との事

一 此度討長之儀茂軍機之密ニすべきハケ様成ル謂ニ者有之間敷得と本末先後を立順序ヲ追ふて手を下し不申而者相成間敷長州妄激極るといへとも 勅命台命共ニ違背不仕と申了簡敷ニ候得者先ツ第一不相濟稜々不審之筋々等衆議之上得と相糺御詰問ニも相成然ル上當前之御處置ニ斷然被仰付然ルヲ萬一不服其罪ニ國ニ據り兵を擧んとする之節猶相論し結局則今日之如く諸侯に討手をも可被仰付管敷ニ被存候遠 勅を討と申日ニ者將軍自ら御出陣可有之程之事也右討手を命する段ニ者聊も猶豫なく神速ニ促し候様に有之度然ルを此度のごとくニ而者虚喝之體ニ相流彼之藩をして却而結バしめ我が討手をして情氣を生ぜしむる譯ニ而恐らくは軍機を誤りたるとも可申敷残念ニ候との御内話振ニ付斯迄御高論有之候ものなれば何ぞ此度之議ニ及候哉と申上候處下地右様之論も稍々附居候處前ニ申ごとく此度之事春嶽公守護職被仰付等之事迄大小監察共ニ豫り知らず閣老とても被仰出候日ニ承知或ハ跡より知り候向も可有之敷との御内話ニ而有之候 乍然閣老方監察等ニ而或ハ其議ヲ豫り知らずと申候而ハ不覆元より押立て申候日ニ者不相濟是又動搖之一ツニ付此上猶如此儀無之様いたし此節ハ内輪切ニ而爲濟候管敷之内話振ニ相聞へ候事○參豫杯今更強而止んとすれば激する之勢ニ付自然とはハ入らぬものと申處ニ運ひ候様 依而伺候ニ者此表ニ而板倉侯杯會津守護職御免之儀如何成ル譯敷御承知無之實ニ而もいたし可申との御内話有之候事 依而伺候ニ者此表ニ而板倉侯杯會津守護職御免之儀如何成ル譯敷御承知無之實ニ御驚と申哉ニ伺居候處是ハ全軍機之大切なる事故御近臣といへとも深く御秘しの儀と存居候處全御承知無之ニ而有御座たる哉と申候處前ニ申ごとくの次第ニ付跡より申越候迄ハ實ニ御知りハ無之との御咄ニ而御座候何様參豫の盛なる様ニ而者而倒との御咄ニ而御座候事右之口氣ヲ以何量り候ニ全ク參豫の方ニ權分れ有之其方より直ニ右様之儀出たる

事敷と相見申候尤御咄ニ一橋公御手帳敷之様成ルものニ會津守護御免軍事之儀等一寸御扣有之たる哉ニ候得共いづれ衆議之後被仰出候事敷又ハ只ケ様之論も出候ニ付御扣ニ相成居候事敷と被存居候内被仰出ニ相成たる敷之由一橋公内ニ不相替森物平岡四郎居り候ニ者困り候との事 平岡之儀者昨年四月一橋公京都より未タ御歸藩無之内水野縫雲杯之隠然相ヲ損し候事有之然れとも利口ナルヲ以能く取入居候事板倉侯上書して辨引入中一橋殿中ニ而白儘ニ應舉等之聞へ有之其時淺野伊賀守酒井飛騨守等被召會津藩ニ而平岡而賣され候儀有之無程板倉侯御出動忽チ淺野伊賀守酒井飛騨守等之森人隨而退く平岡ハ其居り場計風城孤の形ヲ殊ニ其所爲無跡ヲ以退くるニ道なく其儘ニ居りし其時分より之入租たる次第ハ筆上ニ書しがたし是迄之脈脈を能く探索し居不申而者不相分尤昨年五月小笠原圖書頭種瀬酒井應接金被遣之始末を認置候時分より略模様も相分り居禮體評判不宜相聞へ候事黒川嘉兵衛も遂一橋公ニ平岡附居候ニ付而者兼而之持論等ヲ以考見候得者越前ハ勿論薩等に結ぶニ近し若左あるに平岡同志ト相成候由 一橋公ニ平岡附居候ニ付而者兼而之持論等ヲ以考見候得者越前ハ勿論薩等に結ぶニ近し若左ある時ハ一橋公を其方ニ引込幕府之事一ツニ一橋公ニ附與し薩越等より之議を爲聞受候様之模様も可有之敷追々時勢ニ心ヲ用候もの多くハこゝに眼を附相咄申候

一 守護職者會津之如き種々の策略杯ヲ構へざる堅固なる藩こそ世人の嫌疑も薄く頼ニ有之候處兎ニ角今日會津を御免ニいたし候而者些ト早ク未タ夜の明ケざる内ニ行燈を取退ケ候様ニ而又々百鬼縱行も難計長州への先軍何ぞ會津ニ退らば會津ニ限るニもせよ前以申付置候ニも及間敷最早一日被仰出候上者未練ニ相聞候得共何卒可成ハ今少し會津ヲ元之通守護ニ復し置度ものとの存念ニ口氣被相伺候事 是ニ付或人の見込此ニ附録寸長之所置一大事なるを其内評議等閣老方監察等討長の事ハ却而外ニなり會津ヲ復し置度等の論出候も又尤とも云ふべし斯相怒本末を失ひ候様之儀ハ諸名賢公方ニ有ル間敷儀ニ被察候處是ヲ試ニ百里外より推察いたし見候得者萬一ハ京都守護職入替之方却而主ト相成門の突加ニ討長の先軍ヲ以て堪所替ヲせしか此未何卒一具州ヲ追ふて百里外より推察いたし見候得者萬一ハ京都守護職入替之方却而主ト相成門の突加ニ討長の先軍ヲ以て堪所替ヲせしか此候ニハ己甚正敷無之而者不相成と杞憂ヲ抱候もの之儀諒有之候事

一 中川宮様に薩甚取入居候哉之處近日少し疎之方に相成候氣味ニ相見候由依而敷勸修寺宮様を奉出 越前も周旋と或人の京是ニ者餘程近來御親敷入込居候由中川様にハ會津より能入込居候由

一 密體薩州ハ京師ニ者餘程附入手も能廻り居隱然跋扈之恐不少由

一 春嶽公者御説恰も共和政治ニ近ク相聞候との風説

一 土州ハ參豫ハ不宜之御存念ニ相見候由ごうか近日京師御引取ニ可相成と被存候と御咄有之候事 元來容堂公ハ一昨年比ハ春嶽公ト御一説之様ニ被



相同候事尤御家來者其比ニ而も皆此節ハ春嶽公餘り薩ニ御媚の體ニも有之歟 或人の京狀 容堂公近日島津と御中合不御宣哉不可然と存込居候様子ニ相見候事 去レ七日土州藩人ニ遣候處申聞候ニ者容堂公御病氣ニ而京師御暇依願二月廿八日京より春嶽公とも御十分ニも不被爲在歟之由 申出立四日比ニ者歸藩との事昨日飛脚ヲ以申來候との事也土州人京地より申來たる様子ニ而申候ニ者誠ニ尊藩ハ公平之御論近頃どふか弊藩も至極御同志之様ニ相成難有事と申聞候事土藩人之口氣島津者不平ニ申居候事

一 杉浦殿道家角左衛門方ニ於京師被逢候由被相咄申候  
 一 杉浦殿御咄ニ於京師殊ニ尊藩ハ聊も疑敷儀等無之此節之御盡力諸事重疊御宜拙者杯誠ニ御頼ニ思ひ至當公平之御濟以ニ相聞爲天下可依頼事ニ御座候と被申候事

一 關老有馬侯者餘程薩論ニ引込れ勝ニ有之候との事

一 内々ながら上京之關老方思敷無之畢竟其處より參豫之方ニ權も取られ候氣味惣體今日之如き形勢ニ相成候而者崇紋之衣服等張り立行裝而已ヲ以我こそ公義御役人也と挨拶等高振候様之體裁ニ而者權と申ものニ無之斯ク議論紛々の時ハ怪敷儀等而無之様心懸只々誠心ヲ以公平之議ヲ押立人心ニ相叶候様いたし度事ニ候其敷ニ至り候而者己レニ何之見もなく只列藩人杯下し視るヲ以公義風と相心得候様之舊弊ニ而者權と云ふべからず當時御役々之内只指ヲ屈て還御之日而已申居候様ニ有之依而被申候由ニ者早く還御ヲ欲し候ハ、爲すべき事をさつノといたし運びを附ケ候が則還御ニ相成候道ニ付銘々盡力其事を議定仕度此度又輕易ニ還御等ニ相成候而者大切就而者板倉侯ハ江戸を立退候ハ、又々如昨年種々の森物出可申去迎京師之方今日之如ニ而者埒明不申候ニ付關老ニ登人屹度骨折候仁無之而者不相成候ニ付是ハ未々至密ニ候得共此度小笠原圖書頭殿ヲ出し度と此表ニ而者大抵評議附候ニ付京師に其事を持て參り候積りあちらの評議次第決着ニ可相成との事 圖書頭殿之事ハ金子初能承知ニ付此咄致候事と相見候是ニ付金子杯還而相考見候ニ圖書頭殿ハ京有之實ニ此御方ニ而も御出懸無之候而者不相成候處ニ其儘ニ相成居候得共今日其罪ヲ洗ひ候得者明白ニ相成候道も一關公之御事も出懸ハ勿論春嶽公とて少し御不都合之儀も可有之右ニ付自然ハ夫等之邊ニ而被防候方にもハ相成申聞候と不入心御咄いたし候事

附録

一 秋元藩荒井某と申者二月廿日京都出立歸府ニ而申聞候ニ者乍恐被爲置

主上而も深く御苦惱被遊候故か 思召御勤キと相見二月十日比ハ頻リニ討長之 思召歟之處又二三日過て十四日比却而外夷之術中ニ蹈り候而者不相成云々ニ而又討長之事暫ク止メさせられたる歟之由右様之儀者京都ニ居候とて中々相分候儀ニ無之併夫々道あり堂上方之内ニ雲井之事存外近く承り得られ候先キ有之夫よりハ日々之御模様も相分候との事

又附録

一 金子相咄候ニ長州之木梨長左衛門と歟申者側用人と申事此節長州侯より使者として米澤仙臺秋田に夫々廻り候筈之由遊説之氣味と相見候由長州より差出候奉 勅始末と申寫半紙七八枚計りも有之候書附世間ニ流布いたし候いづれ右等之振合を以申參り候歟何様奥羽邊之人氣を動し候了簡と相見候との事如何成ル行裝ニ而參り候哉國も通行可致ニ付參り候は、程次第説破もいたし見んと存居候處未々參り不申内國許出立いたし候との事 二月下 承り候得者道ニ而最早參りたると申儀承り候との事先頃江戸表ニ而長州屋敷より米澤屋敷は何歟箱入之進物遣しいづれ國許云々より御國に米澤云々使者參る筈との事ニ而有之たる歟之由依而右進物米澤屋敷より國許へ送り候由米澤藩人上ノ山に參り金子ニ其咄いたし候ニ付申聞候由ニ者其贈り物ハ妙なる儀ニ而妄りニ可受譯ニ有之間敷云云議論委細申聞候處成ル程との事ニ而右進物ハ江戸屋敷の方へ又送り返したる歟之由

同附録

一 五六日前桑名藩高野一郎右衛門ニ出會候處申聞候ニ者會津ニ而初之程者 二月廿日 守護職御免之儀者大ニ譯ある事ニ而決而心配いたし吳間敷と聊案事候體も無之申さバ徳色之方とも可申様ニ相見候處近日 杉浦殿下府 追々京師より何歟申越もいたしつらん餘程憂ひ候模様 近日船ニ而其邊に出懸候節會津藩人申候由ニ者近日中之面白そふニ 相見候と内々申聞候事 二月十八日差出候高野板倉侯に罷出候事等 置候承り書と照し合せ見候へバ極相分候事



同附録

一二三日前會津藩石澤民衛來訪雜話之末私相尋候ニ者先日御藩林兄より何と歎杉浦殿の咄者御聞取者無之哉と申候處成ル程承り候自分も杉浦殿に罷出候得共駭と明了ニ者御咄も無之大模様略伺申候併し別段何も相替り候儀も無之候得共却而林御同伴ニ而伺來候方些ト委敷方ニ而猶模様も相分候との事扱其外種々咄之末同人戯ニ申候ニ者一長州ヲ追ふて百長州ヲ來さしめ候様ニどもニ而者いつ迄も治り申間敷我か藩杯も自然者些ト御先キニ甘ク遣はれたる意味も可有之歎併今更我が藩よりいたし方も申分も無之次第との事去暮御上洛御進メ之時分より近來迄者餘程露トハ親々居候處本文之口氣面ニ而銘々の見込更ニ善惡ハ未タ附ケがたき事同し會津藩人ニ而も初より露等何ノ譯歎不知不平之者も有之又安部并政治杯ニ至り候而者露ニ者餘程の辭いたし居候様子聊も嫌疑等入れず先日飛脚到來(二月十七日)之時分も此度之事ハ恐らくハ幕吏陰然謀り候儀ニ而露杯ハ毛頭も關係之儀無之と見込付居候事併し此頃者如何歎不知候事

右者京都表之事百里外より之咄ニ御座候得者銘々之辭見より咄違聞違自然事情相違も可有之候得共先ツ承り候通を認めたる積りニ而御座候此冊者茫然たる風説書とも違ひ夫々他人姓名等も認込有之候得者申上候迄も無之候得共別而係密ニ仕度奉存候事

右差出申候以上

子ノ三月十九日

田 中 彦 右 衛 門

三月廿日松平備前守は其幕府に提出せる國是意見の草稿を長岡護美に寄贈し一橋慶喜と談合あらんことを望む

〔子爵長岡家文書〕

上ハ書  
長 岡 先 生

無 法 主 人

貴書難有拜誦仕候今日家臣罷出候處拜調被仰付深畏入候扱横濱諸藩盡力之義御賢考之趣委細承知仕候何レ拜眉之上

萬々可申上候閣老に差出候草稿入貴覽候間一橋にも可然御相談希入候尤昨日入貴覽候々條少々増減仕候左御承知可給候早々醉後大亂筆御宥免可被下候以上

三月廿日

備 前 守

長 岡 先 生

二仲昨之失敬御免可被下候以上

又白諸藩一同引拂之儀御情書之趣是又承知仕候以上

〔尊攘録諸家建白並屆書等〕

備前侯建白

- 一 攘夷ニ無之而之人心一致之目途無之事
- 一 攘夷之儀之數年來人々口實と致居申候儀ニ御座候得とも素一定之策無之輕易ニ可致事ニ之無之無謀之兵端相開候而之却而外夷之侮を醸候譯も御座候得之既ニ昨年 假慮御遊奉攘夷之豪命被仰出候位之儀今更御變動ニ相成候而之物議紛々迎も一致之目途有御座間敷人心一致不仕候而之攘夷之儀ハ暫差置候而も今日之御政令も不被行朝命幕威も相立中間敷儀と奉存候間何分ニも人心之御基本ハ御屹立相成不申而之不叶儀と奉存候
- 一 三港之外狼ニ碇泊之夷艦は打拂候様御布告之事
- 一 此儀外夷にも御示ニ相成居候得之三港之來泊は暫御差免ニ相成居候とも彼方輕侮を制し決而神州之御國威も相立且攘夷御奉勅之廉も相顯可申候其上近々御應接之模様ニ寄忽兵端相開可申候得之其期ニ至り候而之何之要地へ襲來も難計候間右之趣列藩に御布告ニ相成居申候ハ、國國勉勵武備相整起情之一端ニも相成幕府之御權も相立可申儀と奉存候
- 一 鎖港之御實効相立候儀御急務と奉存候事
- 一 此儀使節歸帆之上御取懸と申計ニ而之人々疑惑之念相止中間敷候間御拒絶ニ相成候御手續豫メ御聞定諸藩拜承仕候様

元 治 元 年



有御座度何る差向横濱へ相廻り交易之品々御差留被仰出候様有御座度將又外夷へ對し曲直を正し候と申論も御座候趣  
ニも候得とも 天朝に被爲對候てハ大義ニ比較仕候得之輕重大小明白ニ相分候事ニ御座候間何ニも早々御實効相顯候  
義今日之御急務と奉存候

一江戸御城暫御差留緩々御修造有御座度候事

鎖港御斷判御取懸ニ相成候應接之趣ニ寄江戸近邊は戰場ニも可相成程之御見込無御座候而之應接も出來不申儀ニ御座  
候間唯今以前之通御普請御出來と申様ニ而之迎も博々敷御應接ハ有御座間敷と人心疑惑可仕候得之只々御假住居之思  
召ニ而御修理欠也ニ被成置候様奉存候將又江戸御府内人戸御減少ニ可相成歟之論も御座候よし此儀之尤可然義と奉存  
候間將軍家御歸府無御座内早々御取懸有御座度奉存候

一官方堂上方に列藩之上人入込居申候儀御差留ニ可相成候事

此儀昨年被 仰出も御座候處尙又當時相緩候哉ニ承り申候今般身武御一和萬事幕府へ御委任被爲在候上ハ御人少之御  
方々に之幕府御附人被差出 大樹公は御下坂御遊觀之御方帝都に御滞在御指揮御座候ハ、浮説異論も不相起萬緒一  
途ニ出候様相成可然儀と奉存候

一列藩就國武備實充ニ可致候事

近來諸藩ともニ疲弊不少趣ニ御座候間各藩御暇被仰出銘々就國武備嚴重ニ可致之勿論ニ御座候得とも國力不足之諸藩  
は幕府御助力御座候様無御座候而之急ニ行届難申るも可有御座且御用物價騰貴不致様厚御世話有御座度事

一長州御所置之事

巷説ニ承り候得之長防士民ニ至迄一途ニ必死と相極居申候趣ニ相聞候間御所置之次第ニ寄彌以人心を激し内亂之緒と  
も相成可申候間御寛大之御義は不及申素々御法憲ニ觸候儀ハ御譴責御座候とも攘夷之御基本御決定ニさへ相成候ハ、  
長州父子は不及申長防士民ニ至迄甘心可仕義と遠察仕候間一應御糺問之上速ニ入京御免被仰出候様幕府ハ 朝廷に茂

被仰上列藩私心を不挾同心合力仕候様之御所置肝要之儀と奉存候

(探釋錄九ニハ左ノ署名アリ) 松 平 備 前 守

### 三月廿日本藩脱走の士某長州より京都の情報を得て之を本藩の同志者に傳ふ

#### 〔木庭文書〕

(加屋海軍編書名ナシ)

上方中國風説報知書翰之事

以幸便云々中略長門藩之儀先頃申上候後は何ぞ相變不申京師表之儀ハ少々ハ變動も有之候段追々申來候ニ付傳承仕候分  
荒増左ニ申上候

一過ル二月十四日五日六日之間鎖港并 勅諭等立合ニ付 尹宮并一橋島津越前守和島老賊共及大議論候處 尹宮其外皆  
々一橋之鎖港説ニ被致論破之事 但右三日之次第士人より三田尻衆議所へ申越候書翰一見而已ニ而巨細ニ寫モ不追  
故ニ大略記

一會津守護職御免ニ相成五万石加増陸軍惣督被仰付候處此儀御受不仕候由

一薩州より今日上書有之其眼目は武備不充實故急速攘夷不相成攝海之防禦不充實を名とし矢張因循ニ而航海備仕候事ニ  
而幕へ畢竟阿諛し天下之人心兩端ニ抱かせ己れ正とも邪とも不分明之様思候文面之由也

一大和浪士十九人殺伐不堪悲歎候平野次郎共モ此内也

一薩より幕へ浪華城借受仕度段願出候處御免不相成於幕府も彌薩之奸計を悟り候由士人之水戸人より承り歸り候次第

一十七日二條城より一橋を呼ニ差越早速一橋登城之處春岳既ニ到居候由一橋へ對面島津少將字和島前侍從私等三人昨十



六日 尹宮へ参り尙相伺候處成程於 主上は斷然鎖港之 叡慮ニ被爲在候趣乍然其所は段々奉柔ケ手段も有之候ニ付幕府一定之論ニ申ニ者無之事柄は御自分御一名ニ而御奏聞相成可然と申候由ニ而一橋答て曰我一名と申は如何なる故そ斷然鎖港と申ハ此節幕府之定論ニ相違無之決而我一己之論ニ非モ既ニ十四日將軍より直ニ奏 聞ニ及之事ニ而則幕府之定論と申ものニ候と申けれバ春岳不平ニ而退出せし由右之都合ニ付斷然鎖港と申書附 朝廷に指出と云一橋之論ニ相成候處閣老水野等云何と申ても春岳は守護職之事故右書付差出時は一應春岳へ見せ候而可然とどうら閣老は春岳之方へも心を寄居候様子之氣色ニ候處一橋云決而春岳へ見せるニ不及斯く云書附出まると申事一應通し置可申と云事ニ而直様閣老水野春岳へ其儀ニ付參候處二條城より歸途宇和島へ寄り留守之由ニ而其日之始末は如何承り不得

一十八日朝越前中根親負一橋へ参りて曰 尹宮御傳言有之罷出候此度鎖港之御書付幕府より御差出候趣之處素より於尹宮ハ不都合ニ取扱屹度不致覺悟ニ付其所ハ御安心可被成下右書付今日御差出之處晚景御差出ニ相成候様との御事ニ候と申置歸り候趣一橋於爰て思案し何分晚景迄待居候得者如何様之不都合仕出も難計と直ニ登城して大樹公ニ書付爲認其文言ニ十五日一橋參 内之節 叡慮之處内々奉伺候處彌斷然ニ鎖港ニは相違不被爲在素より於臣も斷然たる鎖港決論ニ候云々といふ意味之趣右大樹公直筆之書付直様一橋早馬ニ而二條關白へ罷出差出候處關白殿曰 主上叡慮ニ於てハ素より斷然たる儀御變り無之右ニ付過ル十四日大樹公より差出之夷情難計云々等之書附は頗 御不滿ニ被爲在候故此書付差出候ハ、必 御宸悅可被爲在と申て書付御受取之處其翌日右書付大樹公之處へ下り候趣ニ而一橋大ニ心配して登城いたし候處右書付下り候譯は一橋中納言内々奉伺と申内々之字消し可申決而内々ニ無之と申聞せるとの叡慮ニ被爲在直様内々と申字ヲ削認直し閣老兩人以二條殿下へ差出候趣ニて誠ニ難有御事ニ御座候

一河越候も一橋と同じく周旋被致候由  
右者俄ニ差懸り亂筆相認自然は落字も可有之御推覽奉願候事三月廿日  
奉追啓候本文風説書之中ニは些不分明之事も自然は有之哉と承申候間追掛此段奉得貴慮候彌生廿二日

一只今之模様ニ而は不相變薩越之兩賊益開港之論附而は滅幕滅長之論も有之候由其外京師滞在之諸侯は幕府之論ニて今日は専ら七卿を奉始長助け攘夷之議論紛々併 朝議は因循薩越之論之由今日は一橋大ニ周旋尤是は水落より餘程添力候由就而因備は同論尤因は舊冬より御召ニ相成候得共病氣ニ而御斷先々月は上書共有之上書之趣意は餘程於 朝議貫通仕候歟と奉存候近比は又々上書有之候由此節之ハ未々手ニ入不申先頃之よりも猶以宜きと申事ニ御座候先頃之ハ所持仕候得共最早御覽ニ相成候哉と差出不申候備前は先達而上京有之候土州は出京相成申候得共 朝議幕議其外諸藩何れとも論不合候由ニ而最早歸國ニ相成如何之議論やら一切相分不申此上は割據と相見申候長藩も此度御末家吉川家々老一人從 朝廷御召之由是は極々密々承り申候長藩之事ニ付而は一橋も大ニ周旋ニ相成候由少々都合宜方歟と愚考仕候委細之儀ハ近々云々略

一御許之儀此末は如何可相成哉大青之事も承り大ニ驚愕仕候御兩殿様方は未々御下國之儀は相分り不申哉只今ニてハ只管一橋あたり御同論之由乍恐難有事と奉欣喜候最早薩之奸謀は上下共ニ存候由ニ御座候將又今日は會藩頻ニ攘夷論之由一笑仕候事ニ御座候  
一先頃薩摩船長上ノ關ニ而燒拂上乘之賊ニ加 天誅候主意別紙ニ申上候高橋利兵衛ハ實は浪華へ同道仕兩人之割腹見届ニ参り候而尙罷歸候上ニ而之事ニ御座候兩人之死骸は大坂町人共より町奉行へ申出貰受候而本願寺へ葬送仕候由町人共を實ニ誠忠ヲ感しかくは致し候事之由ニ御座候  
一略云々只今之處ニ而は只々腹力を養ひ候而已ニ而實ニ奉對御國家候而も相濟不申最早脱走後も七八月ニ相成候得共何として一事も仕出不申如此因循傍觀仕候を日夜嘆息仕候得共機會を不得候而輕舉妄動仕候而ハ却而奉對 御國家不相濟奉存候乍然畢竟盡力之不足故ニ而御座候云々略決而々々御氣遣無之様云々略片時も早々賊首を斬て不可不覺云々頓首百拜

三月廿日  
元 治 元 年

無 名 氏  
六四七



三月廿一日藩主慶順使を窪田治部右衛門の旅館に遣し謝意を表せしむ

〔文久四年  
機密間日記〕

三月廿一日

治部右衛門殿江口彌左衛門宅に滞留中ニ付御使を以仕出白木文箱入也

以手紙致啓上候彌御堅固珍重被存候今般當所御越付而被思召寄早々被懸御意御心入不淺御事太慶被存候右御挨拶被申  
述候此段宜得貴意旨被申付如是御座候以上

三月廿一日

窪田治部右衛門様

小笠原備前

三月廿三日長岡護久參内して歸國の恩命を謝す時に朝廷其警衛の勞を慰し物を賜ふ

〔文久四年日記、京都返達御用狀扣〕

澄之助様三月廿二日御國許に之御暇御願之通被仰出右爲御禮同廿三日御參内同廿四日御登城之處御懇之叡慮上意を別  
紙之通御拜領目出度御儀奉存候云々

〔別紙〕

長岡澄之助

爲越中守名代上京長々滞在御警衛殊勤番等被 仰付苦勞ニ被思召候今度御暇ニ付賜之候事

御末廣 三本入 一箱

御絹 五包

〔文久三年元治元年  
自筆狀控〕

澄之助殿御暇出候付御日限等之事

以別紙申達候京地一鉢之事情等申上旁片山多門に稜々相含去ル十五日爰許差立候後ハ格別相變候儀茂無御座候扱御二  
方様御一同御暇之再御願書御差出ニ相成候得共御暇不被下置候付澄之助殿迄之御願書猶又御指出漸ク御暇を賜り明後  
廿五日爰許御發途之管ニ御治定被爲在則御願書寫等委細他筆御用狀之通ニ而御一方様ニ而茂御願取被爲濟御供中茂過  
半引拂之持ニ相成御同慶ニ存候最前ハ御引離ニ相成候而ハ追而良之助殿御引拂之御都合愈以六ヶ敷相成可申哉之恐不  
少段々御手を被爲附候付而ハ御内輪之御事情篤ト御汲取來月末迄之御暇と被仰聞置候處去ル廿日良之助殿ハ一橋公ハ  
猶御内話有之候ニ之廿日比ニ之無相違御暇可賜候間右之趣ハ御家中爲安心觸流し置候儀も不苦御船之儀之公義ハ御手  
賄ニ而蒸氣船二艘御貸被進管之段茂被仰聞候程之事ニ付此上御引留と申様之儀之有御座間敷御地ニおろても左様御懸  
念無之様存候以上

三月廿三日

有吉市左衛門  
有吉將監

惣連名宛

三月廿三日本藩は時勢切迫國財空乏につき求言の令を奉行に示す

〔小笠原備前日録〕

三月廿三日

以時世切迫、國財乏、求言之令、示奉行、省略且國益之事也、○荒木井上二氏、命蒸氣船一件之惣宰之事、

〔文久四年  
機密間日記〕

元治元年



口達

御奉行

方今不容易時世ニ付而之御軍備專之御覺悟を被盡格別之御省略被仰付置候得共近年不被爲得止莫大之御出方面已被差湊御借財打重危迫之御運ニ成行候付此上難被略儀を被略聊たり共御國力を不被養候而之難儀御場合候間御省略筋并御國益筋之儀心付之次第之不憚忌諱書付を以早々可被申出候以上

三月廿三日

三月廿三日長岡護美松平春嶽を訪ひ其辭職を賛すと雖も其退京を延期せんことをすゝむ  
〔續再夢紀事〕

同日(廿三)長岡良之助殿來邸せらる公(嶽)對面ありしに長岡殿今度辭表を出されしよしあるか其御次第は御尤至極にて素より御同意あり併御退職ありても當分ハ其儘御滯京來月に至り陸豫始歸國の時を待ち同時に御發京あらせらるゝ様にと申され公にも退職せしとて直ちに歸國ハせさる心ありと答へられたり 摺密備忘

三月廿三日本藩庄村助右衛門河瀬典次等勝麟太郎を長崎の旅館に訪ひ横井平四郎託する所の海軍問答書を贈る

〔海舟日誌〕

三月廿三日

長藩柳健藏來訪 肥後藩庄村助右衛門河瀬典次三村市彦來訪 横井先生の著海軍問答の書持參 傳言あり  
(海軍問答は之を略す小楠道稿を参照せよ)

三月廿四日長岡護久二條城に登る將軍家茂親しく其幹旋の勞を慰諭し劍一口を與ふ

〔文久三年 京都諸扣〕

三月廿四日

一澄之助殿依御達今朝六時之御供揃り而御登城被成候處左之通被爲蒙上意御刀御拜領候付而御歡茂前條朝廷ハ御拜領之節ニ準申上候事

但本文之儀付而御歡申上答之段御用人ハ達有之候事

上意之趣書取

昨年以來厚心配致彼是周旋之段満足致候歸國之上茂心付之儀之必申越様ニ頼み候

御拜領之 御刀 武藏國兼植

〔家茂公二度目御上洛一途〕

三月廿四日

御刀 武藏國兼植  
代金拾五枚

長岡澄之助

右御座間替席於御墨書院御目見御懇之上意有之御手自拜領之

三月廿五日一橋慶喜後見職を免せられ禁裡御守衛總督及び攝海防禦指揮を命せらる

〔京都返達御用狀扣〕

(一橋家人成田藤次郎平岡四郎黒川嘉兵衛より我藩在京用人朽木内匠谷内藏允宛)

元治元年

六五一



以手紙、、、然者一橋殿今日二條に登城被致候様被 仰出候付登城被致候處別紙之通被 仰出候依之爲御知得御意候以上

三月廿五日

一橋 中 納 言

禁裡御守衛總督攝海防禦指揮等被 仰出候是迄後見職被 仰付置之處今般依内御被免候但大樹在京中者以前同様心得可有之旨 御沙汰候事

三月 右之通被仰出候猶此上御勉精御盡力可被有之候將又在京中不相替御心副御後見被下候様に

(幕府は四月二日大目付に令して此旨を諸侯に觸れしむ)

〔尊攘錄探索書〕

元治元年甲子年 (子四月五日田中彦右衛門江戶にて開書の一節)

會津石澤民衛内話之事

一橋公京都御守衛總督攝海防禦指揮被爲仰付御後見御免と被爲成候ニ付而者一ツ者幕府を少し御難之味も有之却而宜からんと申説も或有之候得共夫よりも後憂之方強く此末京師御居殘ニ而大權殆ト將軍様ニ比較する之勢ニども萬々一相成候ハ、大切と申説も承り申候夫と申も畢竟一橋殿中ニ社鼠城狐之蠢物あるを以愈御徳を損成モニ至候儀可有之との説相聞申候實ニ是迄之陰然たる説話隠然たる所爲等見聞いたし居候ものハ前條之憂其崩無きニしもあらざる様ニ相考恐らくハ十分宿志之處ニ運ひ來候譯ニ可有之歟と推察之説承候事 此ヶ條金子與三郎よりも承候事

三月廿五日幕府は軍艦操練所燒失につき仮稽古所に於て教授すべき旨を達す

〔文久四年慶應二年迄 御同席觸寫并大目付様御廻狀寫〕

牧野備前守殿御渡候御覺書寫一通相達候間被其意云々

三月廿六日

大 目 付

松平 陸 奥 守 殿

上杉 彈正 大 弼 殿

右留守居

大 目 付に

今般御軍艦操練所燒失ニ付當分之内同所南隣増地先松平安藝守屋鋪内假稽古所相成候間算術學測量學造船學者一六三八船具運用學蒸汽機關學者二七五十海上炮術學者四九大小炮船打調練者一六右各日割之通相心得稽古罷出候者之當月廿七日より同所に罷出候様可致候 右之趣向々に可被達候事

三月廿五日

三月廿五日長岡護久京都を發し歸國の途に就く

〔家茂公二度目御上洛一途〕

三月廿五日

一澄之助様爲御歸國今曉七半時之御供揃ニ而 五時過西本願寺御旅館 無御滯御發途被爲濟候事

〔京都返達御用狀扣〕

元 治 元 年



三月廿五日 四月四日着  
澄之助様御供  
中島彦助より

京都方之雇飛脚今晚當所に着御國に被差通候付拜呈仕候 澄之助様益御機嫌能今曉七半時之御供捕ニ而京都御發駕晝  
四時比伏見御着直ニ御乗船暮六時比當所(大坂)御着被遊御止宿奉恐悅候此段得貴意申候以上  
三月廿六日長岡護美は不日發足歸國の途に就くべきを以て氣船二艘借用したき旨を幕府に申請  
す

〔京都返達御用狀扣〕

寫

水野和泉守様

今度兄長岡澄之助儀御暇被 仰出御當地發足仕海路罷越候付國許より相廻置候用船ニ乗組罷下申候私儀茂内願之通不  
違御暇被下置候者早速發足仕海路茂差急可申慮猶又用船差廻候儀間ニ合兼候間何卒當時攝海に御繋ニ相成居候蒸氣船  
之内二艘拜借被 仰付被下候様奉願候以上

三月廿六日

長岡良之助

御付札

願之通御軍艦二艘拜借被 仰付候間御軍艦奉行可被承合候

三月廿六日在府本藩奉行副役柏木文右衛門書を在藩奉行に致して長岡護美を會藩主より養子に  
懇望の由を報す

〔鎌田文書〕

今廿六日月末御飛脚被差立候ニ付拜呈仕候太守様奉始兩地上々様益御機嫌能被遊御座重疊奉恐悅候將又彌御清康被成

御執務奉欽祝候爰元御屋敷々々別條無之舉而私も無異相詰居乍慮外御放念奉願候先以二月廿三日之貴章去廿二日相達  
忝拜誦仕御國許一躰御靜謐之由恐悅此御事奉存候併テ京都表之近况兎角八ヶ間敷何共懸念之至ニ御座候多門様十八日  
比御發京之御模様ニ承り御途中之御氣削テ奉察候得共萬々珍重奉存候殊ニ萬般事休御貫通ニ欽養仕候兩公子御退京何  
程之御模様罷成候哉既ニ會津藩方良之助様を御養子ニ懇願ニ而田中彦右衛門に之會之御留守居石澤民衛森并惣四郎に  
之右民衛并桑名之御用人高野市左衛門杯方内々探見候由御家之是迄徳川家御血脉外御見合も無御座候得共方今之時  
勢故御賢明を奉慕候山右様御評判ニ被爲在候得之御退京ニ差障共之仕間敷哉奉懸念事ニ御座候

一勝様長崎行ニ付太田黒權作申出之趣被仰示敬承仕於爰許も其取沙汰御座候何卒無事ニ相治候様奉祈候府下并横濱も昨  
春之御留守申方之一躰平隠ニ相聞へ是ト申變異も是迄承及不申候水戸領嘯衆も鹿島邊之浮浪輩之彼役筋方差押候様子  
ニ御座候仙臺ニ米澤邊境之中分寸斗形付兼仙臺候に御直談之爲ニ上杉様夏之御參勤を少シ被差急去ル十日ニ歐御着府  
ト之唱も御座候得共未々突留候儀承込不申其外録呈筋も御座候へ共御飛脚ニ差臨應對繁ク何も期追便早亂仕候以上

三月廿六日

柏木文右衛門

御奉行中様

猶々先便至密得貴意候郡方之引入も去ル十四日ニ大坂方之抜キ致着候所ニ而日々出勤之持相成安心仕候御端書之趣忝  
く奉存候最早櫻桃散亂藤花咲出候由ニ御座候へ共近日兎角雨勝ニ而時々冷氣を催不順之氣候ニ御座候時下乍憚御自保  
奉專禱候又々以上

三月廿七日長岡護美中川宮に參候して松平春嶽の辭職を聽許あらんことを請ふ

〔續再夢紀事〕

廿七日朝平岡四郎來る公對面せられし昨日參邸の時ハ御内願の趣御整ひの方ニ申上しか同日夕刻の朝儀ニ陽明家

元治元年



兩宮とも一切御承引なく守護職及兩人に定まられ然るゝしとの御意見にて終に其事に内決せられ中納言殿は最早取計らえまかたふしとの事より就而之此上より公の思召返され更し御勤職ある様にと申出種々勸告し及ひけれハ狛山城中根親負等側らに在りて左程迄に解職を惜させらるゝ事ハ大藏太輔の身にとりて辱き次第なれど過日來屢申述し如く已に挫折せし人心をいかゞして奮起せしむべきや何分にも内願の如く一日も早く御許容あらん事を希ふまゝと申たれハ公も同様申述へらまし平岡昨日の朝議陽明家兩宮の御論鋒頗鋭く強く解職と申立られハ中納言殿ハ公に退職を望まるゝとやとの嫌疑をも受らるゝ勢なきし由に承はれりされハ此上尙御退職の御決心なれハ貴藩より陽明山の御方々共説かるゝ外あるへからすと申出反覆論談中一橋中納言殿來邸せられ其御席へ平岡狛中根等をも召出させ擬中納言殿昨日の朝議に陽明山に御方々何分にも今度の御辭職を承引せられす種々仰聞られし御旨あましかすへて御尤至極なれハ強て御争ひ申上へき様もなくて退朝せりされハ大藏殿ハ今一應思召返さ其儘御勤職ハあるまじきやと尋ねられ狛始へも此議如何と申させけれハ公一旦銳氣を折きし事故到底勤職する心ハ至りかたけれと強く勤めよとの事なれハ止を得ず御請ふ及ふへし併家來ともをして市中の取締に係る務を取計らハしむるゝと、先自分ハ登城もせざるへく何事比御相談も加えらざる事に願ひたしと申されしかハ一橋殿をハ餘りも御見限りの事ありいよ、御勤務ある事なれハ朝暮比御嫌疑ハ拙者何様も氷解し至る様周旋すへし尤 朝廷の方ハ最早御嫌疑もゆるましく思えるまハ周旋すへきハ幕府の方比まありと申されしか公昨日の朝儀を幕府にてハ如何御聞受あまじしや拙者の内願を尤聞取られたる事なれハ何とか御周旋の次第もあるまきありと申されし平岡いかも御尤比御心付ありさらは是より川越侯比許し行き山田四王天に申談すへし併先刻已に申上し如く御當家よまも矢張陽明山の御方々ハ陳述せらるゝか肝要なるへしと申し候故中根當家よりハ己に昨日陽明家へ十之丞近江尹宮へ親負參上して御依頼申上たりと申けをハ一橋殿兩人の參りしハ陽明家尹宮とも御參 内以前よりしや又其時御雙方に之何と仰せられしやと尋ねらまし故中根御雙方共御參 内以前よりしか仰の趣ハ云々まじしと昨日仰聞けられし大意を斟酌して申上し平岡幕

府より沙汰ハおきやと仰られし程の事なれハ 朝廷にてハ己に御決定ありしものゝ如しされハ速に幕府の方比周旋すへきありとて直に川越侯の許に赴らんとしたるか一橋殿川越へ行きても其周旋の行届くへくハ思之れすとて平岡を指止せらまさて今日の御相談ハ先刻より千緒萬端に涉るゝと約る所御出勤の方なれハ其周旋は拙者何様も盡力もへし御退職の方なれハ其周旋ハ貴藩にて何様も御盡力あるへきの二ツも出ておいては方ならんと尋ねられし故公覆水盆に復らすと答へられしか平岡水に擬せらるゝ故復らされ共益に擬せられハ幾度覆しても元復るへきなりとて押して御勤務の事比勸めし故狛平岡に向ひ川越侯の許に行きて周旋と申されし目的ハ進退いつれのかたありや最初ハ解職の周旋と聞へ後ハ在職の嫌疑を解るゝ爲の周旋と聞ゆるありと申し、ハ平岡只今申し、ハ御出勤ある方比周旋ありと答へけれハ狛然らハ川越侯の許に赴かるゝ事ハ御見合ありたしと申出夫是談論し及ひ居し内長岡良之助殿來邸せらるゝ長岡殿今朝尹宮比御許に參上して大藏太輔の辭職ハ時勢止を得ざるより出願し及ひしものなれハ願の如く御聽届ある様にと申上し宮御了解までさらハ強てとハ申すまじしと仰られ又島津始も一旦歸國仰出さるへきかとの御沙汰も在らせられたりさる次第なれハもえや此上御抑留ハおかるゝ併尙正親町に説得すへしと仰られたれハ明朝ハ同家に行き相談し及ふ積りありと申されしかハ一橋殿としめさる次第に運ひし上ハ最早御願意ハ貫徹すへしとて始めて他の御談話に移られたりかくて來邸の方々へ晝餐を餐せらる午時過一橋殿歸館せられしか平岡ハ尙居止り再び公に調して今般の事ハ如何にも不本意の至りありと申述さて涕泣し時移し、ハ公引入れられし後平岡又酒井島田に對していよ、御退職に決せしハ誠し以て残念千萬の事あり就てハ此上何とか御望乃廉ハ在らせられすやと尋ねしか酒井私し事ハ望みの廉あるへしとも思之れす只々此上公武御一和の御調然を冀望せらるゝふるゝと答へし平岡頻りに諛辭を述へて數刻の後退散せり此日長岡殿も居残られしか水野泉州殿を訪問せらるへしとて其退宿あるへき時刻を待たれ夕七時半時過退散せられたり 同上

同日夕刻中根親負其字和島侯の許に遣さる昨日同侯より書翰を以て中根に面談せられたき旨申越されし故あり此時



伊豫守殿去ル廿三日拙者陽明家ニ参りしか伊宮も成らせられ又島津大隅守も参集した其節陽明家伊宮御相談ありしハ今度一橋の冀望ニ任せ同人共京都御守衛惣督ニ命せられけり此ハ例の已を待む辭あれハ今後如何なる氣隨の舉動ニ及ふべきや測られず大ニ懸念する事ならん時これを抑止するハ越前ノ如くものならず故ニ越前の守護職ハ常節必用見込あるか此頃頻りに辭職申立甚だ當惑せりいかすべきやとの御沙汰もありて容易ふらざる御心痛の模様おましる伊宮ハ殊ニ大藏太輔殿の在職冀望せらるゝ御様子おましと物語られけれハ中根さる御事もありつらめと幕府の近況ハ例の嫌疑にて容易く出動すへきならず故ニ大藏太輔ハ斷然辭職ニ決心して動さるるより尤過日來陽明家伊宮本と頻りに御抑留も當惑いたし居りし今日一橋殿來邸ありて尙又出動を勧め居らるゝ内長岡殿來邸せられ之々の御物語にて少しく安心せりと申立しかハ伊豫守殿さる次第おれハ此上ハ是非ぬいふへきならず拙者も解免を望まるゝ方に御同意すへしと申され尙今夕も陽明家へ参るへき筈おましとの御断あまし故中根あらハ陽明家も此上抑留せられざる様御取成をと申しゝる伊豫守殿承諾せりと答へられき 隔密備忘

三月廿八日長岡護美一橋慶喜に謁し松平春嶽の爲めに説く所あり

〔子爵長岡家文書〕

華翰忝拜誦仕候昨鳥以來愈御清安御起臥被成御樂種々可有之外出仕候者ハ浦山敷モ奉存候扱正親町家差支ニ而今日ハ出來兼候間明後日迄ニハ是非説得只今喬公ヨリ罷歸此方モ御都合宜敷圓熟先生モ屈服ト奉存候歸心如矢春晴難耐候午睡欲成歌枕而可有御座奉存候恐々謹白

晚春念八

鼻 公

机 下

良 之 助

筑前モ愈御暇ニ相成候由會津に水戸ノ御縁之一條モ愈之由早々不盡  
今日モ讃州邊之家老ハ喬公へ参り居申候也呵々

輕負眼鏡ハ直談之次第有之不日相招候筈ニ候三四日之中可然歟

三月廿八日日本藩新購入の汽船に關する事務擔當者を任命す

〔機密間日記〕

晴三月廿八日

御勘定方 御奉行に 覺

右者蒸氣船御買上御用懸被仰付置候付右御船々係候御用向を茂請込被仰付候條此段可被達候以上

三月廿八日

覺

御奉行に

田代儀左衛門  
野田惣右衛門

齋藤久助  
井上勝藏  
笠熊七  
甲斐半太  
荒尾角兵衛  
古閑作左衛門

元 治 元 年



右同斷被仰付候

小山多左衛門  
古小路嘉右衛門  
岩佐貞左衛門  
井場軍太兵衛

右者蒸氣船御買上之管ニ付御用懸被仰付右御船ニ係候御用向を茂請込被仰付候  
右之通可被達候以上

三月八日

覺 御郡方 御奉行に

岩佐合平

右者蒸氣船御買上御用懸被仰付置候付右御船々係候御用向を茂請込被仰付候

藁田伊右衛門

右者蒸氣船御買上之管ニ付御用懸被仰付右御船々係候御用向を茂請込被仰付候  
右之通可被達候以上

三月廿八日

三月廿九日本藩田中彦右衛門は常州鹿島屯集の水戸浪徒に關する消息を傳ふ

〔尊攘錄探索書〕

〔子三月廿九日田中彦右衛門報告の一節〕

一水浪例之先年之風然し先年ニ比まきハ孫位之事之由鹿島潮來小川等ニ集候由併鹿島ノ神武館と唱候處ハ最早落城と人々相咄申候

三月晦日長岡護美松平春嶽の途次陸路播州室津に至り是日乘船豊後佐賀關に向ふ

〔機密間日記〕

一筆致啓上候太守様上々様益御機嫌能遊御座奉恐悅候澄之助様彌御平安去ル廿六日大坂御屋敷に被成御滞留候迄之御儀者同所より申上候通御座候同廿七日四時之御供揃ニ而御立夕七半時過攝州西宮驛に御着一昨廿八日朝六半時之御供揃ニ而同所御立同國兵庫驛御書休ニ而夕七半時過播州大藏谷驛に御着昨廿九日朝六半時之御供揃ニ而同所御立加子川驛御書休ニ而夕七半時同國姫路驛に御着今晦日朝六半時之御供揃ニ而同所御立書九半時過同國室に被成御着彌以御平安御膳等御快被召上重疊目出度御儀奉存候今夕直ニ波奈之丸に被召召坂越迄御下り被成等御座候此段爲可申上當室湊より御小早差立如是御座候恐々謹言

三月晦日

清田新兵衛  
朽木内匠

大木織部殿 以下略

三月晦日長岡護美松平春嶽の爲めに正親町實愛に説く所あり  
〔子爵長岡家文書〕

〔長岡護美より松平春嶽へ〕

爾後御勇健奉賀候陳ハ正親町に今日申入候處尤御同心ニ而候間御安心可被下候委細ハ近日申拜話可申上候早々頓首  
元治元年



春盡

良之助

南

越

机下

三月晦日本藩奉行鎌田軍之助を小倉に使せしむ

〔機密間日記〕

文久四年

三月晦日

口達

鎌田軍之助

其方儀小倉に御使者として被差越候條可被得其意候以上

三月晦日

鎌田軍之助儀小倉に之御使者被仰付候條御口上振等之儀於御書方取らへ候様可被達候以上

同日

御書方 御用人 衆中

奉行所

三月某日我藩は藩主の參暇及び京都警衛割合調書を仙臺藩留守居に送付す

〔江戸返達御用狀扣〕

四月十一日安田より

先月廿五日之御便ニ得御意候仙臺様御廻狀御參暇御割合御答之儀別紙之通取調草稿御用人披見之上御留守居に達ニお  
よび夫々仙臺様に差廻ニ相成申候御差上ニ茂可相成哉宜御取計ニ可相成と存候以上

〔別紙〕

越中守儀去戌年參暇御割合被仰出候後未參府無之尤寅年迄之内來丑年夏中參府之割合御座候

一文久三年正月十七日越中守依 勅命上京之處暫滞在御警衛被 仰付旨同廿七日坊城大納言様より御達有之其後松平春  
嶽様より茂御警衛被仰付旨二月廿九日御達有之相勤居候處四月三日御暇被仰出同六日京地發足同廿一日國許着當時在  
國中ニ御座候

一拾萬石以上之面々京都爲御警衛去亥年上京之御割合は御觸達ニ相成居候處當子年後之御割合は未御觸無之候付越中守  
上京御警衛頃合未相分不申候

但京地御警衛御用者今以相勤居弟長岡澄之助儀爲名代去八月京都に差登末弟長岡良之助儀茂右一同差登當時洛中所  
々御警衛御用相勤居申候

三月某日本藩人遠山屋兵衛薩藩の近狀を視察報告す

〔尊攘錄探索書〕

極密袖扣

今度爲外聞薩州表に被差越見聞之次第ハ委細別紙を以申上候通ニ御座候然處薩藩之輩國中一和之所柄ニ而容易ニ役筋  
之儀ハ市に洩不申殊更此節之儀者尤至密之御集儀も有之哉是レ申儀聞取兼申候得共滯留中心易人も出來夜分ニ懸聞  
繕申候處御國之殿様御政事京都ハ三郎様御處置ニ而昨年之處ハ御隱居様ト申被引分諸説區々兩端ニ有之哉ニ而一旦三  
郎様御下國之上御取計筋委敷御示談之末當時一和ニ相成居候由此節長州表打手御内意被爲蒙仰候御模様ニテハ今御一  
左右ニ付而之急速御人數出立御覺悟ニ御座候諸藩同服ニ被思召上との趣專一ニ而表向ハ右之通御深情之押立ニ而聊御  
疎意之儀ト之相聞不申候へ共薩藩之意地表裏之取計而已ニ而臨機應變之御處置有之哉ニ而重キ御事柄果哉角奉申上候

元治元年



儀之重疊奉恐入候得共卑賤之身分と之乍奉申上折角此節被差立候處ニ而之見聞之趣不聞奉申上而之心中不奉安次第  
ニ付誠以奉恐入候得共表向之薩藩御深情之御交を以諸事御打合可被爲在哉變化之御計策之不被爲在而之萬々一薩藩之  
爲ニ御人數御發途も難計奉察候長州よりも此中飛脚兩人入込申候由ニ御座候得共迎も御城下入之出來兼可申見込ニ  
御座候右之趣乍恐不聞奉申上別帑於薩州聞取申候書付相添此段極密封印を以申上委細口上奉申上候以上

子三月

遠山屋兵衛

今度於薩州手寄を以寫取ル稜書左之通

島津周防殿

右者從幕府長州に御糺問之筋有之萬一承服無之節は御征伐可被遊思召ニ付其節は討手人數御差出ニ相成候様被爲蒙御  
内意候ニ付御名代被仰付候

喜入攝津

右者從幕府長州に御糺問之筋有之萬一承服無之節は御征伐可被遊思召ニ付其節は討手人數御差出ニ相成候様被爲蒙御  
内意御名代島津周防殿に被仰付候付被召付旨被仰付候

右之通今日御直ニ被仰付候條此旨向々ニ可被申渡候

子二月廿八日

丹波  
町田民部

右同斷

松平修理大夫

此度松平大隱一字落敷大夫父子に御糺問之筋有之萬一承服不致候節は御征伐被遊思召ニ付其節は爲打手其方人數差出候様被仰付  
候間用意可致旨御内意被仰出候事

一討手被仰付候諸侯御名前并御名代等之御名前相略之

大藏  
攝津  
但馬

少將様御事御用被爲在候節之御用部屋に被御出候様去月十六日於二條御城御老中有馬遠江守様より被遊御承知候段御  
到來此旨一統奉承知向々ニ可被申渡候

子三月

過日其方家來共乘組居候軍艦に長州より及發炮候付使者差立詰問致度趣候得共右者御所置可有之儀ニ付使者差立候儀  
者見合輕舉之儀等無之様家來末々迄可被申付候事

長崎製鐵所御借受之蒸氣船下關通船之碇長州臺場及發炮候ニ付懸念之處乘戻り小倉領之内ニ致碇泊候處右船及燒  
失候一件ニ付公武に度御届被仰上厚御評議之上道理明白之以御趣意彼方に御掛合之賦ニ候間人々共通相心得聊動搖不  
致様御沙汰被爲在候段之先速而申渡候通ニ候然處於京都水野和泉守様より使者差立詰問致度趣ニ候得共右者追而御所  
置可有之儀ニ付使者差立候儀之見合輕舉之儀等無之様との趣之別紙之通被仰渡候間一統其旨を奉承知聊輕舉之儀共有  
之間敷候此旨向々ニ不洩様可被致通連候

二月

大藏  
攝津  
但馬

(中略)

元治元年



先月廿六日朝於京師姉小路少將殿刺害之嫌疑を受仁禮源之丞島津織部家來田中新兵衛傳奏坊城宰相中納言様より御達之旨を以所司代家中同伴ニ而右坊城様御宅に被召出其儘東町奉行所に御預ニ相成候段申來候就而者不容易<sup>ホノマ</sup>事柄ニ而御名目ニ茂相係被爲對 天朝御兩殿様深御恐惶之御事候得共昨年來尊王之御忠誠御盡力之御偉業之一同奉承知候通ニ候間此末之所一時之浮説流言如何様致沸騰候共向永年朝廷尊奉之御至誠御卓立之思召ニ候間諸士末々迄疑惑を不生彌御趣意奉没忠勉相勵候様可申達旨御沙汰被爲在誠ニ以難有次第之御事候條一統奉承知候様向々ニ茂早々可致通達候

〔全書〕

三月末

薩州表之儀委細先書御達申上置候通各別事替候儀ハ無御座候得共薩長之間表向之御間隙も有之哉ニ相見申候得共當時之御形勢追々御使者且飛脚被差立候由ニ而内實之何程之御模様ニ可有御座哉右之趣心懸聞籍申候得共相分不申惣旅人之入込容易ニ難成其上昨年騒動後ハ別而六ヶ敷折柄今度長州之飛脚杯御差通ニ相成候儀之如何之御様子ニ御座候哉ニ奉存聞籍申候得共一舛之御模様事替候儀無御座乍併昨年騒動後御隣國より御挨拶之御使者も都而伊集院迄ニ而引返ニ相成長州之御使者ニ而先達而被差越候桂信助ト敷申仁も同様之儀ニ御座候由其後之尙又御取締大舛之御用筋之出水ニ而相濟申候由之處此節之飛脚ニ限御差通ニ相成候儀之何分不安着ニ奉存候付途中ハ城下元之様引返得斗聞籍可申管御座候處一日旅人ハ城下踏出候得之中途より引返候儀之難成御法令之由ニ付其儘罷歸申儀ニ御座候然處申木野郷土噂ニ之長州之飛脚之迎も城下入之相成申聞敷哉追々奉申上候通人心一和之所柄ニ之御座候得共變化之御所置多キ由ニ而如何舛ニも是ト申儀難聞定何様當時之御模様ニ而之御軍備之儀嚴重之御手當筋ニ而前條奉申上候通ニ御座候且又求磨御領之儀ハ一國同様之御交情ニ相成候御模様ニ聞取申候此段書付を以不聞御内意奉申上候以上

三月

遠山屋兵衛

三月某日本藩藤木九兵衛荒木藤七長筑二藩の關係を探り之を其筋に報告す

〔元治元年 尊攘録探索書〕

藤木九兵衛列探索書(抄略)

去ル十二日長府侯より博多油屋利兵衛宅に御使者參着姓名其外聞取之趣一書を以荒増左之通

林喜子利  
熊野九郎

右御使者上下拾八人之内五人長府ハ附人之由

一 附人嶺岡友榎と申仁に出會仕私共ハ筑藩之振ニ而萩山口岩國之模様等種々承申候處當時之山口城に奇兵隊凡五千計も屯いたし先平穩ニ罷在當春以後追々之戰爭都合五度毎奇兵隊得勝利増々壯ニ相成萩徳山長府之同意岩國之于今同意無之堅固ニ相守居申候由

一 長筑者何とか同腹之模様有之其一條を舉候得之嶺岡咄ニ筑藩之御方ならハ長州に何方ハ御上陸被成候而茂差支不申奇兵隊も何之故障無之筑藩之外他藩之上陸爲致不申杯委敷咄承申候事

一 右嶺岡友榎と申者ハ少年之者ニて私共下宿向ニ居候間色々々々まじ宿之様ニ連レ來り前條之通尋申候處少年之事故何之思慮茂ふく大ニ歡ひ頭ニ乗咄候間必實説と被考申候

一 筑前若松芦谷邊より下ノ關に追々通船いたし候間右松本小舟を仕立探索仕候處福岡侯より追々ニ米拾万石計茂仕送ニ相成候由其外小倉領遠在より牛馬余程高直ニ而筑領ハ買揚候ニ付重疊吟味仕候處右牛馬何モ茂長州に仕送ニ相成候由松本見聞之趣承申候

一 筑前領内犬啼山ト申處山中ニ田畑千石計茂有之去秋より御内室様御立退場所ト唱御作事有之候由少し不審之筋有之御

元治元年

六六七



座候間種々探索仕候處全城郭之様子ニ而地利ハ四方岩石殊ニ一方口ニ而重疊要害堅固之場所之由ニ而小倉路通りよりハ直方と小竹村之間より三里程西ニ當り高山相見候處福岡通々ハ赤間關ニ當り二里半程奥木道之由ニ御座候  
但風説ニ筑藩黒田山城杯周旋ニ而加藤司書を以長州ニ指越國許甚及困窮候メ付金子五万兩借用仕度旨相談いたし候處早速ニ承知いたし御困窮ニ候ハ、外ニ五万兩程都合拾万兩直ニ指合申候右之金子ニ而城郭茂築候山深キ意味合も可有之哉ト小倉ニ而上條より承り申候

三月

藤 木 九 兵 衛  
荒 木 藤 七

三月某日尾張紀伊龍野大洲等の諸藩國是意見書を朝廷並に幕府に献す

〔尊攘録諸家建白並御届書等〕

尾州侯獻言

謹而奉獻言候方今切迫之形勢多端難縷述候得共根源者夷患ニ有之掃攘之儀ニ而就而者素より 聖明之 勅意も被爲在今更申上候迄も無之候得共古より己を知り力を量り候を要と仕候へは其御差略も亦不得止儀と奉存候就而者他港之儀は漸を以被遊候得とも先横濱一港之儀は領閉御決議御尤ニ奉存候若此御決議相動候而は國國之人心治り兼可申候長州之御處置も其惡を御去其情を御恕被遊畢竟内亂を不招外夷之術中ニ不陷様被遊度儀と奉存候且又諸藩之形勢富強は稀ニ衰弱は多此儘ニ而者逆も外夷之輕侮難禦事と奉存候尤何れ之領主ニ於ても富強を不願者は無之精々御世話仕候へとも何分ニも昇平年久敷自然遊惰奢靡習染甚深く風を成し居改革之一新行届兼倫安ニ而已流易此姿ニ而は往々奮發之程甚無覺束奉存候間此機ニ被乘諸藩嚴敷御戒飾被爲在斷然革弊實素節儉一意ニ養力敵愾之義勢ニ趣候様被爲在并諸藩之疲弊を御厭奔命ニ不勞様御回復被遊只今在京之輩も帝都御守護浪花頭歴は嚴重之兵備ヲ被留其餘之而々は寸刻も

早く御暇賜り國に就キ力を養ひ 叡慮遊奉仕候様仕度奉存候依之右之誦被命度儀に奉存候是等之儀とも不肖之微臣申上候迄も無御座素より御廟算御十全之御事には可被爲在候得共此度拜 國之砌固陋を忘れ伏而赤誠ヲ奉敷候微臣誠惶誠恐頓首敬白

三月

慶 恕

紀州侯建白

松平大膳大夫父子に御糺問之所有之萬一承服不致節は御征討も可被遊旨先頃御内意被仰付候ニ付其節愚存申上候處尙又 宸翰御布告ニ相成罪責暴露就中七卿誘引監使暗殺等之儀其罪固より不輕事ニは候得共深當今之勢を審ニ仕候處夷情不可測之時ニ當りて藩牆之禍を醸し候儀實ニ以不容易事ニ奉存候間何分ニも御寬典ニ御處し被遊候様仕度奉存候古より華を以華を治メ夷を以夷を打候を上策と仕候處萬一御征討之儀ニ相成候へハ彼夷情より見候時は却而彼か上策に陥り□莊子之功は彼ニ被收蚌鶴之禍は自ら取と申ものニ相成天幕之恩威ともに挫け諸侯齒寒之懼を懷き候様可相成歟と杞憂仕候今若彼一門初を御糺説有之一時疎暴之罪不輕と雖畢竟夷を攘之志よりして相生候儀ニて却而今日夷の上策之地をなし 天朝幕府之恩意に背キ隣國同州と怨を結ひ祖先以來之儀を空敷いたし皇國之生靈を苦候段定而本意ニ有之間敷儀を厚御誨諭有之隣國同州にも被仰付説解せしめ一度ニて承服不仕候ハ、二度三度ニ至り候而兼而名義を主といたし候國柄故承服可仕候夫にても承服不仕節は其時之御所置可有之事ニて御征討之儀ハ前以被仰出候筋ニは有之間敷歟と乍恐奉存候元來長防二州之衆ヲ持み居候事故御内意自然承り込候ハ、承服仕候者も承服なり難き勢とも可相成哉就而は何卒至誠之文徳を以頭傲を感悟するを御標準と被遊候様仕度奉懇禱候頓首謹白

三月

脇坂侯公邊に言上之寫(龍野藩)

私儀去月十一日以御封書不容易御内命早速上京仕候處猶又御沙汰ニ付乍恐愚意之趣奉建白候客歲攘夷之儀被仰出候ニ  
元 治 元 年



就而は列侯は勿論下草莽之士ニ至迄感奮興起仕既ニ薩長斷然及一戰候段實以神州之御武威相輝候千歲之御機會と奉存候和戰之儀ニ付一時議論蜂起過激之輩も可有御座候得とも斯る危急之御時勢遂一御糺問を被爲遂候てハ人心彌洶々海内分裂之基とも相成必然外夷之術中ニ陥り可申と奉存候何卒紛紜之儀は惣而御寛典ニ被爲處攘夷之御發令聊御變動無之園國之志を纏メ全力ヲ攘夷ニ被爲盡候ハ、自然御國體相立可申哉ニ奉存候尤御尋ニ付不願忌諱愚存奉申上候以上

三月

脇坂淡路守

〔採獲録〕

大洲藩主幕府へ建議之事

此度御國は見込之處建白可仕候様之御達奉議承候雖然暗愚薄識之私如此重大之御事柄中々以可申上力量無之候へ共千慮一得之言ニ從ひ不願斧鉞之誅奉獻野人之芹候凡國家之安危兵之勝敗は人心之和不和ニ有之候處戊午以來於 朝廷幕府之御間柄御異論も有之哉ニ承及申候御異論有之候而は第一御國體ニも關係仕且は天下之人心不和之基本とも可相成哉と深奉恐懼候近比水魚之御親み有之候由承竊奉感喜候猶此上 朝旨御遵奉被遊人心御歸向候様之御處置奉仰願候且於大樹公乍恐今暫御國是一定人心一和仕候迄は京攝之内御滞在被遊度奉存候近來天下之諸侯抱危疑之心如蹈薄氷罷在候殊ニ於長藩は去八月以來過激之舉動有之候ニ付入京御差止ニ相成候其罪科之儀相辨不申候へ共眼前洋夷之大患を差置於御國內異論有之候而ハ人心益動亂仕候何卒出格之思召を以御寛典ニ相成速ニ御召寄情實御尋問有之候而至當之御處置有之度候浪士輩嚴敷御吟味有之候而は却而死地ニ陥り多少之大患を醸成候も難計奉存候此輩從來慍慍敢死之士既ニ父母妻子ニ離別爲皇國擲身命候者ニ御座候間是即皇國之元氣に御座候中には御制禁を相犯疎暴之舉動も有之候へ共畢竟御國體之廢壞を悲み洋夷之狂猖を惡候赤心より激成仕候儀ニ而亂臣賊子と不可同視哉ニ奉存候餘り切迫候而ハ和州但州等之異變又々起り可申候何卒當時京攝之間ニ潜居仕候者御呼出ニ相成攘夷之先鋒被仰付候へ者感戴之餘り奮前勇往可致報効と奉存候昨來天下之諸侯陸續と京師ニ御召寄ニ相成候儀ハ御國是御一定之御爲と奉存候乍然京師迄は

遼遠之國も有之且趨從多分召連罷登候ニ付冗費不費必用之軍備は却而手薄ニ相成申候何卒御用濟次第速ニ歸國被仰付寸分之國力を相養緩急之節忽御用ニ相立候様之御沙汰有之度候是亦懷諸藩和心之御策略哉ニ奉存候近來京師並諸國物價騰貴仕園國之諸侯遂ニ困迫必死之地ニも陥り可申何卒罔利之姦商を嚴敷御吟味有之度候左候ハ、人心一和可仕候右申上候條件之大綱相立諸藩一和仕候上斷然と攘夷御一決ニ相成上は奉安 叡慮下は天下人心之望ニ從ひ以六十餘州之全力御一掃被遊候得者 皇運御回復ハ不及申幕府之御武威も區宇ニ震曜可仕と奉存候愚昧之私敢言仕候も恐入候へ共赤心御恕亮御探擇奉願候誠恐惶頓首再拜

子三月

加藤出羽守

四月朔日幕府松代藩士佐久間修理に海陸御備向手附屋を命す

〔文久三年  
京都諸扣〕

四月朔日

和泉守殿御渡

大目付に  
御目付

眞田信濃守家來

佐久間修理

海陸御備向掛御屋可申渡候御屋中御扶持方二十人扶持御手當金十五兩被下候尤海陸御備向掛り之面々可被談候右之通申渡候間可被談候事

四月七日

元治元年



四月二日日本藩政府は更に軍備充實の必要上省略並に國益筋の件に關し藩士の意見を徴す

〔安津免久佐〕

方今不容易時勢ニ付而ハ御軍備專之御覺悟を被盡格別之御省略被 仰付置候得共近年不補得止莫大之御出方面已被 差湊御借財打重り危迫之御運ニ成行候ニ付此上難被略儀をも被略聊たり共御國力を不被養候而ハ難儀御場合候間御省 略筋并御國益筋之儀心付之次第者不憚忌諱書付を以早々可申出旨御用番被申聞候條可被得共意候御勝手向御立直之儀 ニ付而ハ被 仰出之趣文久元年八月書付相渡置候通ニ候處見込之趣今以達無之如何之事ニ候間一己々々之書付封印を 以當月中可被相達候若見込無之候ハ、其段も可被届候以上

四月二日

御 奉 行 申

四月二日長岡護美伊達宗城と共に烏津久光を訪ひ請暇のことを談ず

〔鶴鳴餘韻〕

二日の夕暮に長岡良之助殿と共に久光公を御訪問ありき良之助殿の話にては一橋公は今後何事も尹宮の差圖を受けて 勤くと申され尹宮も今後一橋公に度々来て貰ひたしと望まれて尹宮の幕府負にならるゝだけ兩者の間親密とありて 愈々公武合體の實が擧りしものと見て然るべし就ては我々も安心して在京諸侯にも近々御暇の出る時期が来るふらん とありしかば此上は二條近衛の二公を説きさへすればお暇の志願も違すべく近日一應二條殿下尹宮山階の兩宮徳太寺 公本どのお出會を願ひ御暇の御評議を請はん但し朝廷に於て火急の御用召あらば早速上京するは勿論ふりと申合はさ れぬ

夫より樓上にて三公(宗城久 光護美)愉快に對酌せられ何事をも腹藏なく語り合はされたれば近來稀ある愉快を極められしと あり席上長岡殿は久光公に向つて薩摩は一體宜しからざる考を抱かれ居るより自分の領地内の天草を懇望ありて首尾

よく之を取らんとせらるゝよしふるが如何ふるお考へふるやと訊ねられしに久光公は左様に聞かれては答へ様かふい けれど先年領内疲弊して困窮せる際内々の話ふるが平岡が何處か所望するが宜しからんと言ひしまゝ自分が日頃望み をかけたる細島を所望したるに平岡がいふには細島は肥後で切望して居らるゝ様子ふれば彼處は然るべからずと其 まゝにありし事あり大方細島を天草に拵へて貴藩と離間せん策ふるべしと答へられしかは長岡殿も左様申さるれば細 島は實際欲しく思ひ居たりと白状せらる宗城公も然らば拙者も何處か所望すべし願くは大洲と松山とが欲しきものふ りとて孰れも大笑ひせられたり

〔續再夢紀事〕

四月三日夕方中根親負長岡良之助殿の許に至る長岡殿が中根の酒井の内の遺を遺さるゝ様と申越されし故より長岡 岡殿申されしハ昨日宇和島老公と共に島津侯乃許に會集して歸國程合の事相談し及び明後五日三人同道二條殿の許 に赴き歸國御暇を願ふ事決せり過日來ハ大藏太輔殿の御出勤を待ち四人同時御暇を願はんとの心組にて己其御 約束及ひたれと彼是見合せ居り機會を外してハ不都合故先以て三人にて願ふへきと決せしより尤此程一橋殿が因備 水本と頼もすまハ暴説を唱ふる事おれとも是らハ自分一身引受鎮壓をせけれハ御懸念おらせらる様尹宮も申上 へき旨依頼せられし故昨日態と宮の許に參上して右依頼の趣を申上し尹宮御了承ありて一橋を左程迄に擔當する事ふ れハ諸侯御暇を仰出されて然るへきふりと仰らまたまや無論願の如く御暇仰出さるへきと備前侯ハ來ル十日頃出 發歸國のよし薩摩及び拙者共ハ同十五日頃出發の心算なり又他所用ありて明日尹宮へ參上すへけれハ其節尙又大 藏太輔殿の御内願筋を速に決せらるゝ様周旋をへしとの事ふりき極密備忘

同日伊達殿が書翰を遣さる昨日遣えされし書翰の返書ふり左の如し書翰録  
拜讀如貴命晴暖之候愈御安康奉大賀候御辭職一條強情公(一橋)御内示ニ而ハ昨日 朝議被爲在候由一日も早く御決 議御渴望之趣御尤千萬奉存候定而例之御名目を被付候事にて不決哉と奉存候 大内之圖御恩借被下忝相濟候ハ、早

元 治 元 年

六七三



々返呈可仕候扱又御察之通昨夕ハ大芋邸へ長良(長岡)と集會大快愉ニ而(鳥津)モら大盃一ツ頓飲之仕合御察し可被下候御暇之敷願ハ過日御約束ハ貴兄御出勤之末御一同と申上候處尙昨夕ハ未だ御願濟も不相分一日も早く及敷願置候方可然素々御同意ニ付其所より三人より申上可然ニ談決仕候依て明後五日兩殿下兩宮陽明御父子徳大寺御參集相願候都合ニ候間此段申上置候長良昨日強情公を頼ニ而尹宮へ出候處大ニ強ミ都合宜しく御互ニ御暇相成候而も不苦御口氣と申居候萬々拜調と仰略頓首

首夏三日

伊 豫 守

大 藏 太 輔 様

尙今日彌阿州下野杯御暇參 内之由如何之御都合ニ候哉拜領物相分り候ハ、一寸明朝も伺度候以上

〔子爵長岡家文書〕

華翰拜誦仕候清和之候愈御勇健奉并賀候昨鳥者相互ニ愉快之論議萬々奉謝候乍去失敬之次第海嶺所希陳者貴約之通高調被附下奉感佩候扱拙も巴調差出候間御一笑可被下候何を明後日者集會可仕餘事期拜晤候頓首

初夏第三

良 之 助

大 隅 守 様

几 下

二仲御白玉奉祈候且明後日之處愈相極候ハ、又々一封可給候不盡

四月三日本藩奉行鎌田軍之助を小倉に遣し出師に關し豫め準備せしめ且つ時局の狀勢を質さしむ

〔尊攘録御建白御國議〕

子四月二日

鎌田軍之助爲御使者小倉に被差越(四月三日出立)候節相渡候稜書 備前殿執筆也

- 一 御内命付而之萬一之節ハ 公義より御指圖之旨も可有之候得之小倉へ出張と申ニも相成候ハ、最前も被仰越之通兵糧馬之飼料等陳場等之儀其外御相談も可有之宜く御頼被成置候事
- 一 公義御軍艦御拜借被成置候事
- 一 彦山一件其後之都合之事
- 一 彼方様ニ而近來聞込之趣且御見込筋等下關中津其外形勢之事

〔小笠原備前日録〕

四月二日 晴陰

朝、鎌田奉行、欲奉使而以明日至小倉、故 公召而見之、

四月某日防長探索の爲め派遣されたる本藩人本田富右衛門津野田助之允は本藩脱走宮部鼎藏川上彦齋黒瀬市郎助等の消息を報告す

〔尊攘録探索書〕

元治元年甲子年

子四月

長防聞書

一 下ノ關神宮前村屋清藏娘鶴當年十七才容儀も相勝を居申候此者之直話ニ御國脱走之河上玄齋(マ)とハ兼々呢懇ニ而先ツハ兄弟同様之間柄共も可申此間より玄齋ハ因州へ御使者ニ罷越居候ニ就鶴も日操致し待かね候風情ニ相見へ申候扱玄齋ハ當時軍艦奉行相勤七百入計之支配致居申候由當二月十二日より奇兵隊先鋒隊合戦之節玄齋物見として罷越候處伏勢

元 治 元 年

六七五



十人計より被取巻候得共相働キ三人之首ヲ打取殘リニ之手負せ引取候ニ付只今長防ニ而之玄齋ニ越候武勇之者ハ無之候と何も尊ミ申候由ニ御座候且又三條様より玄齋に拜領之矩冊有之候を鶴に遣し候を同人より取出シ見せ可申と立上り候處ヲ其場に居合候者より差止申候間其儘ニ差置申候

一諸藩脱走之者共昨年之冬までハ藩々より被召歸候ならハいつまも罷歸候筈之處當時ニ至り先ハ一切其儀相成不申候得之御人數被差越被召候共手向ひ致し候完ニ相成候由ニ御座候

一黒潮市郎助事竹永次郎と變名當時シ令司ニ而三百人計支配致居山口表に罷越居申候由ニ御座候

一下ノ關に病氣ニ而打臥居候者兩人壹人ハ國友某(名常吉宮部 罷藏從伊也)御國許ニ而之御家中若黨ニ而御座候由壹人之余程間難候得共變名仕候間相知不申其外山口表に罷越候面々聞取左之通

一宮部罷藏安田喜助其餘ハ京都打死且之外國に渡海ともハ致不申候哉相分兼申候宮部弟大助も居申候由ニ御座候得共段々承籍申候處類に入墨之跡も無之候由承申候間如何ニ而御座候哉相分兼申候

一黒潮市郎助弟茅野嘉石衛門事山口より下ノ關東光寺に急用ニ而三月廿七日早打ニ而罷越村屋清藏方に參居候處に私共行懸り候間姿ヲ隠シ逃出し同所向に隠レ村屋清藏妻を度々招キ私共罷越候用向承合申候由ニ而右妻より用向之處之廻船懸留ニ罷越居候由申入置候得共安心致不申其後追々呼寄色々問合せ申候故御出之御方ハ御知ル人ニ而も御座候哉と問合申候處右之人躰之肥後津野田助之允壹人之知不申と噂仕候間直ニ其趣私共ニ申聞候得共其儘差置暫ク滞り居候處段々煩敷儀差起り夜九時分右妻より私共へ此許之一刻も早ク御立除被成候様噂仕候間先時とは相違致夜半ニ至立除ケとハ如何様之事情哉と相尋申候處奇兵隊より問者之目入仕候而之只今迄壹人も不殘打取既ニ昨日も隣家ニ而殺害被致候間早々御立除無之而之御一命も甚々無心元と申居候處猶又急ニ參り候様申來候間私向方に行不申内ニ裏より拔候様頻ニ申含候ニ付俄ニ支度仕忍出候(云々下略)

長防外聞として出張せし歩御小姓木田富右衛門津野田助之允報告ノ内

四月三日日本藩は汽船運用に關する要件視察の爲め關八郎助山川龜三郎を肥前久留米等に派遣す

〔文久三年他國狀扣〕

一肥前

筑前 御家老中

久留米

四月三日

本文添狀往來一同御奉行より關八郎助に差遣候事

一筆致啓達候各様彌御堅固可爲御勤珍重存候然之此御方に蒸氣船御買入之筈御座候處乗方を初一躰取扱之様子不案内之儀候處其御許様ニ之兼而御所持付而之懸り御役方之衆に彼是之様子御問合爲申度仍而御家來關八郎助山川龜三郎ニ申者差越申候付何卒其御役方之衆に御引合委御教示を請候様爲仕度候此段御頼爲可得御意如是御座候恐惶謹言

〔尊攘錄御建白御國議〕

子四月

關八郎助山川龜三郎に相渡候稜書

一役員之事

付兼役等も有之哉之事

一役々給料之事

但席ニより違も可有之哉之事

一乗手雇入等之事

一船中ニ而之法則減々ニより階級等も別段ニも相定居候哉之事

元 治 元 年



但共衛之高下ニより進席等之事も有之哉之事

一船方ニ付而之金銀其他之事も別局ニ而も兼而相立居候哉之事

一入手等も年々絶中間敷何品杯損安杯之儀或之右ニ付何品兼而用意杯申候儀ハ無之哉之事

一石炭ハ上中下有之如何様宜との事

一惣而一年之入費高如何程位ニ有之候哉之事

但往來度數手入之大小ニもより可申候得共其大略之事

一航海假令ハ大坂迄之往來之入費高等之事

但空船ニ而ハ船之都合惡敷候哉左候ハ、石ニ而も積候哉之事

一油ハ鯨油を用候哉

一積荷等を以御船一件之入費ハ被取賄候哉之事

一商船ニ而も大炮打可申敷挺打候而も子細之有之間敷哉之事

一食料之仕方之事

但階級ニまたるひ候筋も可有之哉之事

一長崎表ニ而船乘御雇ニ可成高熱<sup>ホノノ</sup>之者も可有之哉之事

一高浪船を打越候様之節甲板上之人數打落サレ不申仕法杯ハ無之哉之事

一船職付様之事

但所々ニ而御究りも可有之哉之事

右大略ニ付願曰都合次第委敷聞取之事

四月四日筑波山の激徒故水戸齊昭の神位を奉じ日光山に詣てんとて野州小栗村に來泊し尋て宇

都宮に向ふ

〔風聞書〕  
元治元年正月

四月十日聞取

森井惣四郎

戸田越前守様差出之書付寫

一昨五日水戸殿町奉行之由田丸稻之右衛門と申者私在處野州宇都宮晝休ニ而白澤宿泊之由先觸參着候趣道筋者筑波邊  
カ小栗村と申に出ル四日夜日光道中石橋宿泊ニ而私城下カ喜連川に通行相成不順之繼立故不審ニ存居候内石橋宿役人  
共カ城下貫日改所出役所に別紙之通申候趣其筋役人共申出候間益不審之儀ニ付役人共見届罷出候様申遣置候處其内右  
同勢一同着ニ相成水戸源烈殿之神主を戴候輿を先ニ立白張着ニ爲昇館鉄炮ニ而人數百五六十人程城下傳馬町本陣に着  
右近邊五軒旅宿相定候趣故其筋役人爲應對差遣先方齊藤佐次右衛門と申者應接ニ罷出候間通行之子細相尋候處右者水  
戸小石川館と申に相集り候者ニ而今般決心之上捷夷之志願ニ而多人數相集候由相聞候間水戸町奉行田丸稻之右衛門齊  
藤佐次右衛門と申者ニ而右取靜之爲出張致シ申論相宥候得共一向不相用押出候故是非共引留度存候得共何分氣込猛烈  
ニ而不心も是迄附添罷越候由猶喜連川に通行之先觸差出候得共實ハ何方に罷越候儀も當定無之喜連川家ハ源烈殿之公  
子之談合有之候間不取敢無據同所先觸差出候事ニ而實ニ恥入候始末氣之毒ニ存候由申聞候右之次第故同夜白澤宿泊  
者相定候得共城下は一泊之儀頼申聞候由然ル上ハ疎略之所業等爲致世話相懸々間敷精々沈靜方可致由猶一同死地決激  
烈之者共万一の儀ハ兼而請合兼候得共何分ニも盡力沈靜候間氣遣致間敷申聞且有志之者兩三人重役に調度段申出候得  
共其儀者先差留置候由是又佐次右衛門申聞候右同勢所々ニ而武器杯多ク買求候由相聞候段在所役人共カ申越候右之始  
末柄ニ御坐候故何時不虞之儀無心元夫々手配精々申付置候得共此後如何様之儀出來可致も雜計御坐候猶追々可申上候  
得共先此段御届申上候以上



戸田越前守

別紙

乍恐以宿繼奉申上候

當御代官所野州都賀郡石橋宿役人惣代問屋新右衛門奉申上候昨四日差懸小栗御泊ニ而水戸様御内田丸稻之右衛門様と申御先觸主用之趣ニ而臨時御旅宿被仰付尤御同勢之内駕籠或ハ馬上歩士共具足其外鉄炮鎗等持參致し中央ニ者從二位大納言源烈公神輿と申前に札を懸嚴重御行列宿方之儀者上之川村栗村殿繼來誠ニ當惑仕候併御同勢百五十人餘と相見へ繼夫百五十人之儀相成聊以下々非分無御坐候得共松木在小栗村當宿止宿中可罷出旨廻狀其最寄迄道程相對賃錢御拂ニ相成申候右之段早速御届可申上處差懸り人馬手繰方取込罷在延引ニおよび候間御届申上候以上

元治元年

石橋宿問屋

四月五日

新右衛門

年寄

定右衛門

宇都宮貫目附御懸

野中修平様

〔尊攘錄探書〕

元治元年甲子年  
子四月八日

日光道中石橋宿より支配所御代官福田所左衛門役所に相届候書付  
乍恐以書付奉申上候役人惣代問屋新右衛門奉申上候水戸様田丸稻之右衛門様當月四日小栗村御出立ニ而宇都宮御泊之

御先觸ニ御座候處俄ニ同日當宿に御泊ニ相成御同勢百七拾人余御本陣其外下宿五軒表門に之御紋附之幕を張玄關に之葵御紋附紫之御幕を張内玄關ニ白地之幕を張御行列眞先に切火繩鉄炮左右ニ貳拾挺中央ニ從二位大納言源烈公神輿いつせも白丁ニ而人足ニ爲相持候鞍置馬三疋率立其餘鞍置馬六疋宿方より差出候荷物之儀者御長持壹棹凡九拾人程御同勢之内乗物壹挺引戸駕籠壹挺乘駕籠四挺神輿其外分持四宿宿駕籠四挺人足五拾壹人馬十二疋不殘賃錢相拂候而其餘四拾九人鎗鉄炮并笠持手代り共無賃ニ而差出大將田丸稻之右衛門様遊軍惣轄ト印山田一郎様木村久之丞様其外御同勢何せも白胴着ニ而にまきを懸ク割羽織袴着用中間躰之者壹人も無之殘らす白綿ニ而鉢巻致し陳笠をかふり帯刀ニ而鉄扇鉄棒を持行軍隊ト申帳面を所持百七十人之内全侍躰之者八拾人程相見に其餘之俄ニ日雇新入之躰ニ相見に申候御旅宿中權威をふるハ同日五ツ時頃當宿御出立ニ而宇都宮通り白澤宿泊り之御先觸差出尤御旅籠料之壹人ニ付銀貳匁五分辨當料銀八分都合銀三匁三分御拂御座候此段御訴奉申上候以上

日光道中

石橋宿役人惣代

問屋

新右衛門

四月八日

福田所左衛門様

御役所

右一件ニ付而之近々日光表に御門主様御登山之處御延引

〔尊攘錄探書〕

元治元年  
子四月十一日聞取

元治元年

森井惣四郎

六八一



一今度水府或ハ諸藩浮浪之徒攘夷と唱野州宇都宮横行いたし候隊仇之次第左之通彼等之評議三ツ相成居候由先一ツニ  
之水府御家老戸田銀次郎を打取候て横濱に懸り候歟又之日光社に参拜いたし直ニ横濱に押懸可申哉無左之京師に押登  
可申歟と三議ニ而御座候様承申候得共應説を唱へて人及惑ハし候歟實以三議ニ而御座候歟是又未タ委細ニ之承不申候  
(隊仇之次第略す)

〔木庭文書 加屋齊賢編 私編能弘道漫記〕

於筑波山尊攘奮起之義士分職姓名等之事

大將田丸稻右衛門 水戸殿ニ而町奉行致候者

栗田源左衛門 鈴木虎太郎 黒澤新一郎 川崎九兵衛 武藤傳四郎 鈴木與八郎 高安秀木

輔翼齋藤佐次右衛門 馬廻り弘道館訓導

脇部熊五郎 芹澤介次郎 宇佐美宗三郎 濱野松次郎

使番杵山三郎助

小林幸八 栗田源左衛門 渡邊剛藏 此人辛酉東禪寺小

伍長姫路新段組より出物見徹ア コ、ラ原書ノマ、

木村久之允 千葉貫一郎 中村源五郎 木村秀之助 柳生郡之助

總裁藤田小四郎

竹田春八 岩谷敬一郎 邊田虎吉

遊軍總裁戸田飛彈 宇都宮家老職之者

木村六郎 村垣誠一郎 前田俊之允 登時之助

右同田中震一郎

千葉太郎 東直次郎 佐々木權藏 小文泰助 小泉豊

伍長三橋半六

豊田彦之允 長谷川勝藏 室町和太郎 西島軍司 長谷川勝次郎 大石重太郎 大石桂助

鈴木重五郎

右同田中幾彌

鈴木猛 横田藤次郎 鈴木恒太郎 幕府旗本

使番山田一郎

瀧平主殿 久留米生上所聞將同名異人カシラス 池尻嶽五郎 伊藤右荒

先發小田熊太郎

梅村與一郎 邊田虎吉 田村秀太郎 千葉小太郎

小荷駄奉行長副飯田郡藏

横田藤三郎 飯田治三郎 堀兵助 谷林與右衛門 後藤太三郎

伍長大幡外記

原七郎太郎 鈴木新藏 江木戸良哉 深谷四郎 藤田中務

伍長松脇後左衛門 薩摩去春脱走人

二木清左衛門 川畑新兵衛 薩 高田與助 毛利藤右衛門 中野連 高野矢之助

伍長小橋新作

金田又右衛門 酒井金右衛門 川際勇太郎

元 治 元 年



調練奉行山田一郎

戸田彈正 小林幸八

石田總助

朝倉友信

天野卓治

佐藤繼助

後藤周吾

西山謙之助

本砲頭取服部本英

水田謙治 岩田武志

二本清右衛門

前江元右衛門

松延宿三郎

松脇治右衛門

石橋榮三郎

後藤兼次郎

此外農兵數千人

〔風聞書〕

水府果激聲立候文通之寫

去ル三月廿日比水戸御領分小川玉造と申邊り郷土浪人等相集り居候而横濱夷人館に切込可申由相談仕候處他國浪人共追々承り及馳集凡貳千人程候由右者兼而攘夷領港之儀公邊ニ而御下知手間取を候と申を如何ニ存頭立候もの共水戸家武田耕雲齋方へ催促ニ及候處何をも數月相待候様ニと申論し候處度々の事ニ付武田も事ニ困り返答も不仕由之處最早待兼候由ニ而烈公是ハ老公之事に對し恐入候間是非攘夷可致旨評議之上烈公之神主ヲ作り興ニ乗セ右を昇セ日光に參り神君之神託ヲ伺候上ニ而愈横濱表に切入可申旨ニ而右貳千人之内凡百五拾人程宇都宮迄參り此節本陣ニ止宿致し罷在候由尤御領主ニ而被差留候由

一同御藩水戸人ト久貝一之進と申ハ此度江戸御屋敷御指南被仰付家内取片付として歸藩之上出府致候途中若芝と申處ニ浪人共七八十人相待居願筋右之候間江府殿様に御取次致吳候様相願候ニ付右者不承知之趣ニ而再應申論し候處馬方引落し切殺し十六才ニ相成候若黨迄切害ニ及候由右之次第等 公邊に相聞へ候ニ付早速御手配等可有之處同御藩立原朴次郎と申人文武之聞へ有之人此節御徒上頭相勤居り右一條ニ付被仰付早速出府いづも水戸家ニ而取領不申而ハ不相濟と申被是周旋いたし候内宇都宮戸田様急御暇ニ而一昨日御出立右朴次郎御途中迄馬上ニ而追付何敷中立候次第有

之右大意ハ是非一手ニ而取領始末仕候間御急迫ニ被成下間敷旨中立尙又江戸に立戻り千葉周作門人同藩ハ勿論入塾人並諸藩無初之門弟拾人餘り同道取領として今朝出立候由

一水戸御別家松平大炊頭様御本家被仰立御暇ニ而宇都宮へ御出向之山右御名代ニ而御取靜メト申事之由

一右浪人共攘夷領港を名といたし候得其實ハ困窮ガして蜂起いたし候由右ニ付軍用金として差出候様申含所々物持共方金子多分爲差出凡貳萬兩も取立候由頃日其段御地頭に届御地頭方 公邊に御届ニ相成候由此儀之實ニ差困り候村々有之訴訟ニ及候由

一高遠内藤様日光廿日之御名代被 仰付置候處右一條ニ付御用濟候而も暫之間同所御警衛被 仰付候ニ付平常之御供人數之外ニ拾人三拾人御徒士貳拾人大砲御貳挺ゲベル三拾挺上下凡四百五拾人程ニ而一同御進來ル十五日御發足之由

一浪士共三手程ニ分を金錢取立候由馬拾人足八拾人之先觸ニ而横行ニ噪き歩行之山一手は筑波山御領中ニ屯致居候由右様ニ而も土浦等間御領分に參り不申候由

右之通之書附手入候間寫差出申候以上

子 四月廿二日

田 中 彦 右 衛 門

四月五日長岡護久歸國の途次鶴崎に着す

〔機密間日記〕

一筆致啓上候太守様益御機嫌能被遊御座奉恐悅候澄之助様彌御平安先月晦日室に被成御着候迄之御儀者同所より申上候通御座候同日八時過波奈之丸に被爲召無程御出船夕七半時過播州坂越之湊に御船繫去ル朔日曉七時同所御出船其後段々御渡海之處同日夕八半時過豊後佐賀關湊に御船繫今曉七時同所御出船晝九時過鶴崎に被成御着船彌以御平安御膳等御快被召上重疊目出度御儀奉存候明日者四半時之御供揃ニ而當所御發途來ル十日曉七時之御供揃ニ而大津御發途

元 治 元 年

六八五



熊本被成御着管御座候當所より御郡使立候付此段爲可申上如斯御座候恐々謹言

四月五日

清田新兵衛  
朽木内匠

大木織部殿

以下略

〔文久三年の慶應四年迄御書附并御觸達等之扣〕

澄之助殿去ル五日鶴崎に被成御着明後十日曉七時之御供揃ニ而大津御發途熊本被成御着管之段御到來有之珍重之御儀奉存候此段組支配方に茂可被達候以上

四月八日

平野九郎右衛門

御目附衆中

四月五日長岡護美尹宮二條家等を歴訪す

〔子爵長岡家文書〕

朶雲拜展愈御清安奉賀候扱御書中之趣委細謹承昨日早速 尹宮に家來差出申候處暫時隙取候由ニ付今朝小子參殿申上候覺悟ニ御座候尤小子モ尹陽銅に參中候間可成丈可申上歸館後尺素獻呈可仕候且明夕十之丞共參り候様愈被仰付可被下候伊豫守殿大隅守殿被參候ニ付猶更愉快之義是非參り候様可被仰付尤時刻ハ八ツ半過方願候也頓首

初夏第五

良之助

南越賢兄

机下

二仲御在宿ニ而御自由之次第御浦山敷奉存候不盡

〔全書〕

〔長岡護美の島津久光へ〕

清和之候愈御堅剛奉賀候頃日ハ登樓愉快之至御座候陳者今日只今より尹宮初へ拜話仕候付テ昨日翠公より御書中之趣聽承仕候扱明日午時過より拙館ニ御入來被下候様御話も申上度候間御差支無之候ハ、御入奉願度艸々頓首

初夏第五

良之助

双松賢盟

机下

二仲昨日者一藏より今日之都合御爲知被下万々奉謝候不盡

〔全書〕

寸椽謹呈御清安奉賀候今日尹宮二條内府公へ罷出申上候處御承知之趣ニ候間爲御安心中上候御返詞ニハ及不申候早々頓首

初夏第五

良之助

大兩守様

机下

四月某日一橋慶喜は曩に禁裡御守衛總督攝海防禦指揮の任を拜したるを以て麾下を諭して士氣を勵まし言路を開く

〔尊攘録諸家建白並所書等〕

元治元年

六八七



元治元子四月

一橋公御直書

我等不學短才之身を以天下之重任後見職汚候事既ニ三年身自反求ニ及ヒ候處今日之形勢至候事全我等徳器不相應故ニ深く恥入別而奉對公武恐縮無此上存候殊ニ將軍家ニ之御英明日々被爲涉萬機親敷御指揮も被爲遊折柄重職相汚可居事ニ無之ニ付再應御免奉内願候處此度内願之通被仰出誠ニ以安心難有奉存候然ル處將軍家御願之御旨も被爲在不測も以聖慮禁裡御守衛總督攝海防禦指揮蒙且勅意遠奉精勵可致様分而台命も被爲在候次第一身ニ取り冥加之至リニ候得共一同承知之通不肖之我等元より兵食乏身分を以右様之大任相蒙リ候筋ニ無之候間幾重ニも御免可願答ニ候得共今不容易御時節於公武深く御配慮被爲在候折柄重疊固辭致候筋ニ無之依之身命を抛報効之心得を以御請申上候就而之自今已後我等一同と共に怠惰因循之舊習を去り無用之雜費を省キ賢を舉能ヲ使ヒ人々其職ニ應し上一躰合心戮力シテ今日之危急を救ヒ政道一新士氣奮發守衛總督之職掌を不汚天恩幕命之辱キニ背キ不申様致度存候ニ付而之我等言行政躰を始其餘何事ニ不寄銘々心附候事有之候ハ、忠言極諫聊も忌諱不憚申立候様致度候也

子四月

四月六日勝麟太郎長崎より歸府の途次熊本に泊す

〔小笠原備前日録〕

四月七日雨

澄公子以五日到鶴崎、十日當至、熊府之報至、故以九日當速賀、○昨夜、以池部啓太長崎丸船之事、欲借於官之意、問勝氏、故朝前、來而告其話、○井上嘉左衛門、依往而令問勝氏之所見、天下之事、及外夷談判之事、昨夜至問監察能勢金之助、人亦逢井上而共話、云々○與書牧多門介、長崎丸京而決乞于官之事也、



〔海舟日誌〕

四月六日

熊本着肥後侯より使者あり

當今形勢如何且海外の事實を問はる答云外邦人は時宜道理に明成り故に逢接の際我虚言を以てせず直言飾らざれば必ず談判かつて苦心なし

皇國人は皆虚飾且大義に暗らし 天下の勢回旋すべからずと云々 池邊龍太使として來訪 御軍艦拜借の内話を談す 龍馬を横井先生方え遺す

四月六日日本藩嘉悦市之進京都より書を在藩の社中に贈り幕府専ら威權の維持に力め獨力時局の收拾に當り他の幹施を厭ふの色あるを以て諸侯多くは退京傍觀せんとする者あるに至りしことを報す

〔男爵安場家文書〕

明日此許御日脚被差立候間一翰拜呈仕候取紛前書略文

一先生御申付之一件早速山田列面會囁合申候處皆々不怪喜申候然處今日之勢又々變動甚六ヶ敷相成居如何參り可申哉誠ニ懸念之至ニ御座候時情荒増左之通

一公義之御趣意愈以幕威ヲ不落之一途ニ有之諸藩を下し一手ニ而万事爲スノ趣向也右ニ付趣向通之人物一兩輩出候而公武之御間ニ周旋し隆越等を離間し候ニ付 公も隆を外ニし候故言用られざる勢ニ相成越も同様心有ル國々之何方も右之通ニ相成候ニ付無致方引拂之論起り暫ク觀望之積ニ而御座候右之通之勢ニ而中々六ヶ敷囁合如何相成可申哉懸念此



事ニ御座候薩ノ手出さへ仕候得ハ御見込通困窮之折柄ニ付十二被行候得共手出不申處ニ而之餘程六ヶ敷併此節ハ社中申談全力を盡可申心得ニ御座候然處良之助様御歸國も來ル十五日比ニ相決し居左候得之私儀も又々直ニ引返しニ相成可申長谷川色々心配も有之候得共中々六ヶ敷由ニ而如何様とも相成度祈願仕居候へ共餘程六ヶ敷相成居申候 良公子ハ愈以非常之御方ニ而近日之薩も餘程見上ケ申候由段々得貴意度事御座候得共着即下殊之外繁勤ニ而委細ハ山田列カ得貴意候様申置申候間何も後便ニ讓置草略申縮候以上

四月六日(姓名記載なきも嘉悦市之進の筆蹟あり)

吉村 嘉善 太様

安場 一平 様

野々口 又三郎 様

岩尾 助之允 様

尚々夜中當番ニ而相認候位ニ而此節迄ハ先生に之書狀も差上得不申候間御序ニ宜敷奉願候且又御滿堂様方に茂宜敷被仰被下候様奉希候又々以上

四月七日内大臣近衛忠房長岡護美に答へて今夕來訪を期待するの意をのぶ

〔子爵長岡家文書〕

尙以今日は參 朝仕候故退出遅々ニ可相成も難計候間黃昏頃ニ御出可給候以上

芳翰承候先以御勇健珍重不斜候抑今夕來臨之義彌當方差支無之哉否御尋合承候前殿下今日は程なく歸館ニ而參 内被致候筈ニ候何卒今黃昏頃來臨給候様存候何も報答迄荒々如此候也

四月七日即刻

忠房

良之助殿 几下

四月七日松平春嶽京都守護職を免せられ松平容保之に代る

〔家茂公二度目御上洛一途〕

四月七日

松平大藏大輔  
名代田付主計

御役御免相願候段無據儀ニ被思召候間願之通御役御免被成候

〔京都返達御用狀扣〕

四月七日

封狀和泉守殿御渡之寫

松平肥後守

京都守護職被 仰付候如前々格別精入可相勤旨被仰出軍事總裁職 御免被成候

〔尊攘錄皇武令〕

元治元年四月十四日

一松平大藏大輔事願之通御役御免松平肥後守事京都守護職被 仰付如前々格別精入可相勤旨軍事總裁被成御免候段去ル七日於二條御城被 仰出候此段向々可被相達候

四月

元治元年



右御沙汰之儀幕府にハ常月十一日比申來候由承り候ニ付則去ル十三日認差出置候事其日會津藩人ニ逢候處右藩邸にハ未タ不申來との由ニ而有之候右之通御沙汰書觸ニ相成候ニ付而者屹度御請ニ相成候ニ相違無之候得共十四日會津之石澤井深來訪咄ニ今曉飛脚到着ニ而初而申越候併未タ愈以御請仕候哉否ハ不相分との事其節薩人も參り合居候得共右等之咄無之歸後右之咄たし候事

一桑名の高野咄ニ會津復職之儀ハ深き思召被爲在候而右之通再應御沙汰ニ相成候由ニ付決而御斷ハ立申間敷との事右之通書付寫并承り添書ニして差出申候以上

子四月十八日

田中彦右衛門

〔子爵長岡家文書〕

護美公より春嶽公に被進之御書寫

拙毫拜呈愈御清安奉賀候昨日來追々以御懇書拜領物被成下實以奉感謝候擬守護職之一條モ愈被免候由於小子も安心仕候付而ハ御暇之義モ可被仰立敷是又奉伺度旁明夕參上仕候間宜敷奉願候且狛山城へ之拙毫モ持參仕可御電昭ト奉存候只今方陽明へ拜趨明日迄ニ朝議相決不申ハ、小々子細モ有之明後日カ其次之日カ願書差出候方ニモ至可申ト芋公ニモ用談置候何モ明夕可申上御禮迄呈寸楮候恐々謹白

初夏第七

良之助

大藏太輔様

机下

二仲明日カハ御外出ニ而嘸々御苦勞ト存申候今日計御閉居之方如何歟早々不盡

四月七日在京本藩重役有吉市左衛門は長岡護美の斡旋により尹宮一橋兩家の融合を得たること



を藩政府に報す

〔元治元年  
尊攘録自筆狀〕

元治元年四月七日京都立早打同十六日着 京地形勢諸藩御引拂之事

別紙を以得御意申候事等之追々御承知被下候通ニ而其後爲差異狀も承不申 官武共愈以御都合宜相成たる御模  
様ニ候處尹宮様ト一橋公之御間些御行遠之氣味有之候付而ハ此儘御押移ト申場合ニ無之既ニ一橋公尹宮様ハ御出夫等  
之儀何も無御隔意御打明之御啻合有之候處一時ニ御水解ニ之相成候得共 良之助殿よりも此上猶更御都合宜様ニ御取  
繕之儀を一橋公御直ニ御頼談被爲在候間其御足ニ而尹宮様ハ御出右之次第具ニ被仰傳候付彌以御安心被成ケ様之御運  
ニ相成候上之列藩強而御引留ニも及不申早々御引揚之方却而可然なと御咄も有之たる由右之御ニ方様御遠有之候而者  
相濟申間敷處前文之通ニ而大ニ雀躍仕候事ニ御坐候且又一橋公ハ之 禁裏御守衛惣督等被爲蒙 仰候段之他筆御用狀  
之通ニ而追而之列藩御警衛惣督而御解放幕府御一手ト而御堅ニ可相成御手續共ニ而ハ有之間敷哉筑前御世子も去ル五日  
御引拂之由  
付札

本文御警衛之儀追而ハ警公義御一手ニ而列藩ハ御解放ト申埒ニ相成候共御人數悉皆引揚ふト申様之儀ハ中々六ヶ  
敷一統も相應ニハ矢張相詰居候様子ト付此方様も夫ニ應相詰不申候而之難相成因而御備御人數交代之儀別途申達候  
通候條左様御承知夫々御取計候様存候以上

良之助殿にも一日も早く御暇を賜候様此上も奉祈候以上

四月七日

有吉市左衛門

御家老 宛殿  
御中老

元治元年



四月七日在京本藩奉行右田才助道家角左衛門書を藩政府に贈り守護職任免將軍儉約の模様等京都の状況を報す

〔鎌田文書〕

今日早打差立候間一書拜呈仕候夏氣ニ相成候處太守様 上々様益御機嫌能遊御座奉恐悅候 澄之助様へ茂愈御安泰陸海無御滞最早御着座も可被遊 良之助様へも御同様被遊御滯京日々御歸國之御都合の爲ノ尹ノ宮様御初メ閣老方迄御直動も被爲在候間何方も至極御都合宜ク近々御暇可被 仰出御模様ニ御座候遅ク被爲在候而も廿日比迄ニハ是非御發歸と申候御運ニ相成候様奉祈居候事ニ御座候萬一之十九六日比迄ニ御出立も難計最中蒸氣船御拜借之方御願立ニ相成居是も今日中ニ之御付紙も下り可申御模様ニ御座候

一御備手交代之儀ハ奥々申越ニ相成候ニ付略仕候早々御差上しニ相成度奉存候

一蒸氣船御拜領之儀ハ先便ニ得貴意置候通ニ御座候處其後段々話合一先御國廻ニ相成り御一見之上ニ而御拜領歟又之御拜借と歟ニ被決候様ニ相成居申候尤此節三艘御拜借之筈ニ御座候處伊達様より御相談之儀有之大方貳艘ニ相成可申奉存候

一當地何ソ相變不申内來ル十五日比長州方御家老先達之御呼寄ニ依而上坂仕候筈之由ニ風聞尤五百計りも人數連越候哉ニ評判仕候

一春嶽様守護職も明日中ニ之御免ニ相成候哉ニ承り申候其跡之會津へ可被 仰付ものと相見申候會津公へも近日御病氣ニ付陸軍惣督之儀も御斷出居候間御歸職も御斷可被 仰上候得共一橋公ニ而も御出ニ而是非御受ニ相成候様とふても御受無之候へハ 將軍様御直ニ御出ニ而も可被 仰出候様ニ無之候而之難相成杯との御評議ニ相成居候段今朝御目付杉浦様へ角左衛門罷出相伺申候

一將軍様近日不怪之御奮發ニ而左右之銅火鉢初メ御銅器類之紅葉山之燈籠迄御取崩ニ而炮器御鑄立ニ相成り非常無類之古昔戰國同様之御質素ニ御引返し被遊御軍備相立候様との 思召ニ被爲在候段右杉浦様も被仰聞良之助様へも一橋公方御聞取被爲在候由恐悅至極ニ奉存候江戸西丸御作事も右ニ類し至而御手輕ニ致候様 御直書ニ而被 仰出候由ニ御座候

一桂川並ニ二條廻方之儀御斷被仰立候得共未々御濟達無御坐御人少ニ而大ニ困窮仕り段々御目附様方へも御催促申上候處四五日も致候ハ、埒明可申との御噂ニ而只々御模様相待居申候

一市左衛門殿も御供ニ被召連候旨今日被仰付ニ相成申候九郎右衛門殿出立何程ニ相成居候哉一日も早行遠位ニも有之度祈居中候

一一橋公御守衛惣督等被 仰付候儀ハ別紙之通ニ御座候

一薩之大隅様も 良之助様御一同位ニ御暇出候御模様ニ而御坐候薩も兩議有之一方之矢張御滯京之説之由ニ御坐候大隅様之御歸りたかりと相見へ申候

一林新九郎列も先日着仕申候此節淺井列御供ニ相成候間宇野田ノ上草野三人尹宮様へ御出入之儀今日口達仕申候右之外各別言上も無之明日江戸方通し之飛脚も被差立候間荒々録上仕候以上

四月七日

道家角左衛門  
右田才助

御奉行申様

(尚々書以下略之)

四月七日日本藩在京奉行は長岡護美歸國の際幕船借用及び順動丸回航の件につき藩政府に通牒す



〔機密間日記〕

今度良之助様御歸國之節蒸氣船順動丸黒龍丸觀光丸御拜借ニ而御乗船之筈候左候而佐賀關ニ御着岸御上陸之上順動丸之儀之公義御船手乗組之儘日向沖ニ而御領海ニ乘廻之筈ニ御座候高橋川口沖手迄ハ乗方出來之見込ニ御座候右ニ付而於御國許御買備之品々并御付届等之儀別紙小野敬藏太田黒權作達之書付三通并機密間取書一通差進申候間夫々其御手賦ニ相成候様御買備之品々ハ餘計之事ニ候間於御國許調兼候品々茂可有之候間長崎表ニ而御買上ニ茂可相成哉何様可然様被仰談可被下候且又鶴崎川尻御船手之内順動丸乗組之儀茂機密間書取之通ニ付夫々被及其御達度存候尤鶴崎御船手乗組之儀之此許御發途御早々ニ茂有之候得之其御許御達相廻候而ハ自然之間ニ合兼候儀も可有之哉ニ付別帋寫之通御番代申達候付左様御承知候様存候以上

四月七日

京都詰  
御奉行中

付札 御奉行衆中

同 本文之通候處順動丸朝陽丸貳艘之御乗組ニ相成筈候委細者機密間申向ニ相成候事ニ御座候已上

同 本文書付之内順動丸御國着船之上船將宿等之儀稜々被及其御達候様存候事

四月八日朝廷長岡護美に歸國の暇を賜ふ

〔京都諸扣〕

四月八日

一今朝御月番傳奏野宮權中納言様御留守居御呼出雜掌を以左之書付御渡ニ相成候事

長岡良之助



長々滯京御用勤仕且勤番等苦勞ニ思食候今度賜御暇候但猶人數殘置非常之節禁國警衛有之候様御沙汰候事

四月

〔鎌田文書〕

元治元、四月八日之早 同十六日着

三白今日并之御飛脚も立申候得共別段書狀仕出不申本田健助列も今日着仕申候以上

昨日も早打立申候處今日も差立一書拜呈仕候 太守様御初ノ益御機嫌能被遊御座奉恐悦候 良之助様へも今日  
天朝方御暇被 仰出恐悦ニ奉存候右ニ付來ル十三日京地御發歸之筈ニ御座候御供之才助被 仰付申候 公義に者御届  
迄と申候而も此御不都合ニも可有御座歎御内意御伺ニ相成候様ニも可有之哉と話合居申候事ニ御座候御拜借之順助丸  
當時御作事ニ相成り居來ル十日迄ニハ相濟候筈ニ之御座候得共如何ニ可有御座哉懸念仕申候何様成丈ケ十三日ニ御發  
歸奉祈居申候島津大隅様も御同様今日御暇出申候由併是ハ十八日比之御立之筈と承申候春岳様も昨日御守護職御願通  
り御免ニ而會津へ其跡被 仰付候由風聞仕り未タ虚實ハ相分不申候 將軍様へ者明日尹宮様并ニ山科宮様へ被爲成候  
由誠ニ御珍敷事ニ而御座候昨日も得貴意候通り必定 御奮發と奉恐察無此上御事ニ奉存候委細ハ別紙御用狀之通ニ而  
右迄得貴意度如此ニ御座候以上

四月八日

道家角左衛門  
右田才助

御奉行中様

尙々時下御白玉奉祈候以上

四月八日朝廷伊達宗城松平春嶽島津久光松平茂政に歸國の暇を賜ふ

元治元年



〔文久三年  
京都諸扣〕

宇和島侍從

長々滯京御用勤仕苦勞思食候老父所勞之由旁賜御暇候但猶人數殘置非常之節 禁國警衛有之候様御沙汰候事

松平大藏大輔

長々滯京御用精勤苦勞思食候間今度賜御暇候但猶人數殘置非常之節 禁國警衛有之候様御沙汰候事

島津大隅守

長々滯京御用勤仕苦勞 思食候間今度賜御暇候但島津圖書殘置非常之節禁國警衛有之候様御沙汰候事

松平備前守

依召上京苦勞 思食候如願賜御暇候事

右之通四月八日御沙汰有之候由一橋公良之助様に御自筆を以被仰知候事

四月八日將軍家茂旗下の士に諭して時局に鑑み忠勤の精意貫徹を期せしむ

〔魚住文書〕

四月八日板倉様方御達書

上意之趣周防守殿御渡

此度上洛之儀戊午以來政事向不都合之廉々申上事實御了解相成總而是迄通御委任被遊難有事ニ候然處當節攘夷期限切迫ニ至候間此上歸城致候得者攘夷之舉ニ及ひ候儀ニ付一同此旨厚相心得報國之赤心相顯候様心懸可申候勿論滯京中聊ニ而茂遊惰之舉動有之候而ハ別而關東之者とも攘夷之存念薄く闘争之氣力無之様人々相唱可申間方今之事情洞察之上忠勤之精意貫徹候様可相勵事

四月

四月八日毛利慶親は赤誠を披瀝し三條實美以下西下の心事を陳べて其復職を希ひ父子の内孰れか上京を許されんことを歎願す

〔尊攘録諸家建白並御届書等、木庭文書 加屋巖堅編 私圖能弘道漫記〕

〔防長回天史ニ此書は公直筆にて三月二十八日山口より發し四月八日京都留居居を以て執筆家に出せるもの〕とあり〕

謹按

二尊開闢以降

天日嗣之知食賜堂々之皇國三千年之今日ニ至り初而夷虜之侮慢ヲ受御國體難相立何共悲憤之至奉存候辱モ 聖明英武夙ニ掃攘之 徵慮被爲在天人感動癸亥之夏ニ至り遂ニ拒絕期限被仰出候ニ付臣領内ニ於テ聊遵奉之驗相立敵愾之士氣相勵天恩萬分之一奉報心得ニ罷在候處八月十八日ニ至 闕下變動之次第如何之御事候哉其原由者不奉得察恐悚之餘從來奉 勅之始末巨細申上置於國元恐懼罷在候得共 玉座之御安危如何可被爲在哉ト寢食不安日夜憂苦罷在候抑癸丑以來確乎タル攘夷之 徵慮可被爲變御事ニハ不被爲在候得共當今人情輕薄萬一於内地石敬瑭如キ者有之間敷共難申若然ラハ 玉座之御安危ニ相係候御大事ト奉存候ニ付再三申上候モ恐多候得共藤原實美初西下之儀者全ク攘夷之 徵旨貫徹致度之外更ニ他念無之由其憂國思君之誠意不被爲捨早々復職被 仰付候ハ、最前確定之御國是彌以凜然相立可申ト奉存候且又臣父子去秋以來上京見合候様ト之御事如何之御趣旨ニ候哉不奉測候得共去八月攘夷御依頼可被爲遊ト之御沙汰ニ本ツキ日夜心ヲ盡罷在候得共上國之事傍觀打過候而者臣子之至情不相忍候ニ付父子之間一人上京仕乍不及抽丹誠 徵慮御貫徹相成候様仕度奉存候區々之鄙誠天地鬼神ニ質シ可愧儀無御座候間乍恐 御憐察被爲降御聞濟被爲成被下候様泣血奉歎願候旨謹誠恐惶稽首謹言



三月 イニ

(別紙)

私末家一人吉川監物并家老一人御用有之候ニ付大阪表迄罷出候様尤國許迄可被遣 勅使之處遠路之儀故大阪迄被差遣候事故末家已下三人大阪迄罷出 勅使御引請仕候様御沙汰之趣奉承知候然處先達而家來并原主計上京申付候節勸修寺殿於藤森御接待ニ相成候儀奉對 朝廷奉恐入候次第御座候處此度又々於大阪 勅使御引請仕候様被 仰付候而者失敬之次第臣子之至情不堪恐懼奉存候間僅咫尺之事ニ候得者入京被差許於 闕下奉命被 仰付候様奉願上候當今之時勢闕下之御模様如何ニ茂傍觀難打過段者委細別封を以言上仕候次第ニ而私父子之間上京を茂御願仕度程之事ニ付折角被召寄候末家其外之者共 闕下近く罷出候様格別之御慈悲を以御聞濟之程奉歎願候以上

三月

長 門 宰 相

四月九日水戸激徒日光山に會し檄を飛して四方の同志を募り又閣老板倉勝靜に上書して速に姦邪誤國の罪を正し斷然攘夷の令を布かれんことを請ふ

〔元治元年甲子年〕  
〔尊攘録探索書〕

(子四月十三日森井惣四郎聞取の節略)

一今十三日戸田淡路守様御留守居澤田五郎兵衛を訪今度水戸人野州邊横行いたし居候事承糾候處最初之處ハ先日差出候戸田侯より公邊に御届ニ相成候通當月六日宇都宮に止宿同七日滯り同八日出立今市之宿迄參止宿 宇都宮より六七里之由 是非日光山に參詣を致と申事ニ而宇都宮重役縣勇喜最初より水戸人に應接ニ及候者右日光登山之事も縣より日光御奉行に伺ニ相成候處只々登山計にて有之候ハ、何之支も無之由と之事にて右之趣縣より水戸人ニ通シ候處勿論參拜而已にて別條無之と之事にて同九日參拜相濟猶今市宿迄歸り止宿と申事之飛報有之候と之返答にて未々格別之事之仕出不申候由



水府激家之廻狀を出候寫

一尊王攘夷之神州之大典なる事今更申迄も無之候得とも神州開闢已來皇統御一姓天日嗣を受嗣せらる君臨ましノ威稜之盛る實ニ萬國ニ卓絶し後世ニ至る迄北條相州之蒙古を薙ニし豊太閤之朝鮮を征する皆神州固有之義勇其振ひ天祖以來之明訓を奉せし志にて實ニ感るゝ餘あり東照公大猷公ニ之別して深く心及盡させらる數百年太平之基御開被遊候も畢竟尊王攘夷之大義ニ本つるを候儀にて徳川家之大典尊王攘夷を重キハ無之様相成候之實ニゆゝし事ならず然る方今夷狄之害ハ一日々々ニ甚敷人心ハ目前之安を偷ミ是ニ加るゝ姦邪勢ニ乘し憚懼權を弄し内憂外患日増ニ切迫致報慮貫徹之程も無覺東祖宗之大訓振張之期も無之實ニ神州之汚辱危急今日之甚敷ハ無し假初ニも神州之地ニ生を神州之恩ニ浴する者ハ是れ我お老ノとして傍觀坐視するゝ忍んる僕等幸ニ神州之地ニ生を又幸ニ危難之際ニ處候上ハ乍不及一死以國家及神補し鴻恩之萬分ニ報可申と覺悟仕候仍而然慮致候處必死之疾ハ固々尋常之藥石之療る所ニならず非常之事及なさんとなをハ決而非常之功をハ立る事及不得況や今日ニ當り上ハ宸襟及奉慰下ハ幕府之武斷を助ケ從來之大汚辱を一洗するゝ於てを不是ニ痛憤難默止同志之士相共ニ東照宮之神輿を奉し日光山ニ相會も其志誓て東照宮之遺訓を奉し姦邪誤國之罪及正し醜夷外窺之侮を禦キ天朝幕府之鴻恩を報せんと欲るゝあり嗚呼今日之急ニ臨ミ誰か報効之念ならんや又誰か夷狄之鼻息及仰キ彼か正朝を奉るゝ忍んる既ニ報効之志及抱き又夷狄之狡謀及憤りならおまノとして因循姑息ニ日及送り徒ニ神風及待候儀實ニ神州男子の恥ならず諸國忠憤之士早く進退去就及決し同志戮力して上之天朝ニ對し奉り下之幕府及輔翼し神州之威稜萬國ニ輝候様致度我徒之素願全く此事ニ有り東照宮神靈御照覽可被遊そま之た何れか陳せん

武田耕雲齋が小川館之徒へ與へし書付之寫

一此度養生入館以來謹慎文武研究攘夷之志相勵由一段之事感入申候併從來輕動等無之様尙更深盡力有之度事

甲子正月廿四日

武田耕雲齋

元治元年

七〇一



右之書付を武田渡し候之其他之派方之大ニ笑居候由

一水戸人日光登山之節之人數貳百人計ニ相益候由

〔尊攘錄諸家建白並御届書等、風聞書〕

某等謹而松山侯閣下ニ奉言上候閣下御賢明ニ被爲渡候段兼而景望仕罷在候處一昨年幕府御大政ニ御預被遊候以來御中興之御新政も追々被仰出我々共も實に大早ニ雨を得候心得ニ而祖宗以來尊攘之大典を振興し夷狄積年之大汚辱を洗雪仕候機會到來致候へハ年不及身命を抛神州之御爲ハ勿論幕府之御爲身分文之御奉公可仕奉在候處其後次第ニ時勢之變革も有之一昨年復古之御事業も半途ニして相止候姿ニ相成候のみならず却而一層之大害を生し世之所謂四奸と唱候越前家保科侯伊達春山島津三郎等宮家堂上方等を邪道ニ引入れ上下を壅閉し 天朝を奉欺罔未タ外夷を一掃不仕候ニ却而内亂之基を醸候儀大變。ニして天下之安危徳川家之存亡今日ニ指迫候上は假初ニも神州ニ生れ候者一日も傍觀可仕場合ニ無之況や天下之御大政ニ御預被遊天下國家と俱ニ存亡被遊候御立場柄ニ而は猶更之儀と奉存候乍恐既ニ閣下ニは深く東照大猷公之御明訓御遵奉被遊夫々御恢復之御事業御施行ニ相成候程ニ御座候得は今日ニ至り空敷沈黙被遊候筋決而無之候得共全ク時勢不被得止儀ニ可被爲在哉一體時勢を計らされハ功を難成は勿論ニ御座候得共方今危急之場合ニ臨ミ時勢ニのミ致懸念尊攘之大義御遵奉不被遊候而は 天朝之徵慮ニ違ひ祖宗之大典を壞り眼前ニ天下國家之覆滅を招き候儀ニて誤國之罪は御逃難被遊候筋ニ御座候得は閣下之御賢明ニて決而時勢ニ御泥ミ被遊候儀は有之間敷と奉存候然處唯今以一號令一舉動之天下之耳目を一新いたし候御事業不被爲在候段如何御懐合ニ有之可申哉彼此苦慮痛心仕候得は實ニ骨身を碎く計ニ而至情難默止同志之者とも申合日光山に相會申候御法度ニ觸候段は幾重ニも奉恐入候得共斯ル御時節ニ候得は寧瑣細之御法度ニは觸候得共祖宗之大典遵奉仕候てこそ名義も相立可申 宸襟を不奉慰候ては三百年之御仁恩を如何可仕哉と存込候儀ニ而毛頭他念御座候譯は無之候得共一同山内ニ相懷ミ罷在一書を以御程合奉伺候間不日ニ姦邪誤國之罪を御正し被遊斷然として撲夷之令を布キ 徵慮を御奉し被遊候御事業天下ニ相顯候ハ、

我々とも如何なる重科ニ被仰付候共聊御恨ミ不申上候若又右之儀御六ヶ敷候御譯ニも御座候ハ、不得止。東照宮之神興を奉シ 遺訓ニ基キ微忠ヲ盡候心得ニ御座候間此段御披露可被下候恐惶謹言  
四月（日附は風聞書に據る）

四月十日御所近火の節諸藩の警衛區域を定めらる

〔文久三年 京都諸扣〕

一 口上覺

別紙之通御治定被仰出候此段可申入旨武傳被申付候以上

四月十日

傳

奏

雜 掌

御名 様

御留守 居中

東賀茂川西堀川南二條北鞍馬口限之内出火之節人數可差出事

一 主人出馬之節之西唐門より參内於諸太夫間假建 天機可相伺事

但着用火事裝束之事

一 暫時ニ而鎮火之節之主人不及參集事

一 參集之節九門内乗馬不苦事

一 主人假建に參集之節可成丈少人數より混雜無之様專一ニ候間下々供向者持場固所ニ殘置可申候事

元 治 元 年

七〇三



九門内外人數分配

清和院	寺町	門外混雜候ハ、門内後院御築地際	堺町	下立賣	蛤門	今出川	門外混雜候ハ、門内近衛家築地際	乾	右同斷	中立賣	門外混雜候ハ、門内北側築地際	石築師
土州	此方様		雲州	仙臺	會津	久留米	薩州			筑前		阿州

南門	東門	猿ヶ辻	北朔平門前	西門	新在家	建春門内	鎮火之後右ヶ所々に仕丁觸廻候ハ、各引拂可有之候事
御築地際 當時警衛	同斷 當時警衛		當時警衛	唐門清所門	内侍所前		
水戸	松山	尾山	中川	宇和島	會津	所司代	藤堂

四月十日幕府板倉内膳正其他の諸侯に命じ日光附近を警戒せしむ

〔尊攘錄皇武令〕

子四月十日夜

備前守宅に銘々家來呼可達之覺



板倉内膳正に

常州野州邊不穩趣も相聞候ニ付日光御警衛として被差遣候間實備第一にたし無益之入費等無之様相心得支度次第早々  
出立候様可被致候尤秋田宍房守ニも同様被仰付候且又戸田越前守秋元但馬守に茂兼而同様被仰付置候間可被談候

水野日向守に

水野日向守家來に内意夫々及差圖候得とも彼方無法等之及所業候節之格別左も無之候得之此方より不都合之儀等無  
之様可被相心得旨日向守家來に達候事

堀田鴻之丞 土屋采女正 喜連川左馬頭 土井大炊頭 久世謙吉 大久保佐渡守 鳥居丹波守 水野日向守

石川若狹守 細川支藩頭 大關肥後守 大田原銚丸 森川内膳正 新庄駿河守 松平豊後守 井上伊豫守

井上筑後守 内田加賀守 有馬兵庫頭 戸田長門守 山口長次郎 本堂内膳

一大炮數筒之儀之差向候儀ニ付此度限家來印紙に員數相認直ニ關所に差出通行積り可被相心得候

一浮浪之徒近傍迄罷越候儀等ニ候得之御祭禮御延引之儀之日光奉行に申談候様可仕候

一御祭禮之節百姓町人等拜見之儀并市中宿坊等逗留不爲致様日光奉行に相達候事

一神輿浮浪之者共拜禮等申出候得之差留可申候若不都合之儀申立候ハ、時宜次第取計候様可仕候

一賊徒萬一御紋付又之御印等若飭候共發炮切捨之様子次第取計候様可仕候

一衣冠ニ而奉供之儀騒亂之模様ニ寄時宜次第可仕候

一固人數着込等之義時宜次第可仕候

一御山内に武器持込不苦候

一御祭禮之節之御祭禮奉行之勤向専務ニ相心得候様可仕候

一日光新宮登山無之ニ付奉書不相渡候間明十一日田安假御殿に罷出ニ不及候

元 治 元 年



右之外書面之趣承り可置候事

戸田越前守 松平右京亮 秋元俱馬守  
板倉主計頭 鳥居丹波守

常州野州邊不穩趣ニも相聞候處此度例幣使日光に旅行有之候ニ付銘々領分之勿論最寄り御料小荷駄所とも取締向之儀  
近領之面々申合相心得候様銘々家來呼達候事  
右御用番備前守宅ニおゐて書付渡之

四月十日長岡護久熊本に歸着す

〔機密間日記〕

一筆致啓達候太守様益御機嫌能被爲遊御座奉恐悅候澄之助様彌御平安一昨七日久住被成御着候迄之御儀者同所方申上  
候通ニ御座候昨八日朝六時之御供揃ニ而同所御立坂梨御茶屋御書休ニ而夕八半時過内牧御茶屋に御着今朝六半時之御  
供揃ニ同所御立の石御茶屋御書休ニ而九半時大津御茶屋に被成御着彌以御平安御膳等御快被召上重疊目出度御儀奉  
存候明日之彌以曉七時之御供揃ニ而當所御立三宮方總御行列立ニ而直ニ御機嫌爲御親御花畑并二丸御屋形に御出夫方  
宮内御屋敷に被成御着答ニ御座候御郡使差立此段爲可申上如斯御座候恐々謹言

四月九日 清 田 新 兵 衛  
大 木 織 部 殿 朽 木 内 匠  
清 水 縫 殿 殿 以下略

〔機密間日記〕

四月十日 一澄之助殿益御平安曉七時之御供揃ニ而大津御發途晝四時七步御花畑に御着夫より二丸御屋形に御出宮内御屋敷に被成  
御着候事

〔小笠原備前日録〕

四月十日晴 澄公子、發大津、己牌至花殿、從夫至二郭邸、歸入宮内邸、予等調要人及宮中附官誂賀、至宮内邸誂賀、迎公子於玄  
關式臺、蓋今朝 公子少不豫也、然召予輩、 示幕府所賜之佩刀及印籠、予等所休而雖有賜酒之命、辭而歸

四月十日長岡護美將軍家茂に二條城に謁す將軍親しく慰諭の辭を與へ藩主及び護美に各劍一口  
を與ふ

〔家茂公二度目御上洛一途〕

四月十日 一良之助様依御達今日二條に御登城被成候處於御休息御目見御懇之被爲蒙上意左之通  
太守様に 御刀 大和國則長  
代金三十枚  
良之助様に 御刀 大和國政次  
代金二十枚  
右之通御手自被遊御拜領候尤太守様御名代者良之助様ニ而被爲濟候事

〔尊攘錄皇武令〕

元 治 元 年



依御達四月十日二條御城に御登城之處於御休息御目見御懇之以上意御手自御拜領物被爲在候  
上意之趣

太守様昨年御上京以來御周旋筋不相替御盡力御満足思召候依之御刀被下置旨良之助様ニ之長々御滯京御盡力御満足思  
召候依之御刀被下置旨畢而一昨年茂御上京以來御盡力苦勞思食候依之御三所物被下置旨

右御直ニ御請彼仰上候

以下外向へ之願曰不相知様との事

一 太守様に之御刀之御手自被下候間太守様に御直ニ御差上ニ相成候様且又今度御歸國之上猶御用之節と早速御上京被成  
候様取分御頼被思召旨御沙汰ニ付右御請之儀ハ太守様御相談之上可被仰上被仰上候由

上付札

御茶御菓子御前ニ而御頂戴被仰付候由

一 右相濟候上御目見御拜領等之御禮於殿中御用番様に御調被爲濟其外御廻動等ニ之不被爲及候由

一 前條御沙汰以後尾張前大納言様御逢今日上意之通格別ニ御頼思召候間御用之節ハ何分早速御上京被成候様ニ之厚御傳  
之筋右之御老中様よりも御同様之趣吳々御噂ニ相成候由

四月十日長岡護美は松平春嶽島津久光伊達宗城等と近衛家に會して離杯を擧げ且つ明日參内し  
て長藩主父子の上京及び三條實美等職復の非を陳すべきに決す

〔鶴鳴餘韻〕

十日に至つて云々夫より二條に登城云々

二 城退城の後近衛公の處に參られしに春嶽久光有馬長岡等の諸侯と會して離杯を擧げられたるが其席上の話によるに  
長州は近日の中父子上京の願ひと六卿復職の事とを申立つる爲め大に動く模様ありとの事又朝廷に在つては議奏の中

に暴論家出來りて早く鎮港せざれば人心折合はすふご、騒ぐ者もありとの事夫に就き尹宮は再び公武一和の實を失は  
ん事を懼れて明日參内の上幕府へ一切の事を御委任にふる以上は凡て朝廷より側口を出さぬようふさらすば幕府にて  
も之れが所置に困難すべし若し王政復古の實を擧げて朝廷に於て御施設在らせらるゝ聖慮ふらば何事も朝廷にてあ  
らねばならぬといふ事を申し立てられ右の暴論家を取鎮めんとせらるゝお話ふりしが尹宮は御内心國事の關係は最早  
自分には堪へざるを以て辭任したしといふお考あるやに察せらるゝよしにて相替らず煮え切らぬ沙汰のみふり  
良之助殿は此の話に基づき明日參内したる上正親町三條卿まで長州は其末藩及家老等の上阪を命せられたるさへ尙ほ  
勅命を奉せざる今日ふり左様なる不都合の者に父子の上京を許される事は甚た宜しからず況して六卿復職の事の如き  
は容易に御採用あるべからざる事ある所以を説かんとの相談を一決されたり  
凡て此頃の各諸侯又は重なる役人ふごの意見は斯る酒席ふとにて發表せられたるものにて天下の大事が殆ど私人の會  
合にて内決さるゝ傾きあり肝心の朝廷の會とか御用部屋の會議とかいふ公式の場合は殆どこの内決の事柄が公表され  
るに過ぎざりしふりとぞ

四月十日正泉寺介石越藩中根靱負を訪ひ防長周旋の目的を告ぐ

〔續再夢紀事〕

同日(日)朝肥後の僧正泉寺介石來る中根靱負面接す此介石ある者長州に赴き周旋する所あらんと欲するよし過日宇和  
島侯申されし旨ありし故中根其目的を尋ねしに長州に入りて周旋すへき目的ハ第一に脱走七卿を洛外幽閉に止めらる  
ゝ事第二毛利家ハ一藩の罪を當侯の一身に引受られ國元にて屏居世子ハ本願寺日代御同道にて上坂罪に伏し然る上入  
京を許さるゝ事第三益田右衛門佐ハ職務を割き隱居其他差等を立割腹に處せらるゝへきものあれハ本願寺命乞ひを願ふ  
事第四諸藩の脱走人にて長藩に身を寄する輩ハ原籍へ復歸し難き者ある時は他の藩へ入籍せしむる等事ふりと申聞た

元 治 元 年

七〇九



り備書備忘

四月十一日所司代稻葉正邦老中に任じ桑名藩主松平定敬之を襲ぐ

〔尊攘錄皇武令〕

昨十七日桑名藩高野一郎右衛門來訪ニ而申問候ニハ今曉京都表々の飛脚到來申越候とて内々爲見候書面之内寫左之通

十一日曉八ツ半時比今五ツ半時二條に御登城被成候様御奉書御到來ニ付即刻御供揃ニ而御登城被成候處於御座間京都之儀御守衛筋者勿論取締向其外此上一際嚴整ニ無之而者難相成候ニ付其方儀席柄之儀ニハ有之候得共當節柄之儀故別段之譯を以溜詰之儘所司代被申付候間松平肥後守申談諸事盡力精入相勤候様

一以後御用之節者御案内ふく直ニ御用部屋に御通り被成候様御老中様を御違有之一ト通り之所司代ハ御案内之上御通り之よし

一稻葉様ニ之今日加判之列被蒙仰

右之通桑名侯所司代被仰付ニ付而之高野氏内話ニ第一君公御若年ニも有之君公當子ノ御十九才且御達振も別段ニ而實ニ當節不容易甚以不任心底候間何卒御斷ニ可相成筈ニ而重疊心配仕居候儀ニ有之就而之彌以御請仕たる申儀ニも無之候得共不取敢申越候との事

右之通咄ニ御座候得共多分御斷ハ雜叶方歎ト被相察候事

一右不被仰付以前ニ殿誰様歎名ハ忘申御周旋ニ而右等之御話有之たる歎之由ニ候得共勿論重疊御斷ニ相成たる趣も承及居候事

一相察候ニ近來之參豫京都守護禁裏守衛等被仰付候出處トハ違ひ可申歎之由乍去此許板倉侯ハ矢張御内評御承知無之様ニ被伺候との同人咄ニ而御座候事

右之通書付寫并ニ承り添へ書ニして差出申候以上

子 四月十八日

田 中 彦 右 衛 門

〔御同席觸寫並大目付様御廻狀并御書扣〕

文久三年

一右之御觸書五月朔日京都を着之風飛脚ニ相達

四月十一日和泉寺殿御渡

大 目 付

御 目 付

一稻葉長門守事加判之列被仰付候松平越中守席柄之儀ニ之候得共京都表之儀御守衛筋之勿論御取締向其外此上一際嚴整ニ無之而之難相成候付別段之譯を以溜詰之儘所司代被仰付候松平肥後守申談諸事盡力精入可相勤旨被仰出

一長門守事美濃守ニ可改旨被仰出候此段向々ニ可被相觸候事

四月十一日

〔尊攘錄探索書〕

元治元年甲子年

〔森井惣四郎子四月十七日聞取抄略〕

一當月十一日於京都只今迄京都御所司代稻葉長門守様閣老職被仰付御跡役ニ之松平越中守様御溜詰之御席ニ而被仰付ニ相成候由尤右ニ付而之當時不容易折柄別段之譯を以被仰付候ニ付會津侯御兄弟御心を被爲合御盡力御坐候様決而御辭職等不申出様前以御内命御坐候上被仰出候由然處桑名藩中ニ而之未タ御若年ニ而當時之折柄何分御勤六ツク敷と直ニ十二日ニ御辭職之願書被差出候由まゝし迎も御辭職被仰付問敷と被藩御奉行相勤居候高野一郎左衛門今朝罷出右之内話仕候尤御辭職ニ之少シ子細も右之候様話仕候右前以內命御坐候之密事ニ而口外を斷申候

元 治 元 年

七一一



四月十一日幕府桑樹を田畑に植付くことを禁す

文久三年  
〔御同席觸寫大目付様御廻狀并御書扣〕

（四月十一日板倉閣老より大目付に命し各藩に示達せしむ）

大目付に

近年田方に桑植付候もの多く有之哉ニ相聞以外之事ニ候五穀を廢し蠶を專と致し候而者不可然候間地に植付候之當然之儀ニ候得共田方ハ勿論畑方等ニ新規ニ桑植付候儀者決而不相成事ニ候  
右之通御料私領寺社領共不洩様可被相觸候

四月

四月十一日長岡護美參内す時に朝廷滯京盡力の勞を慰して物を賜ひ藩主慶順を從四位上に陞叙せらる

〔慶順公從四位上中將御叙任口宣御戴頂一途、京都返達御用狀扣、文久四年日記、家茂公二度目御洛上一途、機密間日記〕

一從四位上中將御推叙任之事

公方様御上洛中

良之助様 慶順公御弟  
御上京中

四月十一日巳刻御參 内被成候様傳奏野宮中納言様より御達ニ付五時之御供揃ニ而御參 内被成候處長々御滯京御苦勞思召候今度御暇ニ付賜候旨中納言様被仰渡御末廣一箱晒布五包御拜領且又大守様 慶順公  
從四位上 御推叙宣下之段左之御書付御同人様御渡有之

細川越中守

被召舍弟長岡良之助之處早速應御沙汰且爲越中守名代澄之助差登兩人長々滯京公武御一和之筋盡力且勤番等苦勞被思召依之越中守從四位上推叙被 宣下事

四月十一日

四月十一日日本藩久世桂川警衛の兵を撤す

〔京都返達御用狀扣〕

今度久世桂川御固御免被成候付固人數等今日引拂申候此段申上候以上

細川越中守家來

青地源右衛門

四月十一日

四月十一日柳河藩の使者熊本に來る

文久四年  
〔御在國日記〕

四月十一日

一御客屋方御奉行方左之通

立花飛彈守様方之御使者寒田卯三郎と申仁參着明日於御客屋口上取次之御手當被仰付答候此段爲御存申達候以上

四月十一日

御用人衆中

猶々卯三郎儀番頭次席御使者役七拾石上下拾壹人之由候以上  
右之趣御序之節御取次を以達 尊聽候事

元治元年



四月十一日英國公使アルコック閣老牧野忠恭を訪ひ長州に艦隊派遣の必要及び横濱鎖港の不利等を説く

〔尊攘録探索書〕

元治元年 子四月十一日森井惣四郎聞取

一今日英國アルコック牧野閣老邸に應接ニ參候得共未だ何事敷承不申候以上

四月十二日森井惣四郎聞取

一有馬閣老御辭職之事昨日敷今日御免ニ相成候由

一昨十一日英國アルコック牧野閣老に參候譯者今度大樹公に御直ニ申上度事御坐候而國王之命を以渡來仕候處大樹公御歸府之事一向未だ相分不申是非御歸府御待請不申候而者難叶然處此節乘組之者上下三千人計も有之候處只今度之惣而船中ニ棲居候得共最早次第ニ炎暑ニ相成候間暫く横濱ニ假り屋を立て上陸仕度若横濱御差支も御坐候ハ、外ニ御土地拜借仕度と申出候由承申候

四月十二日田中彦右衛門聞取

一昨日夷人英人アルコック 御老中ニ出候由岡巷之説ニ全虚ニ可有之候得共日本海岸防禦筋御受持申上度と申出たると市中ノ者杯評判仕居候由

四月十三日田中彦右衛門聞取

一昨日英人江戸に罷出閣老牧野侯御應接有之たる由内々承り候ニ英人申出候趣ハ長州に軍艦を差向度との儀又候頻りに申出候由併是ハ是迄申向通り此方ニ而所置方有之候ニ付其儀不相成候段被申向ニ相成候由且又横濱鎖港御不爲メと申事も申出候由右之件々承り申候是ハ評判ニ無之説と承り候事

昨日差出候承り書之未向々書ニ此度應接市中杯之評判ハケ様ノ、と認置候分本文之通ニ付右ハ虚説と被存候

四月十三日日本藩田中彦右衛門は水戸激徒の動靜を報告す

〔尊攘録探索書〕

元治元年 水戸浪人起り之事

紙表 承書 子四月

一水戸浪士と唱候もの又々沸騰鹿島小川邊等に相集り又ハ宇津宮目付に書面差出申候儀等大略先月廿九日差出候承書ニ認置候處昨今又承及候左之通

一水戸浪士 水戸浪士と候唱得共所々種々 多人數筑波山ニ集り居候との事 千五百人計り集り候との事尤此四年前潮來玉造等に東有之候事此節も虚説ニ而左様ニ者集り申間敷と思はれ候處此節ハ其實ハ却而千五百人ノ多き位ニ可有之杯と常州參り候旅商人相唱申候由

一同浪士野州石橋宿宇都宮ニ百七拾人止宿 常州府中之方ニ 内八拾人ハ士分之者之由軍師ハ田丸稻右衛門總裁ハ藤田小四郎同輔佐ハ齋藤左次右衛門此姓名ハ石橋宿 參り候由なり

白木綿後ろ鉢巻其内ニ立羽なる炎御紋附着用之者壹人相見候由いつまも鉄鞭鉄扇鉄炮も餘程相見候由御輿とか申事ニ

而白き箱正面ニ正三位源某靈トカ認有之候由 文字駁と不覺申聞候も 右を昇き一同奉供いたし候而參り候由 御輿を昇き候ハ

無之 兼而先觸出し有之宿之本陣紫縮緬奏御紋附之幕ヲ締右輿を持込夫ヲモへ置き候坐敷ニ者同紋附白麻之幕ニ而圍ひ

杯有之たる由一説ニ札席も建たる杯とも申候旅籠代ハ書附ニ而三分と相定候由 二三日前承候ニ仙臺藩士一人江戸へ出

人石橋へ着ニ而有之候由其本陣之向之家ニ宿ヲ取り段々様子一見いたし候由其者申聞候ヲ承り候者咄ニ右之御輿と唱候ものハ小なるものニ而恰も小兒の箱の縁ニ相見候ものニ而正三位何々と號認有之たるとの事どうも中ニ木俵入れ有之由山公之御輿杯とも申候よ

し ○其夜右人數之内と相見仙臺旅籠へ參り申出候ニ者此度水戸浪士と唱へ村々彼差ニ而金錢を奪候由相聞以之外之事ニ有之候由申候處左様ニ候ハ、宜かたりのもの追々有之候ニ付御輿申候と 右浪士共石橋宿出立宇都宮に行き候由宇都宮問屋に申遣候先



觸ニ人足五十人同用意四十人と申事之由宇都宮ニ而差留ニも相成候との事風聞承り申候宇都宮藩ニは隨分右等之通ニ入り易き客氣之者も有之風之由承り候

一字都宮侯御在府ニ而有之候處右之儀ニ付去ル九日急ニ此許御出立ニ相成候由

一右浪士共發起之旨趣風聞ニ而者日光山に參り東照公神前ニ訴へ先ツ横濱に打込攘夷之事を學ケ候との由且申立候處ハ島津三郎如き倍臣之者ニ天下之大政を扱ハせ且往々の不宜儀者正さず却而重き叙任等有之候様ニ仕成し候儀第一幕所因循方右様之次第ニも及候譯ニ而此上遂ニ者如何様叡慮を矯候様ニ相成候も難計皇國之爲メ傍觀坐視するに忍ず依而先公ヲ奉して日光ニ參り此事を訴へ奉り及一舉候との事右様之趣の申立候之由此囁ハ當州ハ出居候御當地赤羽根邊の水溝ニ出入いたし候町人内々申聞候由之事

一右浪士所々金作之次第ハ先年と大同小異之由此節も餘程金ハ集り居候事と相見調物等いたし候而も皆無相違拂方いたし候由在々ニ而追々横濱交易之品を出候者杯ハ殺さまん事を恐を獻金ニ出懸候者段々有之候由

一右ニ付此度日光御代參被仰付候諸侯方も御祭禮之方ハ相略し右警衛之方主と相成候歟之由も承り申候

一頃日認差出置申候傳通院前池田屋と申郷宿ニ水戸人滯留之儀ハ承り候處武田耕雲齋に神武館此館之事ハ過日之儀ニ付認差出置候事志願之筋書附差出置候由之處右耕雲齋耕雲齋ハ當二月伊賀守ト任旨出府仕居候ニ付右願書爲濟被下候様否伺として出府仕居候事之由如何決着ニ相成候哉最早皆引取候由

一水戸中納言様方同國許御簾中様之御文通御使ニ兩人參り候由右御簾中様御文を持歸府之途中同水戸人六人遮り留及亂妨遂ニ右御使者兩人打取右御文を奪取候由尤打懸り候方も手負死人も壹人トカ有之たる歟之由先月晦日之事と申事右承り候儘を不取敢書取ニ差出申候以上

子四月十二日

田中彦右衛門

一水戸御領分中ニ而昨年横濱に綿を賣候もの有之右浪士と相見其它に踏込打取其首ヲさらし候由

一字都宮ニおる右浪人共最早被刑つけニ相成たる杯とも申候右宇都宮に參り候浪人實ノ水戸藩士ハ五六人杯と申説も御座候事

又附録 英人アールゴック 御老中ニ出候由聞卷之説ニ全虚ニ可有之候得共日本海岸防禦御事申上度ト申出たスレ市中之者杯評判仕居候由

此冊子ハ在宿ニ而來訪人方承り候迄ニ付從是外出仕見候而承り見相違之稜々等猶又書取差出申候積リニ御座候

日光之方ノ事

(表) 承出

子四月

昨日水戸浪士之儀委細承り書差出置候處右ニ續き其末猶承り候左之通

一水戸山國喜八郎 此人ハ相應之儀々ニ而軍事奉行とニ而も唱美濃部又五郎立原某付次郎とか申様ニ承り候得共忘れ申右三人一同候甚太郎と申せし人の嫡子歟ト云

去ル十日水戸邸出立日光に罷越候由尤公邊に相届候而出立此儀右山國杯に兼々出入之者方内々承り候として聞込候ニ右

ハ浪士取頭として出立候得共其實ハ同志ニ相成居可申との事此二三日前此度日光に集候儀を聞付山國中候山ニハ扱々此舉ハ今六十日程早ありし併最早無詮方此上ハ老後の思ひ出ニ罷越可申と申たる儀有之たる由君公も此四五日ハ御登營も無之由一説ニ君公も浪士共之意ニ被爲成候半と申候得共是ハ無覺束候事

一御輿ハ西山公景山公木像と申事

一最前認置候宇都宮既ニ無滞通行日光ニ着鉢石ニ皆集り居候由いつをも麻上下着用ニ而おとふしく御格通り願出候而御役人差圖ニ隨ひ禮拜仕候由尤十人計り拜禮願候由是ハ右ニ而直ニ此許へ飛脚參り候由此上ハ皆一同押込候歟又ハ右之通御格ニ隨ひ追々少々ツ、拜禮願候歟後飛脚到來迄ハ未タ其左右ハ不相分候由浪士志願ハ最前認置候通之由也猶承り候處東照公之御神輿ヲ奉し其先へ西山景山公像ヲいつをも御輿つぎ出し横濱と志候積りと申事田丸稻右衛門 勅諭ヲ持居候由先年ノ返納不返納ニ而候候勅諭と相申候

一極密ニ承り候水戸の徒目付沼田某長州藩佐久間克三郎と同道一兩日前横濱へ忍び込候積リニ而出立候由是ノ囁ハ町人何卒内々ニいたし

元 治 元 年

七二七



吳よと吳々  
額候よし也

一字都宮家老に水戸浪士兩人罷出何敷談判いたし候儀と申事承り居候處昨日密々承り候得者戸田家ニ而金子貸し遣候敷  
由若左も候ハ、家老ニ戸田某只今一寸名忘申候余程トガリの方ニ承居候ニ付其人應し候敷と申考も御座候事  
一右御警衛として秋田侯是ハ些ト不穩今ハ入替候而ハ猶更宜有之明敷候得共此藩ニ者兼而平田ノ學秋元是ハ人古河ニ警衛之由數計也  
倉内膳正等被仰付候由今度日光御代參之面々ハ警衛之心得最前認置候通之事  
一浪士共日光之儀ハ此十七日を志候事ト相見候との説有之申候右承り候儘を不取敢書取差出申候以上

子四月十三日

田 中 彦 右 衛 門

四月十三日在長崎幕吏三島末太郎は蘭國艦隊長州砲撃の目的を以て一旦江府に集合すべき由を報す

〔木庭文書 加屋齋堅編 私圖能弘道漫記〕

和蘭軍艦一隊三艘 日本海へ出張右三艘之内メデユサ船昨秋下之關通行之折同所砲臺より無故砲彈發し船中所々打破候故水夫等手負或は及即死候間今般我國出張之船ニ申合一先江府へ罷越夫より一同下之關へ進發遂一戰同所和蘭國旗相立候旨メデユサ將デカーセンプロート名シヤンヒ將ヘアーソアレンニス申出メデユサは當月四日シヤンヒ船は一昨十一日當港退帆仕候子四月十三日右長崎幕吏三島末太郎より内密報知書

四月十三日肥後菊池の人東勝右衛門といふ者防州山口城修築奉行となると傳ふる者あり

〔小笠原備前日録〕

四月十三日 晴

荒尾角兵衛來、告石炭之事、菜種之事、留我商船之道、又探長州之事、有山緒之人、在于彼地、蓋稱東勝右衛門、菊

池之産、今在于長州、而爲築山口之爲奉行、云々

四月十四日將軍家茂特に内使服部七五郎を遣して長岡護美國事周旋の勞を慰す

〔御在國日記〕

一四月十四日九半時比 御使服部七五郎様御小納戸 突懸ニ御入來御門ニ而申入有之有之候付御座敷に御案内申上御持せ之、御品々長持より取出し御敷臺ニ而受取御座敷正面に差置此時 良之助様御留守中ニ付詰合長谷川仁右衛門罷出候處 公方様御内々爲 御使被差越候 御意之趣ニ者長々滯京周旋筋添 思召候以後國許に被相越候共不相替被心付候儀者無遠慮被申上候様厚御頼被 思召候此品之發足ニ付乍輕少御内々被下候由御演達有之候右ニ付仁右衛門申述候ニ者 良之助御直ニ御請可申上處今日者尾州様に被召客候付參上其外所々廻勤等仕留守中ニ付 御沙汰之趣者早速參向に可申遣仍而只今御受之所者詰合家老罷出御請可申上哉と申述候處夫ニ茂不及責様を只今御受之振ニ而宜由御申聞候  
右ニ付御禮之儀如何相心得可申哉と相伺候處別段御禮登城使者等ニ茂不及旨土岐殿御側家被仰聞候段御申聞有之候左候者今日良之助留守中ニ而御直ニ御請も不申上事ニ付土岐様迄直書ニ而も差上御禮申上候様可仕哉と爲念猶相伺候得共夫等之儀ニ茂一切不及との御返答御座候  
右相濟直ニ御立ニ付仁右衛門御先立仕御縁取御白洲際迄御送御取次茂添送仕勿論御開門之事

四月十四日水戸激徒等大平山に據る

〔尊攘錄探索書〕

元治元年甲子年 子四月十九日

野州都賀郡朽木町黒川伊右衛門より書狀

元 治 元 年



兼而及御開茂可有之哉當月上旬水府浪士多人數ニ而日光山に立籠可申積を以罷越候處諸御大名様方御固嚴重故屯難相成散亂いふし十一日頃より朽木近邊に立廻り罷在候處十四日晝頃急先觸を以朽木休大平伯と申事故俄ニ人馬用意旁以大混雜仕八ツ時御通行ニ相成凡貳百人計其内五十人計馬上ニ而鎗鉄炮者人足ニ爲持白木造り之輿を警固致し何れも列を正し威光甚しく其勢ひニ之實ニ恐縮せぬものなかりけり御輿之前中納言様御位牌と申事ニ御坐候御休有之夕七ツ時頃御出立相成數多之人馬を以大平山まで繼立申候且大平山と申之朽木町より登里程山手ニ而權現様御座有之別當所坊舎其外茶屋等に止宿逗留罷在候

一翌十五日拾人貳拾人ツ、朽木町に用辨ニ被參品々御誂物等多分ニ有之殊ニ兵糧米之用意等ニおよひ候間今ニも次第ニ寄戰爭可有之さま故演氣味あしく心痛罷在候日々何方共なく浪士相集り當節之三百人余ニも相成居候様子ニ御座候一十七日夕刻右浪士方より金談有之朽木町之物持衆も恐縮之様子ニ御座候且御領主様ニ而も御心配被爲在此後如何成行可申哉誠ニ困り入申候何卒穩成ニ退散いたし候様人々祈居候先之不取敢此段申上候謹言

四月十九日

黒川 伊右 衛門

〔全書〕

野州ニ而其近傍之藩士探索いたし差越候書面内々爲見候ニ付入用丈被取寫如左

水戸浪士沸騰之儀右者去冬歟當春より追々筑波山ニ相集り三月月上旬頃宇都宮今市に罷越拜禮之儀相願種々相難じ拜禮相始メ尤少々ツ、無刀ニ而致し候様子頭分十七人計り拜禮之處如何成故障出來候哉相止申候由夫々例幣使海道方筑波に立戻り候由ニ而十二日鹿沼泊十三日小山泊り之山右ニ付鹿沼の方日光之方双方分々探索之積りニ而石橋ニ而承り候處日光之方ハ皆出立ニ而残り候浪人ハ無之との事ニ付小山ニ而待受承り候處十三日ハ右浪人共鹿沼ニ逗留之由ニ而小山にハ參り不申十四日鹿沼へ罷越見届可申と朽木迄參り様子承り書過鹿沼之方へ罷越可申と打立候處途中ニ而出合候其行列左之通

先拂ひ町役人麻上下着用騎馬壹人徒立之浪士拾四五人袋入鉄炮四挺其次ニ鉄鞭を持候浪士凡貳拾人計り其次ニ袋入長刀夫々白キ輿前從二位大納言源烈公神輿と認有之白張を着し候人足昇之其跡ニ長棒之駕登挺田丸稻右衛門と申事右田丸ハ水戸町奉行ニ而浪士共引戻として罷出候由ニ候得共如何成譯職右黨中之大將分と申事ニ候其次ニ處々騎馬徒立之者付添鉄炮鎗爲持候事凡行列人數百人少々降鉄炮都合拾挺計り乘馬八疋計り内野髮之馬四五疋持鎗三拾本計り尤前後ニ參り候ものも多ク有之惣人數貳百四五十人と申事ニ候尤郷士百姓共も多ク加入仕居候由此日朽木着中の坊ニ案縮細の幕打右神輿昇入其外上の坊并釜佐家等に葵御紋附白幕を打朽木ハ晝休夫々大平山參詣之由ニ而登山之處未タ以テ下山無し追々ニ人數相加り只今頃ハ三百人計り之山大平山之儀ハ本坊に右神輿入を玄關に案幕打表門に白御紋附幕打其外寺并旅籠屋多人數止宿仕居朽木ニも未タ寺并旅籠屋に止宿有之色々旗其分調物いれし往返夥敷事ニ有之太平山にも度々參り見候處此節ハ最早殊之外嚴重ニ相成浪人共坂の上り口々ニ者晝夜見張番ニ而不審之者差咎メ候間容易ニ登山も相成兼候事右迄出行先々ニ而荒増相認候猶後便ニ委細取調へ可申上候以上

五月三日旅窓ニ認ム

右書面寫取差出申候以上

子ノ五月十二日

田 中 彦 右 衛 門

〔風聞書〕

四月

水府浪此節群集所  
例幣使海道富田宿を二十町朽木宿より登里  
程在野州都賀郡

元 治 元 年

五拾石

御末印地

七二二



大平山 蓮 祥 院

此所ニ浪士三十人屯居

右寺中

隱 寺 法 泉 院

此所ニ百三十人屯居

右大將分田丸稻之右衛門外ニ十六七歳位之若侍壹人田丸之伴ニ者無之と見受稻之右衛門年六十才余ニ面白髮外ニ烈公神輿者隱寺奥之間ニ差置左右之簾をおろし前を明々稻之右衛門若士共外三十人程小具足ニ後口鉢巻よて手籠を扣固居候事之由

金吹驛浪士貳百人程 合戰場同貳百人程 日光道中小山宿同貳百人程 栃木宿同貳百人程 宇都宮宿同貳百人程

凡千人余

栃木宿八百伊と中吳服屋に左之通注文はつらひ候由

陣羽織三拾枚 採配三拾本

一戸田長門守陣屋足利邊物持に右浪士方軍用金三千兩申付候由

一右者當四月十五日カ十九日迄之注進也尤注進差出候所之大平山に八百伊と中吳服屋カ參り候由前條兩院カ之浪士ニて中々注進出し兼候由因而八百伊より江戸表に注進ニ參り候事右使之もの淺草天門原梅之院に申來候段右之者申聞候事一田丸稻之右衛門外若士に浪士之もの用向申候ニ手を突候而申候由右若士之何ものノ伴ニ候哉水戸殿家來筋之者ニ者無之様見受候と申候事

四月十五日長岡護美京都を發して國に歸る是日護美發するに先ち關老水野忠精の旅館に赴き藩主慶順中將陸任の辭令を受く

〔鎌田文書〕

十五日京立履 廿五日着

御立即日早打被差立候間拜呈仕候太守様上々様益御機嫌被遊御座奉恐悅候先以今日之良之助様御立前ニ御老中水野様に太守様爲御名代被成御出候様昨夜御留守居御呼出ニ而被仰聞御出被爲在候處太守様別紙之通被爲蒙仰誠ニ奉恐悅候右ニ付而も御時節柄ニ付別段御禮御上京等ニも不被爲及由ニ御座候良之助様へも今曉七半時之御供揃當所(旅館西本願寺)御發歸之段被仰出四時 諸事無御滞被遊御立恐悅至極ニ奉存候殊ニ日和も宜敷定而御道中も御都合と奉存候昨日之二條御城方御小納戸衆上使ニ而御杉重之御看御菓子被進御頂戴今日之御立ニ付乍聊被下候との御儀ニ而右ハ御内々ニ付御禮等何之御手数數ニも不被爲及との御事ニ而數々無殘所御首尾と奉存候

一澄之助様へも十日ニ被遊御着座候筈との儀大坂カ今日御用狀相達不怪御速ニ而重疊恐悅ニ奉存候右田方も御供ニ而壯ニ出立ニ相成申候小生も碌々相滞り居明日カ之南禪寺へ引移り六條ハ引渡等相濟候迄日々出懸ケ可申含居申候何事も此節着府之面々御聞取可被下と諸事相略右迄得貴意度如此ニ御座候以上

四月十五日當賀

道家 角 左 衛 門

御 奉 行 中 様

尙々時下御自重奉祈候大勢引取跡ハ誠ニ大風吹取レ候方も靜ニ相成り是カハ御用も相減所々見物と志居申候奥衆へも別段仕出不申宜奉頼候以上

細 川 越 中 守

過日從四位上 御推叙有之候得共猶又 御所に被仰立之趣並有之候付以 思召中將 御推任被 宣下旨 御所より被

元 治 元 年

七三三



仰出候付從四位上中將被 仰付之

〔御在國日記〕

文久四年  
四月十四日晚水野和泉守様方御留守居御呼出御渡之御書付寫  
一御用之儀候間明十五日立前細川越中守爲名代長岡良之助服綿給麻上下着用和泉守旅宿に相越候様可仕候事  
四月十四日

〔全書〕

一別啓

太守様御用之儀被爲在候付今十五日 御名代として 良之助様水野和泉守様御旅宿に被成御出候様昨夜依御達今朝六時之御供揃て右御旅館に被成御出候處別紙之通被蒙 仰重疊奉恐悦候則御書付寫一通差廻申候右之 良之助様熊本御着懸御花畑に御立寄 太守様に御直ニ被 仰上管候此段爲御含得御意申候以上

四月十五日

谷 内 藏 允

四月十五日日本藩演武場に於ける操練に初めて大砲を加へ點火を試む

〔小笠原備前日録〕

四月十五日陰

本日、本庄講武場而有操練、初加大砲點火試焉、

四月十六日幕府大番頭に令して水戸激徒の暴行につき豫め隊伍編成に關する意見を徴す

〔風聞書〕

四月十六日

河内守殿御渡候御書付

大 御 番 頭 に

覺

此節水府領之者其外浮浪之徒筑波山に相集野州邊所々徘徊暴行致し候趣相聞自然黨類等相増御府内最寄にも相越候儀も難計其時之時宜次第鎮靜方急速申渡候儀も可有之尤御役柄之義兼而心得方も可有之勿論之事ニ候得共非常ニ臨み隊伍之立方從者之組方見込之趣一兩日中ニ巨細可被申聞事

四月

四月十六日本藩二條邊の警備を免せられ尋て守兵を撤す

〔京都返達御用狀扣〕

四月十九日 五月朔日着

藤本よ

以別紙申達候去十六日大目付渡邊甲斐守様御目付戸川鉦三郎様より二條 御城中之口迄御呼出ニ付御留守居代として御城使罷出候處東山裾迄西加茂川南三條通北二條通同新地迄之御固被成御免旨尤寺町御門御固之是迄之通ニ候段御徒目付を以被仰渡候右之段傳奏御月番野宮中納言様町御奉行蒲川播磨守様小栗下總守様に即日口上ニ而御届仕候一右ニ付翌十七日御固御人數等引拂候段御用番水野和泉守様に平左衛門名元之以書付御届仕候右寫差上申候以上今度二條邊御固御免被成候付固人數等今日引拂申候此段申上候以上

細川越中守家來

四月十七日

中 山 平 左 衛 門

元 治 元 年

七二五



四月十七日藩主慶順從四位上中將叙任の口宣位記等を下附せらる

〔文久三年  
京都諸扣〕

雨四月十八日

太守様從四位上中將御推敘任付而之口宣位記等昨日御月番傳奏野宮中納言様御亭ニ而御使者青地源右衛門に御渡相濟候段藤本彌三郎より達有之候事

四月十七日日本藩永屋猪兵衛在郷兵を引率して大坂詰を命せらる

〔文久四年  
機密間日記〕

四月十七日

一 永屋猪兵衛在人數引連大坂詰被 仰付安田源之丞大里八左衛門同人ニ差添在人數引廻被 仰付候事旅輪番帳ニ記六有之候事

四月十七日在府渡邊善右衛門は去る十二日幕吏英國公使との會見及び昨十六日佛國公使との會見の狀況を報告す

〔元治元年  
尊攘錄探案書〕

去ル十二日英國ミニストル備前守様御宅に罷出候押立ハ交代仕來御手數而已ニ候へ共其申出候ニハ長州一條如何御所置ニ相成候哉日本在留之者ハ御上洛ふと種々御取込旁御延引之段之承知罷在候得共各國共本國ニ而之右様御取紛之事件不致承知長々御拾置ニ可相成筋ニ之有之間敷々と申居近々軍艦ニ而人數等も多分渡來可致管尤不沙汰ニ長州へ之向中間敷候得共早々御所置御決定ニ相成度御様子次第ニ之長州に向可申杯申開尤右軍艦到來之上之多人數差置候場所

差支候付横濱表ニ而神奈川御奉行御支配御役人役宅一圓拜借被仰付度御差支ニ候ハ、同所本町通りニ而申三間長サ六百間夫も御差支ニ候ハ、山之手ニ而三千坪余右三ヶ所之内拜借仕度旨願出候由且長州一條之私共は御任せニ相成候へハ日數廿日之内ニハ黑白相片付可申既ニ昨年中薩州杯もあらこなしいたし候故當時之至極人氣居合宜敷杯申開候由此未如何可相成哉甚以懸念いたし候との趣被申開候昨十六日朝佛國ミニストル應接之一通り交代之手數而已ニ而別條不申出却而御老中方御尋之儀も有之候得共一々御返答致し候得之時刻長引最初御約束致相違候付御尋之趣ハ追々書翰を以可申上旨ニ而早々引取申候由途中警衛騎馬歩立ニて都合百四五十人附添ニ相成不怪御手厚候得共ミニストル申候ニ之決而途中ハおそろしく事無之天而已おそろしく存居候趣噂仕候由尤兩國共直ニ横濱表に引取申候由御座候右之通宮田文吉殿御咄有之候由御座候以上

四月十七日

渡邊善右衛門

四月十八日日本藩力を公武一和に盡すべきを以て諸事を節略し武備を充實すべきの國是を決す

〔尊攘錄御建白御國議〕

子四月十八日

申談候趣之書取 備前殿御執筆也

今日之御國是ハ富國強兵ニ有之儀之勿論ニ而其御運ハ簡易無造作之古風ニ復御國力相益御武備整候處眼目ニ可有御座候誠ニ事新敷御座候得共先時世を以其大業を申候得之嘉永六年之夏天下之安危ニ懸り候外夷之大變差起其末次第ニ類敷相成 公武御行違ニ至人心紛亂いたし開鎖之儀不決暴行之者逐年相募り上巳之一件未曾有之變も有之一旦ハ外夷數艦を催し襲來之企も相聞其後長薩上京之一條ハ天下大變革之御處置ニ至不容易 御上洛も有之候得共御一致之御運ニ不至其末大和俱馬之一揆も興り又ハ長州之暴發薩之小戰爭も有之内ニも種々様々之暴行等一々申ニ不及實ニ内外之大至難ニ而八月十八日之變後猶又 御上洛被爲在御一和之御模様ニハ御座候得共長州之一件も有之既ニ此節討手之御

元治元年

七二七



内意も被爲在候ニ至り誠ニ履霜之漸此未遂ニ及ニ血塗ニ至可申詰りハ天下割據ト申ニも至可申哉可恐時勢ニ而此處ニ而ハ益以人心を堅武備を整非常を被戒候外有之間敷候既ニ其前シハ嘉永ニ相顯候付而ハ十年之後ハ必戰爭ニ陥リ可申トハ凡俗も見込候位ニ候得之夫方屹ト心を用候向ニ之今日ニ至武備も整居可申敷若無左倫安因循ニ過候向ハ今日之至狼狽ハ固方之事ニ而實ニ太平之習弊強而不覺悟トも難申可有之候得共今日ニ至候而も尙依然として狼狽も不致候ハ、後日如何可有御座哉御國ニ而ハ右之通之時勢ニ付而ハ追々格外之御節儉御武備筋も厚被 仰付置候得共西洋新發明之利器年を逐而相開候付御筒杯も二重三重之御用意ニ相成莫大之御入費ニ至又一ツツ之東西大御作事 御家督之御大禮加之 御方々様御下向等未曾有之御事柄も有之其内ニ之御凶事も被打續彌ケ上非常之 御上京御周旋筋も被爲在猶又 御方々様大勢被召連御上京ニ而彼是實ニ不被爲得止非常莫大之御出方面已打重候故今日之處御借財を以被押移候切迫之御運ニ差詰り奉恐入候一ツニ之御省略筋等未タ届兼候譯も有之候ハ、其段ハ畢竟同席共届兼候儀ト奉恐入候右之通ニ御座候へ之今日之御國是ハ御武備專之眼目ニ而萬般非常之御省略を以差寄 御内命ニ被應候御處置第一ニ可有御座左御座候ハ、簡易無造作質實之風ニ復御國力も相益候筋ニ御運外無之儀ト奉存候富國強兵ト申も此外ニハ有之間敷哉と奉存候又 公武之御趣意被 仰出を以申候得之 朝廷者攘夷之 叡慮始終不被爲替 幕府々ハ天保以來沿海武備之儀簡易質素之被 仰出追々有之嘉永癸丑以來ハ大艦之事武備之事度々ニ而攘夷之 叡慮も御遵奉之末此節之形勢ニ至候處近ク今正月ハ從 朝廷 幕府ニ被 仰出候由之大略を摘ミ申候へ者入而之天下之全力を以攝海ニ備ヘ列藩之力を以各其要港ニ備ヘ出而之數艦を整ヘ無饒之醜夷を征討シ 先皇膺懲之典を大ニセヨ勉而太平因循之雜費を省キ征討之備を精銳ニシ武臣之職を盡永ク家名を辱候事ふられ汝將軍及大小名今之天下朕ト共一新セんと欲ス民之財を耗ス事ホク姑息之奢を爲ス事ホク膺懲之備を嚴ニシ家業を盡せ怠惰セハ特ニ朕ニ背のミ非ス 皇神之靈ニ叛ク也祖先之心ニ違也天地鬼神も亦汝等を何ト歎云んや右ニ付而 將軍様御受之趣も太平因循之冗費を省キ武備を嚴ニシ御國威を海外ニ輝モヘキ之條件等諸侯ト共ニ勉勵仕 宸衷を奉休恩度付而沿海之武備ニおッテハ益以奮發勉勵武臣之職固守

仕 叡慮を被奉安候との趣御受被爲在候由未タ御觸等ハ無之候得共如斯 王命六拾餘州一定遵奉勿論之儀ニ御座候へハ今日天下之御國是此外有之間敷左候ハ、御國之御國是も攘夷之 叡慮 台意を被爲奉一刻も速ニ御武備充實ニ至候様御處置外無之儀ト奉存候又追々被 仰出候御趣意も一昨年ニハ 公武之御趣意を被爲奉御武備充實ニ至候様御覺悟筋之儀ハ追而 御沙汰之旨ニ而被 仰出ニ之専ら富國強兵之御趣意ニ付 御手許を始稱敷御節儉被爲在御規式等も別紙通ニ而速ニ御軍備相整候様被遊 御覺悟事ニ候御家中も万端前後左右ニ無頓着格別省略不虞之手當行届候様心懸壯年ハ猶更文武ニ身を委惣而御趣意事實相立不申而難叶候付頭々も重疊誘掖いたし候様との趣昨年冬肩衣袴舊復被 仰付候節も惣躰ハ不相替彌以武備充實之心懸專要質素節儉筋ニ深く心を用候様被 仰出置候大略右之次第ニ而時世を考申候へハ前文之通今日既ニ安危存亡之境ニ差臨居 公武之御趣意を申候へハ如右因循を改武備充實畢竟御一新之御趣意ニ有之其起源ハ攘夷ニ基キ前文被 仰出置候趣も有之即今之御勝手向御切迫ト申况而一大事之 御内命も被爲蒙彼是前代未聞之 皇國之大事御國今日之御都合ニ候へハ前文之御趣意を被爲奉御武備整候處を目前ニ可成丈非常之御省略等を以 公武之御趣意相立候ニ至候外無之儀ニ相究候とも存候然處御省略筋等ハ追々被 仰出置候得共不容易御内命も被爲蒙候上之此上愈御軍備專之御趣意を以乍恐御手許を奉始右之御運被爲至候儀者申上ニも及不申一躰之付札 近頃御遠乘之節御簡易之稜々被仰出誠ニ以難有則本文之御趣意御事實ニ被爲顯候御一端ニ而可被爲在と乍恐奉存候儀猶更大小事とホク御省略御武備充實ニ至候様申談逐々と奉伺候儀も可有御座と奉存候 但御武備之内炮と艦との二器方今肝要之御手當筋ニ御座候處兩器共ニ莫大之御入費事ニ而夫のミ御散財を願不申と申ニも至兼是る爲ニ若土豪御人數出張も被出來兼候而難相濟去ハ逆艦と炮とハ 公武之御趣意と申御借財を以も先壹貳艘も御手當ニ相成可申如此大御入費も有之候上ハ地場之御省略も一ト通之事ニ而ハ可及筋ニ有御座間敷候へハ重疊御手を可被盡又側ニハ不得止御場合商法をも被開候而今日之御急迫を不被救候而ハ如何ニも後道之御運見込も付兼申候而其邊之儀も申談居申候而誠ニ恐惶奉案勞居候事ニ御座候



三月 四月十八日比上ノ  
御覽ニ被入候由

四月十八日長岡護美大坂を發し海路佐賀關に向ふ

〔京都返達御用状扣〕

良之助様御途中方

四月廿日

江口直之允上様書

從佐賀關啓上仕候 良之助様倍御安泰去十五日曉七半時之御供揃ニ而四時比六條御木陣御發駕伏見御休ニ而夫上様  
舟被爲召募六半時過大坂御着御帶坂同十八日九時之御供揃ニ而所御發駕御屋敷御門前上様御乘船左候而安治川沖ニ  
而蒸氣船に被爲召即夕七時比御出帆其後段々御渡海今廿日八時過佐賀關御着岸被成御止宿恐悅奉存候明廿一日正七時  
之御供揃ニ而當所御發駕來ル廿四日曉八半時之御供揃ニ而熊本被成御着旨被仰出候（略下）

四月十八日轟木武兵衛獄中より上疏の草稿と共に書を二子に與へて之を教誨し且つ後事を託す

〔探襍録〕

轟寬胤書簡之寫

爲乃兄弟繼續於父之志獄中上書草稿進候點扶書入添削字消皆父之病間誠心之所寓可被致愛敬拜撫如見父熟省候雖乃九  
藏爲若輩父一同 禁闕爲御守衛被差出八月十八日之始末を親敷致關係其已前畏々 朝廷より金子頂戴を被 仰付冥  
加至極難有其元之御身ニ有之彌以勤 王大義忠孝赫然被相勵候は勿論也併若輩上ては其筋疑惑之儀も可有之從同志而  
教誨切瑳可被受候住江甚兵衛殿同御隱居眞之義士其選也正體嚴肅御依頼可有之候父別而荷其鴻恩候事物も難忘乃兄  
弟忠も同様上而報謝可被置念頭候小坂殿一家山田十郎青木彦兵衛佐々淳次郎松村大成加屋榮太皆父之所畏敬之人傑也

他日御免上を相成候ハ、可趨走受指揮候夫立志在存養々々在閑適々々在自得々々在快樂々々無他賢凡不肖之所分也賢  
樂義不肖好利管凡也與賢居壽義與不肖居走利知子不如親乃兄弟凡矣不可與不肖居可與賢焉向後可被致浪人候得は笑止  
とも耻辱とも見侮候人も有之候を夫は時流之人ニ而非知我等者御拘有之間敷候我等父子 國天下之御爲不可不盡力  
御重大之御儀及盡力懸る罪咎之身ニ被 仰付候處は奉恐入候へとも初より甘而御受申上心廣體胖奉對天地所愧慙更ニ  
無之唯々加謹愼心術之御工夫專要也大丈夫可勉強大一等之事浪人と決定致候へは其心不滯凝于外物志さへ相立候得者  
存養閑適自得快樂之地其人之分限ニ應し如何々も成就自癸丑之年至今日迄死す 王事忠臣義士上ニ者七八浪人也乃  
兄弟表準父之志不仕二君不求利祿鍛練文武壯勇士氣沈潜不動時之至を可被相需也其中今日之生活ニは當時柄武士之嗜  
共可相成武器類之細工成々心ニ被好手ニ合候事近津へ相談之上早々御打立可然候右細工手ニ入候迄は困窮可被致候  
へとも志士仁人無求生以害仁有殺身以成仁夫天將降大任於是人也必先苦其心志勞其筋骨餓其體膚空乏其身行拂亂其  
所爲所以動心忍性蓋習其所不能ニ有之候間兄弟和順同居同室上て父之遺訓被致精勵吳候ハ、御先祖代々轟家之面目父  
死而瞑目候矣元定臨別諸子書曰獨行不愧影獨寢不愧衾勿以吾得罪敢遂懈其志老父於是亦言父ニモ何を不漬黃泉之客ニ  
可相成此身御不審中ニ有之候へハ死刑罪被 仰付候賦亦ハ捨方被 仰付候賦未相分其代父之數十年來之刺毛切爪紙之  
古袋ニ幾箇も有之候を淨光寺先榮東側祖父様御並可被致埋候屍下賜候共此例也墓上ニハ段山之庭ニ父之樹置候楨之素  
性枝舞長成之勢有之撰一本可被樹其下榘木ニ面を付父某君墓或ハ遺髮墓と書建之義可配遺物可被配之石塔無用也若罪  
御免上も相成候は、榘木を石塔ニ代家訓ニ被據候は心次第楨ハ後迄も長成之事牌子之事當時高考妣君は其元より五代  
之親ニ被爲當候式之通可被扱候 續道家訓牌子之  
條ニ委細相見 跡之御座之其儘本之通龜中ニ可被納置候父事存念有之候間龜中御列不  
被納此上書御稿此上を奉書紙折懸ニいたし正面ニ轟寬胤君神位と書別ニ神龜を求 新編ニ出  
來合有之 其中ニ被納半間之櫛奇麗ニ  
拵注連繩を張其真中ニ嚴重ニ被据可配遺物は配之父並下ニ可被据也拜禮供物等之事牌子之式ニ同し毎朝燈水を獻可有  
拜禮候當天下御園家御爲守護子々孫々之忠孝乃兄弟年未二十歳内可被致妻迎家門之繁榮實ニ依子孫之衆多候也九藏殿



事御咎中引入之由如何様之被仰付候歟可被謹憚奉恐入居隨分萬事謹讓之心を以人々被恭遜祖母様御初御老養專一ニ存候父事彼是眷念可被致父決死之節政府之様ニ筋筋差出置候言相通候書案申候今改而不申入候何も御放念之事近津水前寺段山鶴迫谷可被會敬者勿論何事も依頼謹讓而可被受其差圖候父より宜敷申候段頼入存候慎追家訓合一冊友竹精舎文集二冊受問錄一冊未作冊文章三十篇計右父之舊稿ニ而亦精心之所寓ニ條間大切ニ御先祖様御遺言入置候三段之單書物箱ニ一同ニ御納可有之文章類可然人も有之候ハ、校正御頼被成度其人之見立肝要也藏書類目錄を拵一部一冊をも記之不散亂様大切ニ可被致讀誦候二月廿一日御城内本牢ニ被差移候處坂崎氏津崎氏懇切ニ被致吳別而津崎氏ハ世話ニ相成申候兄弟當在心事右迄申入候間病臥ニ而意之所不及御推量被下度早々頓首

歲在甲子四月十八日

蕪 武 兵 衛

蕪 九 藏 殿

蕪 胤 花 押

蕪 學 殿

〔全書〕

蕪木武兵衛胤胤中上疏

天下御國家。重大の御儀不肖微賤之身を以妄に體任仕候は奉恐入候得共體任仕候人無御座も亦奉恐入候恐入與恐入輕重相見自體任不仕候而ハ彌増奉恐入候間決心而體任仕爾來凡十有餘年以此交於人以此事於君以此立於天下所謂如此而生如此而死其數三矣欲掃攘外夷解萬民塗炭之患苦郵日本之武威於地球内使彼悉皆馴服一也 皇威弘張 王業復舊置皇國於泰山之安以奉慰 叡慮二也此二者之基本立自御國御國の盛徳を天下後世に垂三也今願所共立而交良友故人十八九死於王事矣寬胤獨何人也於此三者三會其機無轉一事而碌々長久於世矣今日之事不可不窮必死而勉強焉癸丑之年七月江戸詰被仰付同九月江戸着仕墨夷入寇之次第悉詳之實不堪憤懣之至慨歎仕候得とも可致様無御座於是多與天下豪傑之士結交天下之御爲御國家之御爲如形周旋盡力仕於御國者故米大夫を初段々愚存之趣奉言上候其略當時滿朝之御役人柔弱

如婦人恐怖醜虜之囁嚇案難塞胸長談議不能及一之決之字復々御因循ニ而其<sup>大</sup>機會可被爲失之萌眼前ニ御座候間何卒大守様此處被思召上被遊御登城於大廣間是等之處御論判攘夷御先鋒被遊御願取候は、大者立小者從朝議御變遷一之決之字ニ被爲及候は必然之儀ニ而御國は莫大之御人數被召登置候御儀ニ御座候得は脇邊御構無御座攘除自御國被遊御手初度其大機會此一舉ニ可有御座候間何卒早々可被爲有御決心其趣談上言仕候へ共到頭其儀御採用不被仰付殘念ニ奉存候又與天下之士計置候事も段々及變態混雜其中類類も及退帆候間省其身之不肖退而沈黙仕候是失其大機會一度ニ而御座候其後京師不穩ニ付追々爲聞方人差出申候島津三郎殿上京之儀壬戌三月中旬ニ御座候處從前承知仕居。右ニ付而ハ追々同志中談合等仕候儀も御座候内說承候へは三郎殿説は是迄關東之御處置御違。勅意御遵奉ニ相成候様取計若御用<sup>開是非とも此節</sup>ひ於無御座は兵馬之力を以相糺可申との事田中謙助有馬新七并存念ハ於京師酒井若狹守様杯奉惱 叡慮候好吏共悉討取關東之罪相糺と云小松帶刀大久保正助等は三郎殿田中有馬ニ不相拘東西ニ懸專施計策候由當時京師之間諸浪人馳集不容易企御座候向種々相唱既ニ天下動亂之萌も相顯人々懷危疑居候折柄島津氏此兩端之説を持上京有之候へは京師表如何成大變出來候も難計諸浪人之模様九州諸藩應援蜂起臣之周旋盡力之次第ハ此時委細奉言上候通ニ御座候乍恐於此方様天朝之御危難可被遊御傍觀様も不被爲在 玉體を奉驚動候様相成行候而は難相濟御座候間宮内御二方様之内御上京 禁國被遊御守衛若不軌之者近 禁國候は即被遊御取鎮近者無御座候は、只々嚴重ニ四方ニ無御構被遊御守衛而已御模様ニ寄天氣御伺令を四方ニ被遊御傳候ハ、執簡而施廣所謂破竹之勢ニ而天下誰人禦之是其大機會ニ可有御座候間於臣別段上書仕同志中打揃奉願候仕台ニ御候得共其儀不被爲叶御模様ニ付御人數ニても被差登度達而奉願候處一旦相州御備場御人數御引上ニ而被差立候へとも從途中御模様被爲打替其儀も御差止ニ相成失千載之大機會遺恨如山殘念千萬奉存候其後愈以京師不穩ニ御座候間同志中上書上言只管奉嘆願候通ニ御座候處霜月中旬良之助様被遊御上京於臣儀も御供被仰付住江甚兵衛殿宮部留藏一同京師表開方諸事御着前御都合仕置候様御内意を以御先ニ被差立更加至極難有仕合奉存候然處御上京混物被遊御延引候ニ付而は、京師之御受如何ニ可被爲有御座候哉奉存念實に踏薄氷心地仕罷登

元 治 元 年

七三三



彼是非常之心配をも仕乍恐 天朝之御模様竊ニ奉伺候處流石御大國ニ被爲在御受先七八分。御座候間實ニ再生之思をなし難有奉存候尋而良之助様御着京非常之御英斷三條様は勿論阿因兩侯御列正義之御方々被仰合日夜御苦心被遊御周旋候ニ付人々改耳目當時加御國除薩州肥長土三藩と相唱奉贊美候臣儀御蔭を以十死一生之盡力度々仕上冥加至極難有仕合奉存候然處二月中旬俄に御下國之御模様ニ而御供被仰付御内意御座候間段々存念御内意中上候處於御國海防之儀ニ付被召仕御用御座候間被召連御下國可被遊との御儀ニ御座候間今日京師御黨派相立禍心包藏幸未表發仕候へとも累卵之勢釀申候ニ付而者暫御滯京ニ而被遊御盡力度同志中より御内意中上候處於御國許無御據儀被爲在此節ハ是非共可被遊御歸國候へとも京師表若御變動も有之候ハ、何時ニ而も御上京可被遊爲其廣吉半之允列可被御殘置候との御儀ニ御座候間乍恐御盟中上候程返々奉願何も御請申上候臣儀御發駕御前日ニ關白様へ御暇乞奉參殿明日歸國仕候間爲冥加拜謁歸國仕度奉願候處從關白様被爲以諸大夫御意ニ臣儀於 朝廷御用被爲在候間今暫滯京仕候様被仰付答ニ候追付筋々御達可有御座幸參殿仕候ニ付御内分被仰聞國許之模様如何ニ而可有之哉拜謁之儀ハ今日ニ不限候との御儀ニ御座候間直ニ罷歸右之段奉伺候處早々御斷可申上旨被仰付御附役大矢野 御目附 中西傳 被差添重而奉參殿臣儀於國許海防之儀ニ付無據用向申付候答ニ決定仕居且又同志共ニ而年長ニも有之旁供方申付置候間何卒滯京之段乍恐御免被仰付被下候様御附役より御斷之御内意被申上候間於臣も此趣を以強而御免被仰付被下候様奉願御供ニ而罷下申候此節之御上京良之助様不一方御周旋嘸々御心配爲被遊と難有奉存候唯恨は昨春被遊候ハ、御功必倍之併京師表今日之勢ニ而は不遠季係之憂不在顯與蕭牆之内ニ可有御座。彼是奉配慮存念居申候處同五月 禁國爲御守衛被差登大阪ニ而姉小路様御變承知仕自推其不脫京着仕候處右御吟味御用懸被仰付姉小路様御儀ハ於寬胤別段御懇命被仰付天下之御爲は勿論私を以ても難默止處強而被仰付候間御請申上薩州田中雄平一同被召捕入獄被仰付置候仁禮源之允初段々被及御吟味其由來得と熱察仕候ニ其形跡如何ニも中川宮様薩州家之手ニ出候向ニ相見證據茂御座候間宮様御家來伊丹藏人山田勘解由被召捕御吟味被仰付候先是既ニ薩州は九門内御差止於宮様も何と無御參 内茂不被爲在御引籠ニ相成近衛様ニ條様德大寺様

御始御同腹之御方々近衛様御別業ニ而御出會被爲在候御模様愚陋之會津家佞諛を以其間ニ往來撰ニ武力を以致横行何共不穩次第ニ御座候間何卒無事御鎮靜ニ相成候様本ノ京師一體之御模様を奉拜察候に紀綱不振。上節目不明。下管轄無法多々不辨猶欲激風俗勵士氣弘張 皇威只管求治給事御切迫ニ而如何ニも事混雜ニ而已罷成角々之御手詰不被爲屈矣止甲寅之後奸臣横道路イ忠臣就戮 朝廷今日之御事體ニ被爲進。實ニ天命ニ而人力ニ無御座候間先當分之處御地居爰ニ被爲据使人明其耳目知其方狡黠不得爲姦暴慢不得。法御本根を大丈夫ニ被爲堅正々堂々被遊御進歩奉存候得共微賤之力ニ及不中其比於 朝廷は長州願立之儀ニ付被爲在御混雜姫路藩河合惣兵衛存附ニ而水戸藩梶清右衛門申合於關東將軍様ニは 勅意被遊御遵奉候へとも根本攘夷之儀ニ至り兎角ニ御役々御因循ニ相成將軍様と相違仕候へは如何ニも殘念ニ候間今一應水戸紀州尾州津山を初上京之諸侯申談是非共 勅意御遵奉ニ相成候様。唯合相調候山ニ而於御國も何卒御同意被下候様ニと相談仕候ニ付此儀彌以調達仕候趣ニも有之候ハ、御名代衆迄申達御模様ニより可奉願所存ニ而彼是心配仕候内十八日之。變ニ相成申候夫五夷雖賤強敵ニ罷在候へは海内一致人心協和之力ニ無御座候而は拒絶攘除難相成君臣之大倫根於天性天地之常經無御座候ハ、所存之筋も御座候得共空敷吞聲申候中川宮様會津家島津氏殊更寬胤是迄之所置ヲ被爲憎會津家より已ニ討手之人數をも被差向候模様ニ付從大佛本陣寺町淨華院へ引取候儘來候ハ、可及。一戰毎夜貫甲冑隊長初凡三晝夜待懸候處其中南禪寺御本陣より臣儀一人にても南禪寺引取候様御内意御座候得共何之色も不見爲逃去と被申唱候而は彌御國辱ニ相成可申候間事相分り候迄は引取候儀御斷申上候處御名代衆深御懸念ニ相成種々御懇篤之心配を被爲持御國許へ被差下候其砌三條様御落着何方迄も罷越得と奉伺御前様被遊御安心候様御奉行迄申達候様被仰付八月廿三日京師發足罷下り候途中大阪表ニ而河合惣兵衛へ遷返仕候惣兵衛儀ハ腹心之朋友ニ而此節之一條始終及相談候儀も有之於姫路大臣之後ニ屬し得君寵幸當時於國侯ハ第一之御老中職ニ被爲在右惣兵衛從是直ニ關東へ馳下此節京師大變之次第前後一々及言上是非曲直之辨明干天下候様從關東御所置有御座度御進メ可申上左候得は板倉様當時正義之御聞も被爲在候へは其御趣談如何共相成可申と存付候間惣兵衛へ申候ニハ此節之大變中川宮様